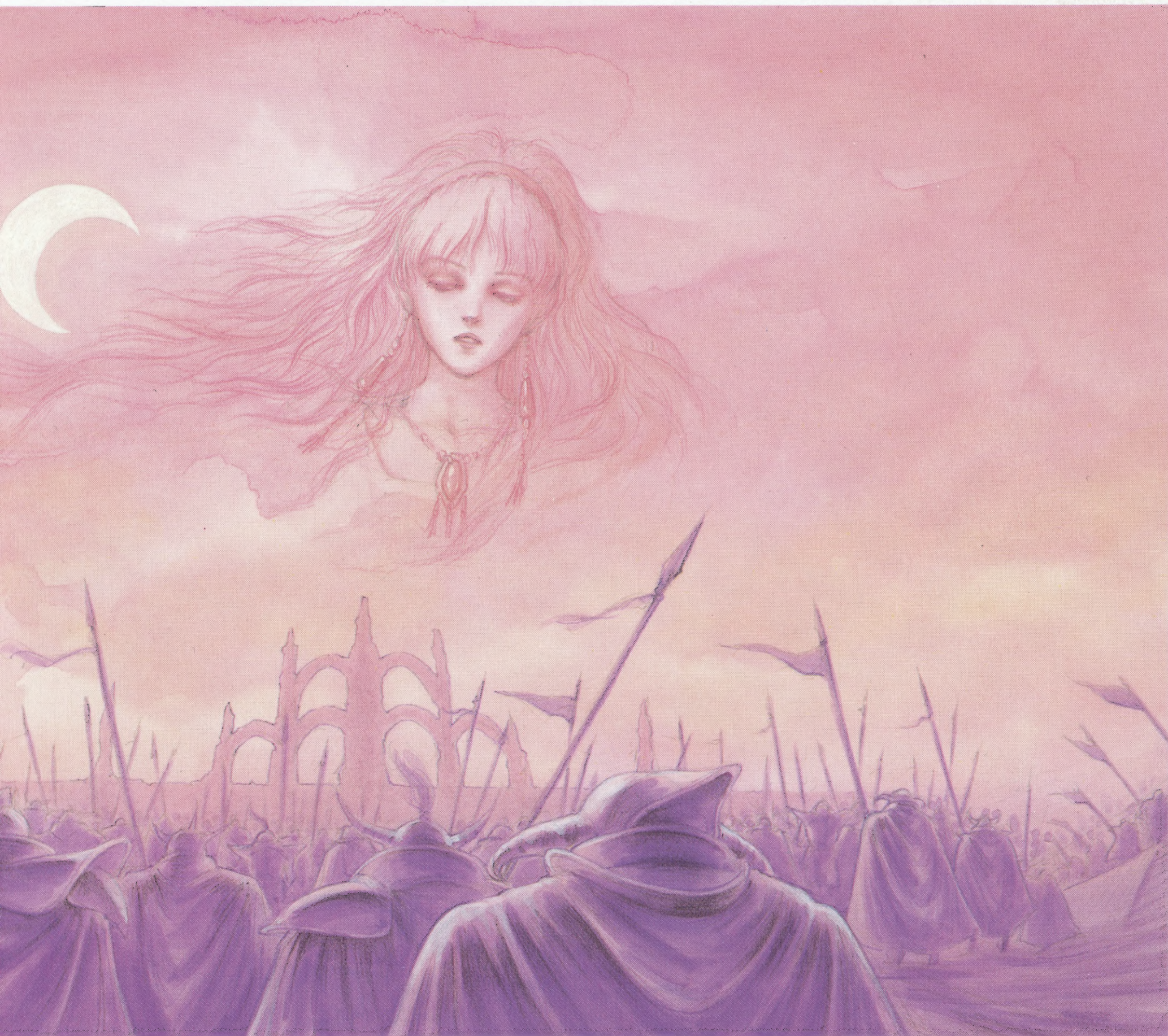
FUTABASHA FANTASY NOVEL SERIES
DRAGON SPIRIT
［小説］ドラゴン・スピリット
【蒼き竜と赤輪の勇者】
In Midguld a medium said, "When a bright sun shine shaded away,
a night mere had come from the deep darkness…" That prophecy made
people be fearful, and terribly that became just a real thing.
In such case, people couldn't but believe "a blue wing"
Then, beyond a distant way, a hero Amuru had arrived. He had the sign of
a dragon's relation in his eyes, which seemed as "a corona eyes".
Amuru changed his figure into a blue dragon,
and just he got fighting to save the land of Midguld.
[AUTHER] YŪSUKE FUWA
不破悠介・著

DRAGON SPIRIT

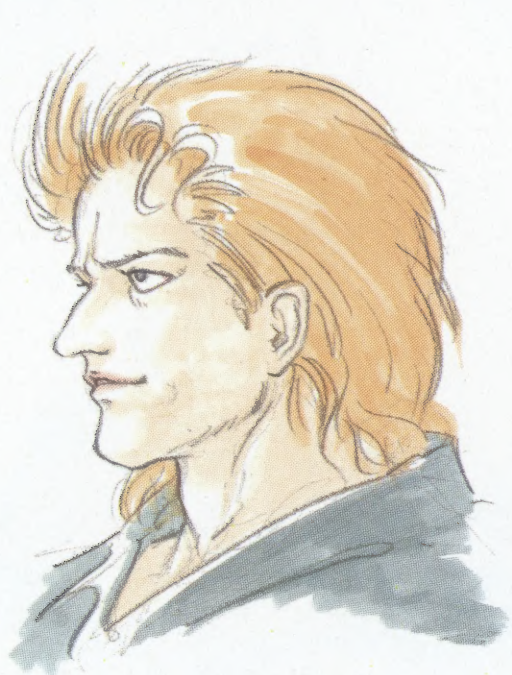
In Midguld a medium said, "When a bright sun shine shaded away,
a night mere had come from the deep darkness···"
That prophecy made people be fearful, and terribly that became just a real thing.
In Such case, people couldn't but believe "a blue wing"
Then, beyond a distant way, a hero Amuru had arrived.
He had the sign of a dragon's relation in his eyes,
which seemed as "a corona eyes".
Amuru changed his figure into a blue dragon,
and just he got fighting to save the land of Midguld.

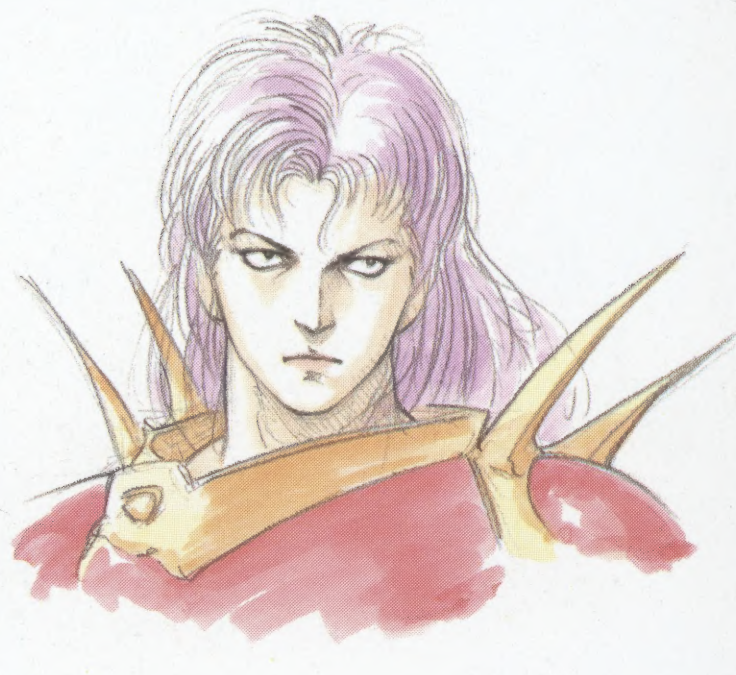
そこに、闇がいた。
邪悪な意思の塊が、聖龍を待ちかまえていた。
暗黒神サウエル——血も凍る寒さの氷の間に、伝説の破壊神が聖龍の倍はあろうかという身体をうねらせていた。
何者でもあり何者でもない。顔は龍、上半身は人、下半身は蛇。すべての部分が何かに似ているが、全体でみると何物にも似てはいない。瞳には純粋な邪悪の意思をはらみ、耳元まで裂けた口は狂った笑みを浮かべているようだ。
アムルの背骨に嫌悪と恐怖が走った。

アリーシャの神託は、明らかにミッドガルドの敗北を予感させる言葉だった。「陽光蝕される時、闇の彼方より悪夢訪れたり……」

CHARACTERS

アムル・ラル・ラフィエル
赤輪の瞳を持つ龍族の末裔。聖龍ブルードラゴンの秘密を握る本編の主人公である。国境守備隊の隊長を務める。

アリーシャ・ラル・ミッドガルド
ミッドガルド王国の王女にして、神殿巫子団の最高位者。アムルに心を寄せる、この物語りのヒロインである。

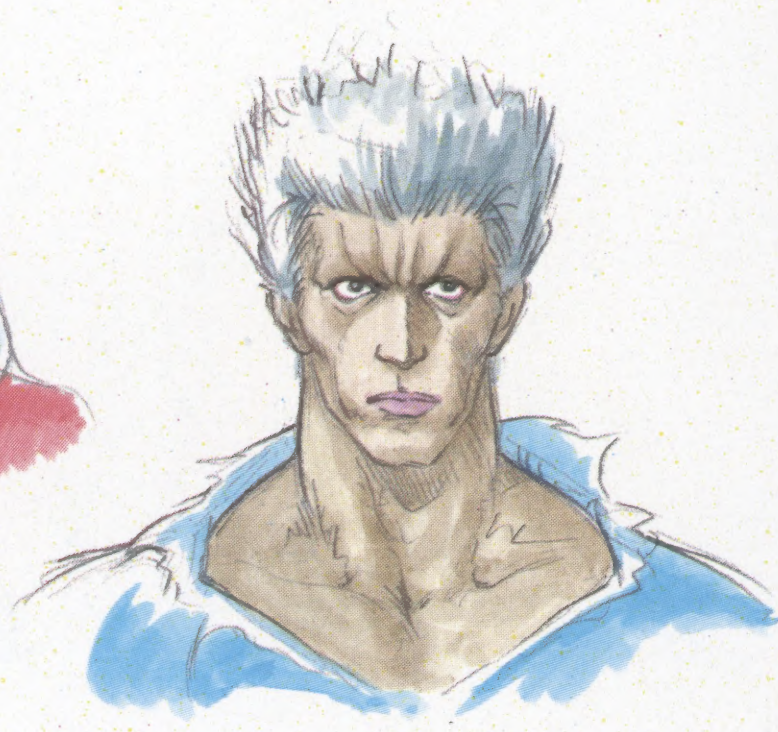
巨人対魔人、声のない気合いが響いて、二人は同時に駆け出した。

ジン
国境守備隊の一員。素速い身のこなしと気転で名を売る、アムルの腹心のひとり。

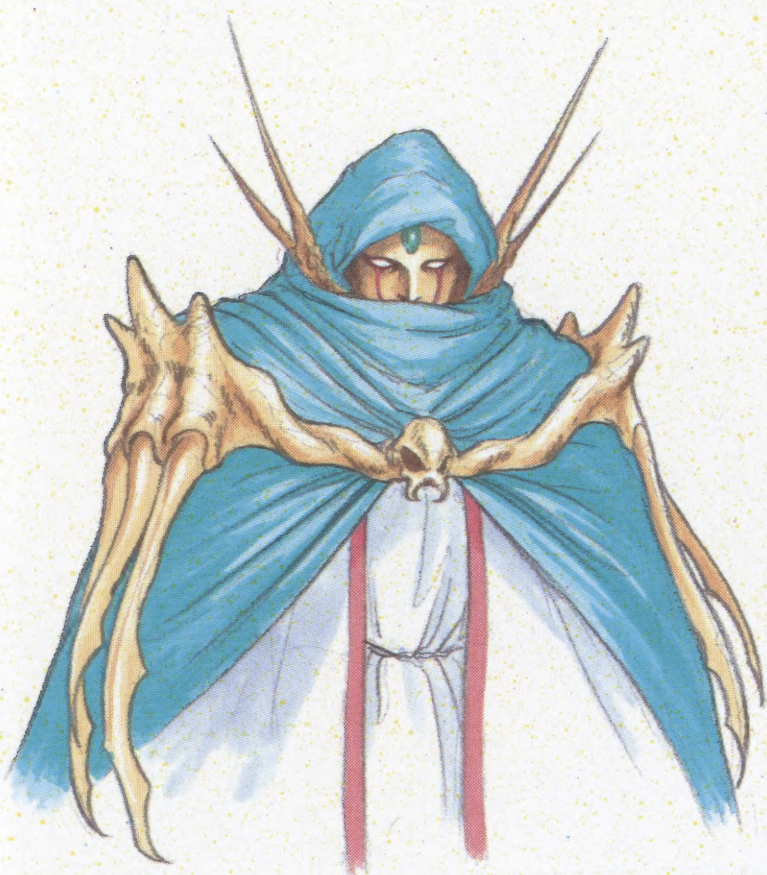
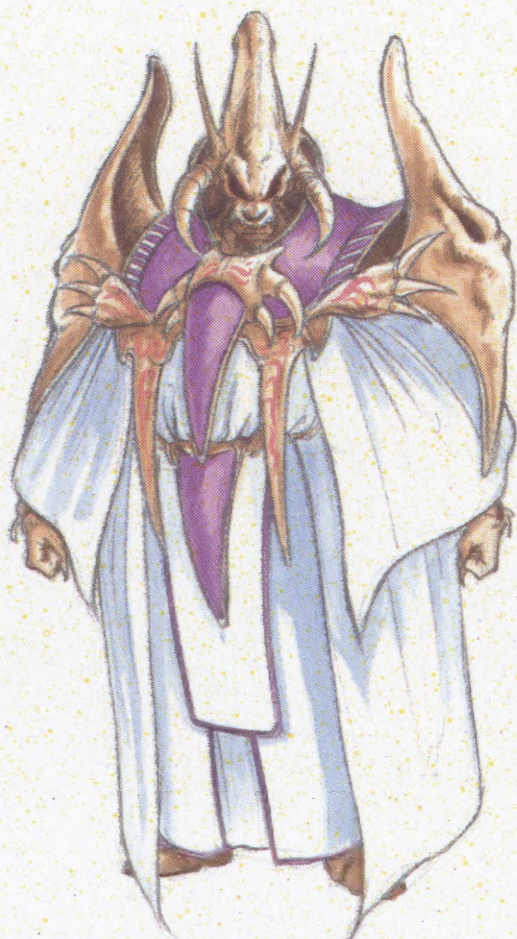
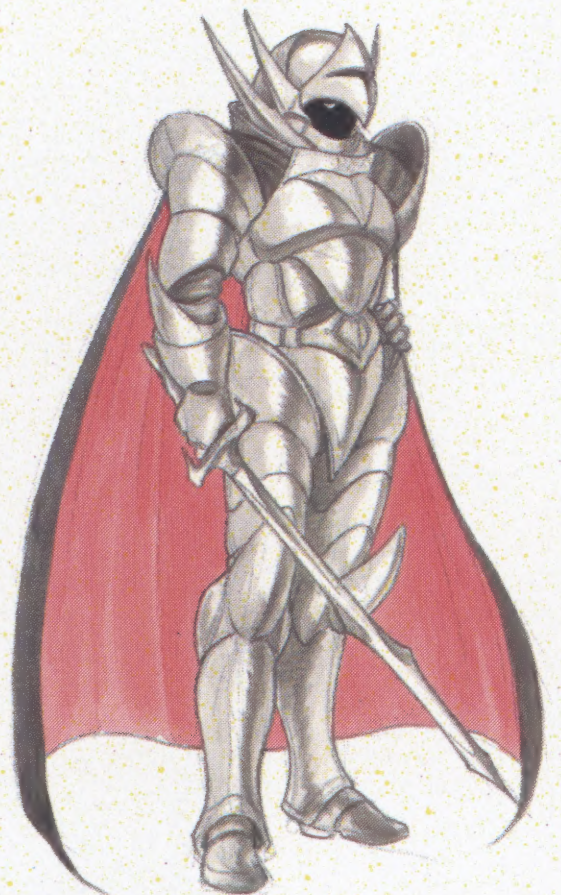
ターナ
大司祭オードンに仕えるウルドの巫子戦士。アリーシャの幼なじみである。

ライン・フェル・ベルバード
ミッドガルド第三近衛隊の隊長。騎士の運命(さだめ)をつらぬく一途な青年である。

邪悪世にはびこる時、碧き翼は天に舞う。剣を掲げよ。希望はそこに現れん…その言葉通り、剣を天に向け突き上げた。アムルの中で何かが弾けた。

CHARACTERS

ラオス・ログ・ミッドガルド
自ら慈悲王と名のる気高きミッドガルドの国王。ゴズアル軍を倒すべく挙兵する。

大司祭オードン
ミッドガルドのみならず太陽神を仰ぐ全ての人々にとっての、最高の教祖である。

ファド
同じくアムルの部下である国境守備隊の一員。褐色の巨軀で敵を打ち倒す猛者。

村の中心に、家一軒ほど優にある巨大な妖花が咲いていた。毒々しい赤と青の花弁は厚ぼったく、その中央には大蛇のような雄しべがのたうっていた。―邪獣神グリテリアス。

魔導師ガルダ
ロッグウェルの参謀にして暗黒神の司祭。
滅びの王ザウエルの復活を企てている。

アズ・ロッグウェル
暗黒神信仰をもって大陸を席捲するゴズアルの国王。全土に滅びと死をもたらす。

シグルト
火龍魔剣(サラマンダーブレード)の使い手である謎の銀騎士。
翼龍フーヴァニールを繰り天を駆ける。

魔導師ガルダの呪文は邪悪な響きに満ちていた。浮かぶ生首の唇がひくひくと動く……。
「出でよ、光に封じられし暗黒の王、絶対の暗黒神ザウエルよ」そして——闇が吠えた。

双葉社ファンタジーノベルシリーズ

小説ドラゴン・スピリット

【蒼き竜と赤輪の勇者】

不破悠介・著

DRAGON SPIRIT

In Midguld a medium said, "When a bright sun shine shaded away,
a night mere had come from the deep darkness···"
That prophecy made people be fearful, and terribly that became just a real thing.
In such case,people couldn't but believe "a blue wing"
Then,beyond a distant way,a hero Amuru had arrived.
He had the sing of a dragon's relation in his eyes,
which seemed as "a corona eyes". Amuru changed his figure into a blue dragon,
and just he got fighting to save the land of Midguld.

CONTENTS

目次

カバーイラスト／生頼範義
本文イラスト／松下徳昌
デザイン／ネクスト
ゲームデータ／永富盛夫
編集・制作／レッカ社

プロローグ

山道を、異形の鎧を身につけた男が、ゆっくりと馬を進めていた。
それが、スコットが狙う相手だった。
アズ・ロッグウェル。蛮国ゴズアルの国主、豪放にして残忍、その非情さで大陸全土に《北国の雷暴君》の名を知らしめている。
一段高い崖の上から見ているスコットでさえ、男が放つ禍々しい気配には圧倒されるものがあった。それは明らかに魔道の気だった。
――やはり、自分の勘に狂いはなかった。奴らは、魔道の力でこの大陸を制覇しようとしている。
もはや、何のためらいもなかった。
彼は剣を抜くと、馬の腹を蹴り上げた。崖を一気に駆け降りて側面から襲いかかる。この断崖だ。いかなロッグウェルといえど、横から敵がくるとは考えていない。奇襲を受けたのに気が付いたときには、もう、奴の首と胴は離ればなれになっている。
が、その時突然、不気味な地響きと共に、大きな揺れが山間を襲った。巨大な地震だった。おびえた馬をなだめるように、手綱をひく。
「ま、まさか……」
遥か西の空、巨大な火柱が、天を裂くように噴き上がっていた。

「ベスパロス山が、あの眠れる王の山が噴火するとは……」
不吉な予感に襲われて、スコットは眼下の山道を見た。どこに消えたのか、ロッグウェルの姿が見えなくなっていた。
「気づかれたか！」
後を追おうとした彼の背後から、突然、野太い笑い声が響いた。
「捜しているのは、儂のことかな」
魔の国主はそこにいた。
男も、彼を乗せた馬も、大きく太い。炎の照り返しが、その赤銅色の鎧に奇怪な陰影を刻んでいる。
眼を放したのは、瞬きするほどの間だ。その間に、この崖を登って来るとは、到底人間業とは思えない。スコットは気を呑まれて、ロッグウェルを見ていた。魔人は低く笑っている。
「たった一人で、この儂の首を狙うとはいい度胸だ。が、奇襲とは、ミッドガルドの騎士らしくないな」
「ミッドガルド？　聞かぬ国だな」
スコットは言いながら、馬の向きをゆっくりと変えていった。ゴズアルの国主暗殺の旅に出た時から、身分や出自を明かすものはいっさい身につけていない。自分とミッドガルド国のつながりを示すものは何一つないはずだ。
そんな彼の態度をあざ笑うように、男は言った。
「まあよい。どこの誰だろうと行く先は一つ、闇の国だ」
ロッグウェルが剣を抜いた。

ムンッと邪悪な気が満ちる。
スコットの背筋に一瞬冷たいものが走った。それほどこの男の剣は威圧感を持っていた。
——勝つつもりでは、倒せぬか。
スコットは、自分の甲冑をかなぐり捨てた。彼が身につけているのは薄いレザーメイルだけになっている。投げ捨てた甲冑が、音を立てて岩肌を転がり落ちていった。
奴の剣にかかれば、自分の甲冑など何の役にも立たない。なんとしても奴の第一撃をかわそう。かわしざまこちらの剣をたたき込む。どちらにしろ、勝負は一撃だ。スコットの中で、意識が一点に集まり始めた。ざわざわと、背筋を熱いものが疾ってゆく。
スコットの瞳に、赤い輪が浮かび上がっていた。
「ほう」
彼の変化に気づいたのか、ロッグウェルは小さく声を上げると、間合いを取り直した。
「言葉で語らなくても、身体が己の素性を明かしておるわい。それが噂に聞く、龍族の《赤輪の瞳》か」
謎めいた言葉に、しかし、スコットは何も答えずロッグウェルをにらみつけている。
馬上でのにらみ合いは、時間にすればほんの数秒のことだった。が、その数秒の内にどれだけの集中ができるか。それが勝敗を分ける。引き絞った弓が放たれるように、二人の騎士の緊張は弾けた。
先に動いたのはスコットだった。馬をせめ猛烈な速さでロッグウェルに近づいた。
ロッグウェルの剣が彼めがけて疾ったその時、スコットは思いきり手綱を引き、鐙を蹴り上げた。大きく跳ね上がった馬の腹に、魔人の剣が突き刺さった。

「ぬう！」
ロッグウェルは思わず声を上げた。スコットの姿はもう馬上にはない。敵の剣が愛馬を貫く寸前に飛び降りて、ロッグウェルの横まで駆け寄っている。馬に剣を取られた魔人のわき腹ががら空きだった。そこに食い込む自分の剣のイメージが見える。
勝った！——彼は、剣を突き立てた。
が、次の瞬間、悲鳴を上げていたのは、スコットの方だった。いったい何が起こったのか。彼の両手の手首から先が消え去っていた。
ふしゅう。
ロッグウェルが兜の下から、濁った息を吐いた。
彼の鎧を喰い破り、奇怪な生き物が顔を覗かせていた。鳥のようでもあり翼を持つとかげのようでもある。チロチロと真っ赤な舌で身体中に浴びた返り血をなめていた。しかも、その怪物の下半身はロッグウェルの腹と一体化していた。
その怪物が、スコットの両手を食いちぎったのだ。
「……そ、そんな、まさか」
呆然とするスコットの眼の前で、怪物は再びロッグウェルの腹の中に潜って行った。
「終わりだ」
魔人が剣を振り上げた。
「お待ち下さい、ロッグウェル殿。殺す前に少し聞きたいことがある」

いつの間に現れたのだろう。暗緑色のローブに身を包んだ痩身の男がロッグウェルの後ろに立っていた。その顔に黄金の仮面が輝いていた。額に緑色の聖石を埋め込み、耳の辺りからは長短二本の角が伸びている。その切れ長の目の奥は暗く、口元にはどこか皮肉な微笑みが浮かんでいる。冷たく奇怪な仮面だった。

「久しぶりですな、スコット・ログ・ラフィエル」

「貴様、やはりゴズアルに……」

仮面の男が、膝をついたスコットの方に近づいてきた。

その男を見て、スコットはうめいた。ともすれば遠のきそうな意識を奮いたたせて、立ち上がろうともがいた。

「無駄はおよしなさい」

動くスコットの頭を右手で押さえ込んだ。何やら短い呪文を詠唱した。その長い指が、兜を突き破り頭蓋骨を砕いて彼の頭の中に沈んでいった。スコットはあらがうこともできずに、この奇怪な男のなすがままになっている。

「ガルダよ、それがおぬしが恐れる龍の力か。話ほどではないな」

ロッグウェルが、ぼそりと言った。

「龍族を見くびってはいけません。まだ、残党がいるはずです」

ガルダと呼ばれた仮面の男は、まるでスコットの頭の中を探っていくように、彼の頭蓋に埋めた長い指を細かく蠢かせている。何を知ったのか、その指の動きがピタリと止まった。

「……ほう、息子ですか」

スコットが愕然（がくぜん）とした表情になった。
「させんぞ！　アムルにだけは手はださせん！」
「……それが名前ですか。覚えておきましょう」
また、西の空に火柱が上がった。その炎が、仮面の男に、微笑んだような翳（かげ）をつくった。右手に力を込める。骨の砕ける音がした。
ぎあああああああああああ。
騎士の悲鳴が空に響いた。
激しく噴火するベスパロス火山の噴煙（ふんえん）が空一面に広がり、世界を闇に包もうとしていた……。

第I章
辺境の勇者

I

出窓から入ってきた朝の風は、アリーシャの肩までかかる金色の巻毛をなびかせると、螺旋階段を駆け上っていき両開きの厚い扉にぶつかって消えた。ひんやりと湿った石造りの塔の中に、かすかに新緑の香りが残った。

その香りに誘われて、彼女は出窓から身を乗り出した。

空は低く、灰色にかすんでいる。この大陸独特の気候、〝灰雲〟のせいだ。この一〇年収まることのない火山活動が、噴煙のベールをつくり、空全体を覆っていた。

それでも、風は柔らかい。

薄絹のベールをかけたような〝灰雲〟の向こうで、おぼろに浮かび上がっている太陽も、今日は心なしかその輝きを強めているようだ。この都を幾つものエリアに分けている運河の水も、すっかり温んでいることだろう。

シルドアレンの街にも、短い春が訪れていた。

いくつもの家から、パンを焼く煙が上がっている。

運河の上をゆっくりとすべっていく小舟。

桟橋に待ちかまえた商人たちが、船から荷を降ろす。

積荷は朝づみの野菜や新鮮なミルクだ。

大通りで開かれている朝市に運び込まれていく。

そこだけは、もう昼間と変わらぬ賑わいだ。
アリーシャは、この南の出窓から見える風景が大好きだった。
《太陽神の祭塔》、太陽神アーリアの神殿の中でも一際目立つ八階建ての石造りの塔。その最上階は祭壇となっていて、立ち入れるのはミッドガルド王国の王女にして、神殿巫子団の最高位であるアリーシャ・ラル・ミッドガルドだけである。
ここから広がる風景は、彼女一人のものだった。この街の四季を、アリーシャはいつもここから眺めてきた。
それが、《神託》に入る前のささやかな楽しみだった。
国の大きな行事の前には、ここに閉じ籠り太陽神の託宣を受ける。天災の予測、戦争の勝敗、一国の趨勢を占うその儀式は、一八になったばかりの少女にとっては、少しばかり気が重くなる務めなのかもしれない。
それをなぐさめてくれるのが、愛すべきシルドアレンの街と。
そして——。
(アムル……)
自分の心にその名が浮かんだことに気づき、アリーシャは一人、顔を赤らめた。
口に出したわけでもない。心の奥の奥、その片隅を彼の面影がチラリとかすめただけだ。それでも、この神聖な場所でそんな想いにとらわれている自分が、恥ずかしかった。
初めて彼を知ったのは、もう六年も前のことだ。
一二歳の誕生日を迎えたアリーシャは、南の神殿都市ウルドに向かった。大神官オードンの洗礼を受けるた

めである。この洗礼を受けてはじめて神殿巫子団の最高位の資格が得られるのである。
かつて、太陽神が聖龍とともに暗黒神を打ち倒した伝説にならい、龍の姿を模した馬車に乗せられた。三昼夜の行程とはいえ、彼女にとっては、初めての長旅だった。
二日目の夜、その旅が惨劇に変わった。
長い丘陵地帯を抜け、見晴らしのいい草原の宿に泊まったその夜、突然ゴズアル国の兵に襲われたのだ。
暗黒神を仰ぎ、ミッドガルドを最大の敵国と狙うゴズアル帝国にとっては、太陽神の巫子である王女アリーシャは格好の標的だった。旅芸人の一座に化けたゴズアルの暗殺隊が、宿に火をかけたのである。
王国の領地内であり、難所を抜けたというちょっとした気の緩みをつかれた奇襲だった。燃えさかる炎の中で、アリーシャの護衛兵たちは、次々に倒されていった。
その時、アリーシャを守ったのがアムルたち、少年兵だった。
近くにある近衛兵育成のための士官学校、その生徒達が急を聞き駆けつけてきたのだ。
一五、六の少年たちが、手練の暗殺部隊を相手によく戦った。多くの犠牲者を出しながらも王女だけは守り抜いたのである。
アリーシャは、その時のアムルの姿を、はっきりと思い出すことができる。
炎にその顔を紅く染め、懸命に剣をふるう彼の姿を。
うまいとはいえない。あまりにも直情な剣だ。老獪なゴズアル兵に翻弄されている。
が、翻弄されながらも最後には敵を倒す。
十、相手から斬られて、一、相手を突く。その一が致命傷になる。

不思議な剣だった。
そんな彼の戦いぶりをアリーシャは、魂で、命で斬っている。そう感じた。美しい、とさえ思っていた。
目の前で、人が血だらけで倒れていく。
血しぶきが飛ぶ。骨が砕ける。悲鳴が聞こえる。
熱い風が肉の焼ける匂いをのせて来る。
敵も味方も、たった一人の少女のために命を捨てていく。
その中心にいるのが、この殺し合いの中心にいるのが、自分だ。
直観的にそう悟った一二歳の少女は、深い悲しみにうちひしがれ、初めて見る凄惨な風景に心の底から恐怖しながらも、それでもその少年から目を離すことはできなかった。
無事に洗礼をすませシルドアレンに戻ってからも、心の片隅に彼の姿が残っていた。
恋、とはいえない。太陽神の巫子である限り、神以外の何物にも心を預けてはならない。それが戒律だった。
が、一年前、立派に成長したその少年が、若き国境守備隊隊長として王宮の謁見の間に現れた時の大きな喜び。
わずか数日間の再会だった。
いくつかの軍議と儀式を終えた彼は、再び戦火激しい国境の山岳地帯へと戻っていった。
が、その数日の間、式典の会場で、謁見の広場で、彼の姿を見かけた時に騒いだこの胸の想いを打ち消すことはしたくなかった。

（ターナだったらどうするだろう……）
巫子としての修行をつみながら、あえて戦いに身を投じた女戦士ターナ。変わり種の親友のことを思い、彼女は微笑んだ。
男勝りのターナならば、迷うことなく戒律を捨て、自分の想い人のもとに走るだろう。そういう炎の気性を持つ女性だ。とうてい自分には真似できない。
そのターナも、アムルも、まもなくこの街に入ってくる。
明日は、いよいよ宿敵ゴズアルとの決戦である。ミッドガルドの兵はここシルドアレンに結集しつつある。
今回の《神託》は、その勝利を願ってのものである。
（彼らのためにも、よい結果を導き出さなければ……）
アリーシャは、出窓から離れ再び階段を上り始めた。
階段の先に、荘厳華麗な飾りを彫り込まれた扉が閉ざされている。そこが祭壇の間だ。
重い扉を開けるアリーシャの顔からは先程までの少女の面影は消え、その青色の瞳は神秘的な光を宿していた。

2

ヴァルヴァーナ大陸の南。北の山岳地帯と東の内海に挟まれた半島がミッドガルド王国である。
その半島の付け根に位置する首都シルドアレン。スヴァルトシルト山脈から流れ来る豊かな水系によりつくられた三角州の上に築かれた城塞都市だ。堤防と運河を利用して造られた何重もの市壁が、ぐるりと街を取

り囲んでいる。

その目抜き通りは、各地から集まってきたミッドガルド軍の兵士でごったがえしていた。

明朝早くには戦地に赴く彼らの、最後の休息だった。故郷の恋人に土産を買う者、酒場で戦友と語らう者、女のいる店に繰り出す者。それぞれが夜までの自由、ひょっとしたら人生最後になるかもしれない自由を楽しんでいた。

道端に軒を連ねている店には、信じられないほど豊富な種類の食物が並べられている。焼き立てのパン、薫製の肉、腸詰、チーズ、新鮮な果物、豆のスープ、ブドウ酒。その刺激的な匂いと鮮やかないろどりに誘われたのか、店先に置かれたテーブルは、どこも兵士達で一杯だった。

橋のたもとでは、道化や人形使い等の旅芸人がそれぞれの芸を披露していた。時には賛嘆の、時には冷やかしの声が彼らを囲む群衆から上がっている。

と、そんな穏やかな街並みに、なぜか一陣、血の匂いを運ぶ風がすうっと吹き過ぎた。

その匂いを嫌うかのように人込みが二つに分かれると、その中を若者が三人、ゆっくりと馬を進めていた。

馬の横につけられた盾は、どれも土と血がこびりつき薄汚れてはいるが、かろうじて龍と日輪を描いた紋章がうかがえる。それこそ、ミッドガルドの騎士である証だった。

が、彼らの出で立ちは、おおよそ騎士とはほど遠い。

兜もプレートメイルもない。

身につけているのは、身体にぴったりと合ったなめし皮のシャツとズボン、それに革でできたブーツだ。衝撃を吸収するように、手足の関節部分だけは、パッドが縫い込まれている。

左を行く大男は、そのシャツさえもうっとうしいのか上半身をはだけている。その厚い胸板に、幾つもの傷が刻まれている。

もう一人も大柄だ。もっとも、彼の一番の特徴と言えば、その肌の色だろう。黒琥珀よりも深い黒色だ。ミッドガルドには珍しい、黒人種の男だった。

先頭を行く若い男だけが、胸と肩に申し訳程度に金属製の甲冑をつけてはいるが、それも見るからに軽そうだ。

防御よりも機動力を選んだ結果だろう。格式を重んじるミッドガルド騎士団の中ではかなりの異端と言えた。

三人ともよほどの修羅場をかいくぐってきたのか、ゆっくりと馬を駆る佇まいが、街の喧騒に目をやる仕草が、それだけで戦場の風を運んでくる。それが、一時の休息に和む兵士達の心を逆撫でするのだろう。それまで騒いでいた連中がピタリと話をやめて、冷たい視線を彼らに投げかけていた。

が、本人たちはいたってのんきなものだ。

「ちくしょう、たまんねえ匂いだな。アムル。ここらで腹ごしらえといこうじゃねえか」

腹を撫でるようにして、大男が野太い声でうなった。

「都に入ったら、隊長と呼べと言ってるだろう。ったく、わかんない男だな」

黒人が、舌打ちをした。

「偉くなったなあ、ジン。いつからこのファド様に指図できるようになったんだ」

大男が言い返す。

「指図じゃねえ、忠告っていうんだ。てめえみたいな野蛮人がでかい顔してのさばってられる国境と違って、このシルドアレンじゃ、階級とか身分とかそういうのにうるさいんだ。部下のてめえに呼び捨てにされて、恥かくのはアムル隊長だぞ」

黒人、ジンの言葉に、アムルと呼ばれた先頭の若者が振り返った。

「気にするな、ジン。都だからって、そんなに堅くなることはない。アムルで結構だ。いつもどおりにいこうぜ」

そう言って、にっこりと笑った。

精悍な顔立ちの男だ。

まっすぐに伸びた眉と黒い瞳が、意志の強さを表している。二〇そこそこだろう。後ろの二人よりは歳下だろうが、それを意識させない。幾つもの大きな戦いをこなし自信と人望がついてきた、そんな顔をした男だ。

「しかしまぁ、この食い物のない時代に、よくこれだけのもんが集まりましたね」ジンが、店先を眺めて言った。「さすがはミッドガルドの都だ。ファドじゃねえが、こっちまで腹の虫が騒ぎだすぜ」

「多分、ありったけの食べ物を出させてるんだな。俺達、都の外からきた兵士への、ラオス王の心尽くしだろう。集合には時間がある。少し休んでいくか」

アムルの言葉に、大男の顔がゆるんだ。

「さすがは隊長だ。話がわかる」

「こんな時だけ隊長扱いか。調子のいい野郎だな」

アムルが苦笑いをうかべた。

三人が近くの木立に馬をつないだ時、雑踏の向こうから男の罵声が響いた。橋の向こうの人だかりから、二つの影が飛び出した。先に駆けてきた影が、アムルの後ろに回り込んだ。後から追ってきた男が彼らに叫んだ。

「旦那方、そいつを捕まえてくれ！」

アムルの後ろに隠れるように、小男がしがみついていた。背丈は彼の三分の一くらいしかない。しわだらけで髭面の顔からは、その年齢が幾つなのかも推し量れない。

（ノームか……）アムルは思った。

「いやぁ、お手数かけましたね。助かりました」

追ってきた男は、肩で息をしながらもアムル達にこすっからい笑顔をむけてすり寄ってきた。三日月のように曲がった顔にかぎ鼻。手も足も細く曲がっている。身体全部が曲線でできているような男だった。その風体から察するところ、旅芸人の一人らしい。

「まったく手間とらせやがって。逃げられるとでも思ったか」

男はアムルたちに対してとは一変した調子で、小男を怒鳴った。アムルを摑んでいる小男の手に一段と力がこもる。

ファドが旅芸人をとめた。

「やめておけ。いやがっとるじゃないか」

「旦那ぁ、あっしはそのノームに芸をさせて街から街を渡り歩いてんです。そいつを手放しちゃあ、おまんまのくいあげで。どうかご勘弁下さい。へへ」

男は《土霊使い》らしい。とは言え、旅芸人が芸を仕込み見せ物に使う者のことを、勝手に伝説上の土の精霊よばわりしているだけで、その大半が田舎から買われてきた生まれつき身体が完全には育たない子どもたちである。森に棲む土の精霊ノームが既に絶滅したと言われているのは、アムルたちも充分承知していた。が、たとえ偽りの名前だろうと、ファドに消え行く伝説の民からの救いの願いを黙って見過ごすなどできるわけがない。この大男は、自らを巨人族の末裔と信じ込んでいた。

にらみつけられた土霊使いの顔におびえの色が浮かんだ。

アムルが二人の間に割って入った。

「すまない。これでなんとかしてくれ」

アムルは腰に下げていた革袋を、土霊使いに渡した。

中身を確かめると、土霊使いはニンマリと笑い、

「へっへ。最初からそう言ってくれれば。こら、ミミュル。せいぜい可愛がってもらえよ」

と、ノームに声をかけた。ミミュルというのが、このノームの名前らしい。

「アムル、なにもそこまでせんでも……」

「ファド。ここは国境じゃない、シルドアレンだ。力だけじゃ事は進まない」

その言葉を耳にした土霊使いの笑みがピクリとこわばった。

「国境……それじゃ、あなた、《裸の騎士団》のアムル・ラル・ラフィエル……」

ジンが軽く口笛を吹いた。

「有名になったものですね、隊長も」

アムルが聞いた。
「知ってるのか、俺のことを」
「そ、そりゃ、噂だけは。ゴズアルがこのミッドガルドに侵入できないのは、アムル隊長率いる《裸の……》、あ、いや、国境守備隊のおかげだって、国中で評判ですよ」
と、アムルは、国境守備隊の名前が出た瞬間に、周りを囲んでいる人込みの中から、刺すような気配が飛び交うのを感じた。
(何人だ)
隣の大男に、声にせずに尋ねた。彼らだけに通じる息づかいによる会話だ。
(三人。短いが確かに殺気だったぞ)
ファドもうなずいた。
(どこの輩でしょう。まさかゴズアルの手先が……)
ジンもけげんそうな顔をしている。
「じゃあ、あっしはそういうことで……」
下卑た笑いを残して、土霊使いは人込みの方に後ずさった。
(行くか)
(ああ、妙な気配の連中も気になるしな)
うながすファドに目配せで答えたアムルが、踵を返したその時、背後で殺気の塊が膨れ上がり、そして弾けた。

有無を言わせぬ殺意の牙が、アムルの背中めがけて喰らいつく。
瞬間、アムルは右に動いた。腰の剣を抜いて、振り向きざま、襲いかかった殺意めがけて振り下ろす。ファドとジンも剣を構えていた。三人が三人とも、相手の正体を確かめる前に、思わず剣を抜く。それほど、凶悪な、激しい殺気だった。
手ごたえは、あった。
が――。
斬った相手を見て、思わずアムルが声をもらした。
土霊使いだった。
さっきまで臆病そうな笑みを浮かべていた土霊使いが、左の肩口から腹にかけて深々と斬り裂かれ、地面を転げまわっている。ひぃひぃと、声にならない悲鳴を上げていた。
(まさか、この土霊使いにあれほどの殺意が……)
呆然とするアムル達の周りに、人垣ができ始めた。
「けんかか？」
「いや、旅芸人が殺された」
「あいつらか。鎧もつけてないぞ」
「傭兵かなにかじゃないか」
「憲兵隊に知らせろ。ならず者をほっておけるか」
中には剣を構えている、気の早い野次馬もいる。

「まずいな。この雲行きじゃ、こいつから先に仕掛(しか)けたと言っても、信用して貰(もら)えそうにはないぞ」
さすがのファドも、思わぬ成(な)り行(ゆ)きに困惑(こんわく)している。その足元にすがりついていたはずの、ノームの姿が消えていた。
アムルがハッとした。
「奴らは——。さっきの妙(みょう)な気配(けはい)の連中は——?」
その言葉にジンとファドも辺(あた)りを見回す。
いた。人垣(ひとがき)の向こう。商人風の男が三人、彼らの視線をかわすように立ち去ろうとしていた。
「追うぞ」
二人をうながすと、アムルは周りの連中に大声で言った。
「俺の名はアムル、アムル・ラル・ラフィエル。国境守備隊(こっきょうしゅびたい)隊長だ。誰かこの土霊使い(ノームスター)を、薬師(くすし)のところに連れて行ってやってくれ。今日は城に泊まっている。この責(せ)めは、そこで負う」
三人の剣幕(けんまく)に、それまで彼らをにらみつけていた群衆(ぐんしゅう)も鼻白(はなじろ)んで道を開ける。
と、その人込みの向こうから、張りのある男の声が響(ひび)いた。
「貴様ら、それ以上行かせるわけにはいかん」
声のした方から、人の波が二つに分かれる。アムルたちの行く手をさえぎるように、一人の騎士(きし)が立ちはだかっていた。

3

騎士はアムルたちをにらみつけて言った。
「動くな。すぐに憲兵隊が来る。それまで貴様らの身柄は私が預かった」
「なんだ、てめぇは」
ファドが気色ばんだ。
「貴様ら、ならず者に名乗る名前など持ち合わせてはいない。ミッドガルドの騎士道を護る男とだけ言っておこうか」
金髪の若い騎士だった。アムルよりも二つか三つ年上といったところだろう。切れ長の目に、通った鼻筋。美男子ではあったが、どこかかたくなな印象を受ける。ゆったりとした布の服の上に、金属製の胸当てをつけ、その上から鮮やかなブルーのマントを羽織っていた。ミッドガルド・ブルー。噂に名高いミッドガルドの近衛兵のみに許された栄光のマントだ。
「頼んだぞ、ライン。そんな田舎者に好き勝手されては、シルドアレンの騎士の名折れだ」
群衆の中に顔見知りでもいたのか、金髪の騎士に声がかかった。
「いるんだよなぁ、正義の味方気どりのおっちょこちょいが、どこにでも」
ため息まじりに、ジンがつぶやく。
「かまうな、ジン」
商人風の男たちは、橋の向こうに消えようとしている。アムルは、騎士を無視して、彼らの後を追おうとした。
騎士が剣を抜いた。群衆たちが息を呑む。アムルも顔色が変わった。

「誰も逃げるとは言ってない。怪しい連中の後を追ってるんだ。文句があるなら後で城に来い。俺の名はアムル……」

「アムル・ラル・ラフィエルだったな。先程の話は聞かせて貰った。国境の英雄も、蓋を開けてみればただの蛮雄か。勇ましいだけで務まる田舎と違い、この都には法がある。騎士だろうと、市民だろうと神と法の前には平等。それが《慈悲王》と謳われたラオス王の政策だ。この国府シルドアレンでは、たとえ旅芸人だからといって、慰みに人を斬るなど許されることではない」

「慰みだとぉ」一方的にまくしたてる騎士の言葉に、ファドの語気も荒くなる。「俺たちがいつ、慰みに人を斬った」

「ノームを買うなどと無力な旅芸人をからかったその上に、金をやって安心させたところを後ろから斬りつけるその行為、慰みでなくて何だと言うのだ。そんな暗黒神にも劣る所業をこのライン・フェル・ベルバードが、黙って見過ごせると思うか」

「しっかり名乗ってるじゃやねぇかよ」

ジンが、わざと聞こえるように悪態をついた。

「それほどの眼力をお持ちの騎士殿なら、さっきからこの辺りに満ちている邪悪な気に気づかないのはどういうわけだ。それとも、シルドアレンの騎士達は自分の都にゴズアルの手先が跳梁するのは見て見ぬふりをするとでも言うのかい、え」

アムルも伝説の暗黒神呼ばわりされたのがカチンときたのか、彼らしくない皮肉を言う。

「邪悪な気なら感じているさ。だから、貴様達を足止めしている」

「問答無用だな、こいつは」
ファドが一歩前に出た。
「下がれ、ファド」
アムルがおさえる。が、彼自身、気は長い方ではない。部下二人を後ろに下がらせ、アムルと騎士、一対一で対峙する形になった。
「む」
アムルの中に気が満ちるのを感じたのか、ラインという騎士もその剣を構え直した。騎士の身体が一回り大きくなった。アムルの想像以上に、つかえる相手だった。
緊張が弾けるその寸前、再び、激しい殺気の塊が飛びかかってきた。ついさっき、アムルに襲いかかった殺意の牙が、今度は二人めがけて襲いかかったのだ。
「ぬ」
「なに」
アムルとライン、二人の剣が、同時に疾った。殺意の牙が、四つに斬り裂かれる。
と、二人はずぶ濡れになっていた。
飛び込んで来た殺気の塊の正体、それは、水がたっぷり入った革袋だったのだ。
「フォッ、フォッ、フォッ。少しは頭が冷えたかの、お二人さん」
声の主は、一人の老人だった。
どこから現れたのか、後ろに若い巫子を二人従えて立っている。背はその巫子たちの肩までしかない。太い

白い眉ばかりが目立つ、しわだらけの顔だ。赤い僧衣をつけ、日輪をかたどった飾りをつけた錫杖を持っている。

「あ、あなたは――」

ラインが絶句した。

アムルにも、その老人の姿に覚えがあった。

六年前、幼い王女アリーシャをゴズアル軍の奇襲から救い、敵の刃に倒れた護衛兵に代わって、神殿都市ウルドまで付き添ったその時に、彼はこの老人に拝謁している。

大司祭オードン。それが、この老人の名だった。

神殿都市ウルドの教皇にして、このミッドガルドの、いや、太陽神を仰ぐ人々にとっては最高の教祖である太陽神殿の大司祭である。

その齢は一〇〇とも二〇〇とも言われ、太陽神アーリアと暗黒神ザウエルの聖戦をその目でみた唯一の人間とも噂されている。

「国境守備隊の龍と第三近衛隊の獅子。ミッドガルド軍を代表する剣士と聞いてはいたが、さすがにいい腕じゃのォ。儂の大事な水袋が見事にズタズタじゃわい」

「冗談はおやめください、オードン様」

水滴を髪から垂らしながら、ラインが苦い顔をした。

大司祭は、その歳に似合わぬ軽い足取りで歩いてきて、八つ裂きにされた革袋の端を杖でヒョイと持ち上げた。

「冗談ではないぞ。これが儂じゃと思うとゾッとするの。お前さん方の仲裁になどうかつに入るものではないわ。まだまだ、若死にはしたくないからのォ」
「まだ、生きるつもりかよ。このじいさんは」
つぶやくジンの合の手が妙にはまって、アムルは思わずクスリと笑った。笑ってから、今まで自分の中で高まっていた猛々しい気分が嘘のように穏やかになっているのに気がついた。
それは周囲の人間も同じらしい。先程までこの場を支配していたとげとげしい雰囲気が、見事に消えている。
確かに、この老人には、人の心を柔らかくする何かがあるようだ。
柔らかい空気は、不意にアムルの方に流れてきた。
「立派になったのう、ラフィエルの」
声をかけられた彼の方が一瞬とまどった。
六年前に会ったとはいえ、こちらは少年兵の中の一人。それも王女を送り届けた時の、ほんのわずかな時間の拝謁だ。まさか、かの大司祭に顔を覚えられていようとは、予想もしなかった。
「ありがとうございます。が、よく私の顔を……」
「覚えとるわい、龍族のせがれの顔ならばな」
アムルを見て、笑いかける。
「龍族?」
ますます当惑した顔でアムルが聞いた。

「……あ、いやいや、龍騎士スコットの息子ならばな」
彼の様子に、あわてて大司祭は付け足した。
アムル自身、自分の生まれた場所も母の顔も殆ど覚えてはいない。
知っていることといえば、幼い頃に、父スコットと二人、このミッドガルドに流れてきたことくらいだ。一〇年前に、その父が戦で死んで以来、いよいよ過去のことを知る者はいないし、アムルもそんなことを知りたいと思ったこともなかった。
自分の力でその日一日、生きることができればそれでいい。孤独に慣れた、気ままな生き方をしてきた彼だった。
が、何かを隠しているようなこの老人の態度に、はじめて、アムルの心に何かが引っかかった。
「父を、ご存じなのですか」
その質問をはぐらかすかのように、大司祭はさっきまで水袋だったものを鼻先にぶらさげて言った。
「ああ、剣を持つ姿など、お前さんにそっくりじゃったわ。しかし、二度も同じ手に引っかかるようじゃ、ちと情けないぞ。ちょっと〝気〟を入れて飛ばしただけで、このザマじゃ……」
「〝気〟?」
聞き直してからアムル自身も気がついた。群衆をかきわけて、土霊使いが倒れていた辺りに戻る。のたうちまわっていたはずの彼の姿が、消えていた。
哀れな土霊使いの代わりに、旅芸人が使う道化の人形が一つ、左の肩から真っ二つに斬られて転がっていた。その人形を拾い上げたアムルの後ろから、オードンが声をかけた。

「どこぞの誰かが、邪悪な意志をその人形に乗せておぬしにぶつけたんじゃろう。周りの連中も、その目くらましにまんまとひっかかったというわけじゃ。お前さん方をここに足止めしとくのが目的ならば、その狙いは当たったらしいのぉ。まあよい、夢を見るのは若者の特権。まあまあることじゃ」
「じゃあ、さっきの連中は、やっぱりゴズアルか」
アムルたち、三人は顔を見合わせた。
「こんな野郎の相手をせずに、さっさと後を追いかけときゃよかったんだ」
呆然とするラインをにらみつけ、ジンが歯がみした。
「……非礼は詫びる。どうやら私の早合点だったようだ」
低い声で、ラインが言った。
「ほんとにその通りだよ。ったく二枚目ってのはどうも、ええ格好しぃでいけねえ」
「なにぃ……」
吐き捨てるようなジンの言葉に、ラインがにらみ返す。
「やめろ、ジン。敵の術にはまったのはお互い様だ」
アムルが言った。
「今からでも遅くはない。あの男たちを探そう」
そのやりとりを見ていたオードンが声をかけた。
「心配するな。さっきの連中なら今ごろは捕まっとるはずじゃ」
「え？」

「お前さん方が、それどころではないようじゃったからな。儂の護衛役が後を追ったわ。なぁに、あの程度の者達を取り逃がすような者ではない」
「しかし……」
いいかけたアムルの言葉をさえぎるように、大きく城の方から鐘の音が聞こえてきた。その鐘に、それまで集まっていた野次馬の兵達も、ざわつきだした。束の間の休息が終了した合図だ。
城の中央の大広場に一同が会し、国王ラオスの拝謁を受ける。その時がきたことを、鐘の音は告げていた。
ざわざわと、城に向かい人々が動き始めた。
「むぅ。どうやら、アリーシャの《神託》が、終わったようじゃの」
宮殿の東に立つ《太陽神の祭塔》を見上げて、オードンがつぶやいた。
その顔に、一瞬、なにか厳しいものが走ったのを、アムルは見逃さなかった。

シルドアレンの西のはずれ。
切妻造りの家並みが続くこの辺りは、市民たちの住宅街になっているせいか、表通りから一歩入ると、昼でも森閑として人通りも少ない。
その道を男が三人、ゆっくりと歩いている。どの男も商人風だ。一人の男が用事でも思いだしたのか、家と家との隙間の路地をくいと曲がった。後の二人もそれに続く。
入って行ったのは、市壁と家々の間に挟まれた袋小路だ。
辺りの様子を窺い、人気のないことを確かめると、三人は、おもむろにふところから手の平ほどの革袋を取

り出した。
穏やかな商人の顔の下から、険しい魔導師の顔が浮かび上がった。
「デル・エル・サバクダニ・エムス・オギス……」
低く呪文を詠唱しながら、革袋に指を突っ込み、その指で市壁に何やら書きつける。革袋の中身は、真紅の血だった。
鮮血で描かれたルーン文字、古代から伝わる神聖文字と、円や三角などの模様が複雑に組み合わされて行く。
魔法陣だ。驚くほどの速さで、魔法陣が描かれていく。
しかも、どうだろう。
壁に描かれたはじから、その奇怪な絵図は消えていく。
「ふーん。消える魔法陣とは、珍しいものを見せてくれるわね」
突然、背後から声をかけられ、男たちの指が止まった。
路地の出口、逆光の中に女のシルエットが浮かび上がっていた。
目が慣れた男たちは、その女の姿を見て息を呑んだ。
只の女ではない。プレートメイルをつけ長剣を携えている。紅い髪を短く刈り上げ、不審な魔導師たちをにらみつけた鳶色の瞳は輝きに満ち、生半可な男よりはよほどりりしい騎士姿だった。
胸当ての中央に、太陽神の象徴である日輪が、鮮やかな金色で刻み込まれている。
魔導師の一人がうなり声を上げた。

「……ウルドの巫子戦士……」
ゴズアル軍の侵入に対抗して、神殿都市ウルドの大司祭オードンは国王ラオスと協力し、巫子の一部を戦士に転職させた。その結果、魔術師と戦士の両方の力を持つ女兵士たちが誕生したという。いつの頃からか彼女達は、《ウルドの巫子戦士》と呼ばれていた。
「その通り。私の名はターナ、太陽神を仰ぐ戦士。そういうあなた方は暗黒神に殉ずる魔導師のようですね。このシルドアレンに、何の用かしら」
「……」
男達は黙って、隠し持っていた短剣を構えた。
「およしなさい。あなた達の腕では私にはかなわないわ。無駄な血を流すのは……」
ターナが言い終わるよりも早く、男達の剣はそれぞれの心臓を一突きに貫いた。
「え⁉」
一瞬ターナも身動きできなかった。
あまりにもあっけない、男達の最期だった。
短剣を引き抜く。それぞれの魔導師の胸から噴き出た血が、噴水のように高く上がり、石造りの家々と市壁を真っ赤に染めた。生臭い匂いが、袋小路を包んだ。血溜まりの中に、男たちが倒れていく。
彼女が駆け寄った時には、もう三人は息絶えていた。
あわてて印を切り、生命力の気を送るが何の効果もない。
「なんで、こんなに簡単に……」

苦い思いを胸に、男たちの遺骸を地面に寝かせると、ターナはしなければならないことにとりかかった。
腰の革袋から、クリスタルの小瓶を取り出し、中の水を彼らが描いていた魔法陣の上に振りかける。神殿で清められた聖水だ。
「アーリアの名の下に、邪悪なる魂と闇の力よ、永久に封じられん」
壁に手をかざして詠唱する。
儀式が終わると、彼女は男達の遺骸を片付けるために、近くの衛兵を呼びにその場を離れた。
何か釈然としないものが残っている。
シルドアレンに忍び込むまでには、相当の苦労をしているだろう。それなのに、こんなに簡単に命を断つのはなぜか。
それが、暗黒神信仰なのか。それとも……。
はっきりとした回答が、得られないまま、ターナはその場を立ち去った。
彼女は気づかなかった。
魔導師達の死に顔に、ほんの微かにだが微笑みが浮かんでいることを……。
そして、三人の男達から流れ出す血が、まるで意志を持つかのようにゆっくりと地面をはい、あざやかな鮮血の魔法陣を作り上げると、地面に吸い込まれ消え去ったことに……。

4

オードンが、部屋に入ったとき、女神は泣いていた。

オレンジの光に包まれて、女神——アリーシャは泣いていた。
神との交感(こうかん)を終えた彼女の顔には、なぜか深い悲しみが浮かんでいた。
《太陽神(アーリア)の祭塔(さいとう)》の最上階、《神託(トランス)》のためにつくられたこの祭壇(さいだん)は、シルドアレンの中で最も光に満ちた部屋だ。
四方を囲む窓から入って来る太陽光は、窓にはめ込まれた特別製のクリスタルを通して増幅(ぞうふく)され、部屋の中心に集まる。
灰雲がこの世を覆(おお)ってからも、この中だけは常にアーリアの祝福(しゅくふく)——太陽の光で満ちるように、ミッドガルドの技術の粋(すい)をこらしてつくられたものだ。
魔は闇と共に来たる——太陽神の重要な教えだった。
すでに、西に傾きかけた太陽の光はオレンジにかわり、アリーシャの顔に微妙(びみょう)な陰影をつけていた。
その輝(かがや)きの中で、彼女は虚空(こくう)を見つめて大粒の涙をこぼしていた。
涙は、柔らかな頬(ほほ)をつたい、床へと落ちていく。
「オードン様……」
大司祭が入ってきたことに気づいた、アリーシャはあわてて涙を拭(ぬぐ)った。
「おお、すまぬすまぬ。脅(おど)かすつもりはなかったんだがの。若い乙女(おとめ)の涙というものは、いくつになっても男の心を動かすもんじゃな。つい見とれてしもうたわい」
大司祭は、そのしわだらけの顔を一段とくしゃくしゃにして笑った。
「……オードン様。シルドアレンは、ミッドガルドはどうなるのですか」

アリーシャが、一言一言噛みしめるように聞いた。
「それはお前の方がよく知っとろう」
彼女は黙り込んだ。
「予言とは因果なものじゃのう。アリーシャ」
オードンは、入ってくる夕陽に目をしばたたかせながら言った。
「わしらは、あの太陽の輝きが教えてくれることを、ただ見るだけじゃ。見て伝えるだけじゃ。が、その言葉を正しく伝えることで、何かが変わることもある。たとえ、その時はどんなに辛いことでもな」
「では、大司祭様も……」
「このおいぼれをいまさらウルドから引きずり出すとは、ゴズアルも酷なことをする。さあ、行こう。皆が待っておる。今は、一時でも早く、お前の声を皆に伝えることだ」
アリーシャは、深くうなずくと、扉に向かった。

宮殿前につくられた大広場は、数千の兵により埋め尽くされていた。西に傾く夕陽が、広場をかこむ城壁にぼんやりと灰色の影をつくっている。
中央に並ぶ、目にも鮮やかな青いマントの騎士たちは、国王自慢の近衛兵たちだ。その横には、黒い甲冑に全身を包んだ重騎兵隊が長槍を構えて立っている。東西南北、各地方をあずかる大臣たちが率いてきた兵士たちは、北は白、南は赤、東は紫、西は茶と、それぞれに色分けされたコートをつけている。
その末席にアムルたちの姿もあった。

アムル率いる国境守備隊は、ゴズアル軍の監視のために北の国境付近から離れられない。この式典と、それに続く作戦会議のために、彼ら三人だけが、シルドアレンに来ている。
その彼らも、今はミッドガルドブルーのマントに身を包んでいる。式典に際し城が与えてくれた正装だ。深く青い色が、アムルの精悍な顔つきによく映えている。こうして見ると、逞しさと優雅さを兼ね備えた立派な若武者だった。
こちらはお世辞にも似合っているとは言えないファドが、アムルの変身ぶりに舌を巻いていた。
いよいよ、敵国ゴズアルとの決戦の時だった。
敵の国主アズ・ロッグウェルと、その参謀格とも言える魔導師ガルダの残忍さは、このミッドガルドにも届いていた。
一斉に活動を始めた火山群が、大量の噴煙を吐き、それが〝灰雲〟となって、この大陸から太陽の恵みを奪ったのが一〇年前。それと呼応するように、北の蛮国ゴズアルが新たなる君主を担ぎ、暗黒神信仰をもって大陸を席捲し始めた。村を襲い、食料を奪う。神殿を焼き、そこに邪神の像を建てる。ゴズアル行くところ、滅びと死だけがあった。
今や、この暗黒の力を止められるのは、大陸一の国力を誇るミッドガルド王国だけだろう。国民の期待に応え、国王ラオスが全軍の将を召集したのが七日前。
今まで何度か、国境付近での小競り合いはあったが、この一月程前より、ゴズアルの国府に大軍が結集しているという報を受けたラオスは、ついにその重い腰をあげたのである。
全員が、興奮した面もちで、広場の正面、宮殿の二階につくられた謁見台より彼らを檄するラオス王を見つ

めていた。
「……かつて、滅びの王暗黒神ザウエルは太陽神アーリアと聖龍ブルードラゴンにより、虚無氷河の果てに封じられた。が、今再び、このヴァルヴァーナの大地に、邪悪な力がはびこらんとしている。ゴズアルという名の闇の使いが、この世を滅ぼさんとしている」
五〇も近いはずだが、老いを感じさせない張りのある声だった。無理に声を出している風でもないが、アムルがいる最後尾まで、はっきり届いて来る。青い王家の鎧の下に隠された肉体も、まだまだ衰えてはいない。
若い頃の王は気性も激しく攻撃的な性格だったが、武芸の訓練中に過って弟の王子を殺してしまってからは、その罪を悔い、性格を抑えて自らを《慈悲王》と名乗り戒め、徳政にいそしんだという逸話を、アムルは思い出した。
「聞けぃ、太陽の子ら、ミッドガルドの太陽の子ら。我ら、アーリアに変わりて邪神の徒ゴズアルを闇に葬らん！」
王は、腰の剣を抜き放ち、天にかざした。
ドオッと、広場がゆれた。
「ミッドガルド！　ミッドガルド！」
口々にそう叫びながら、兵士たちも、剣を天にかざす。
夕陽を受けた数千の剣のきらめきが、宮殿を赤く染めた。
「勝利は我らに！」
王が叫んだ。

「勝利は我らに！」
アムルも、喉が張り裂けんばかりに叫んでいた。
ラオス王は満足そうに微笑むと、剣をおさめ兵達を制した。
歓声がピタリとやむ。
国務大臣が、前に出て、厳かに言った。
「続いて、《神託の儀》に移る。神殿巫子団の長、ミッドガルド第一王女、アリーシャ様より太陽神の御言葉が伝えられる。一同、拝礼」
兵士たちは、剣を掲げ太陽に向けて突き出すと、鞘におさめた。
アリーシャ姫が、扉の陰から姿を見せた。
その姿を見て、居並ぶ兵士達はため息をついた。
謁見台に、まぶしいほどの光が射した。アムルには、そう感じられた。彼女の澄んだ瞳を見ているだけで、自分の中で何かが揺らぐ。
(女性というものは、ああも変わるものなのか)
少女の変貌を目の当たりにして、激しく動かされる自分の心に、正直戸惑いを感じているアムルだった。
その動揺を知ってか知らずか、後ろに立っていたジンが妙な感心の仕方をしている。
「……死ねるなぁ、ありゃあ死ねる」
「なに」
「いや、あの美しさなら、隊長が命賭けて救うだけのことはありますよ。うーむ、男冥利ってもんだ」

「無駄口を叩くんじゃない」
アムルがにらみつける。ジンは首をすくめた。
兵たちが見つめる中、アリーシャは謁見台の一番前まで歩み出た。
が、その赤い唇から発せられた言葉は、一同が期待していたものとはかけはなれた暗い響きだった。
「陽光蝕される時、闇の彼方より悪夢訪れたり。
王の剣は闇に呑まれ、
王の城は地に朽ち果てん、
太陽の都は邪宗の徒により蹂躙され、
太陽の子は闇の城の虜とならん」
明らかにミッドガルドの敗北を予感させる言葉だった。
兵たちの間に、ザワザワとしたどよめきが広がり始める。
「つまりなんだ、俺たちが負けるということか」
ファドが聞く。
「どうもそうらしいな」
アムルもその言葉の真意を掴みかねたらしく、曖昧にうなずいた。
「どうせ予言なんだからよ、嘘でもいいから景気づけてくれりゃいいのによ」
ジンがつぶやいた。
アリーシャの後ろに控えていた、王や大臣たちの顔色も変わっていた。

どよめきがおさまるのを待つつもりか、アリーシャはひと時、その口を閉ざした。
厳しい表情でアリーシャをにらむラオス王、その顔色を窺った国務大臣が側近に耳打ちした。
「謁見を中止する。兵を解散させろ」
側近はうなずき、アリーシャを下げようと前に出た。
「なんのつもりだ、テュルク」
王に名指しで呼ばれた、国務大臣がビクリとした。おずおずと、王に答える。
「悪しき《神託》は、太陽神の聖殿に封印するのが上策。ゴズアルとの決戦を前にして、むざむざ兵たちの士気をそぐことはありませぬ」
「思い上がるなよ、テュルク。神の言葉がいつも自分たちに都合よくいくとは限らぬわ」
「しかし——」
「心配するな。こんなことでミッドガルドの兵はくじけたりはせん。第一、ここで《神託の儀》を取りやめれば、我ら自ら悪しき運命に負けたことになる」
「は……」
国務大臣は頭をさげ、アリーシャの背後に控えていた側近に、さがるように目で命じた。
祭塔を見上げたラオス王は、ポツリと言った。
「……我らが考えているよりも、もっと大きな力が動き始めとるようだな」
「大きな力？」
「どうやら、このことはあのお方もご存じらしい」

ラオス王が指し示した祭塔の最上階の出窓から、大司祭の顔がのぞいていた。
広場を見ていたオードンの後ろで、若い女の声がした。
「ここにおられたのですか」
ターナが、複雑な表情で立っていた。
その表情を見て、オードンが首をかしげる。
「はて、手ぶらとは。あの程度の者、逃がすお前ではないと思っておったが」
ターナは、大司祭に事の顛末を話した。魔導師たちの最期を聞き、大司祭の顔が曇った。
「死を望んで代わりに何を得るか。フム。あとでその路地裏に案内して貰おうか」

5

アリーシャの沈黙は続いていた。何か、まだ告げるべきことがあるのに、言葉が見つからない。そんな表情だった。
一時ざわついた兵たちも今は黙って、その王女を見ている。
大広場を包んだ沈黙を破ったのは、北の城門からの鐘の音だった。早馬の到着を知らせる鐘だ。兵たちの間に、目に見えない緊張がはしった。同時に何人かの衛兵の悲鳴が聞こえてくる。
「何事だ！」
王の問いに、国務大臣がそばの家臣に命じた。
「式典の最中だ。使者は城の外で案内を待つように伝えろ」

が、それよりも早く、城門が押し開かれた。
砂煙をあげて、一頭の馬が駆け込んでくる。猛烈な勢いだ。門に一番近い兵たちが止めようとして弾き飛ばされた。投げ槍隊が脚を狙うが、馬の勢いは止まらなかった。狂ったように宮殿めがけ走り込んでくる馬に、それまで整然と並んでいた隊列が二つに分かれた。
「おい、ありゃあノザックじゃねえか！」
その馬の背に乗る使者を見て、ジンが声をあげた。乗っているのは国境守備隊の一員だった。
「あの野郎、気でも狂ったか」
駆け出そうとするファドよりも早く、アムルが馬に飛びついていた。鞍を手がかりに、馬の背にまたがる。
「ああっ」
謁見台から事の成り行きを見ていたアリーシャが、小さく悲鳴をあげた。
今、馬に飛び乗った若い兵士の顔、見間違えるはずもない。あれは、アムル。何度頭の中でその顔を思い浮かべたことか。
しかし、あの馬は——。
「ノザック、ノザック。どうした、しっかりしろ」
走り続ける馬の上で、アムルは使者の背後から抱きつくと、身体をゆさぶった。その身体に生気はなかった。
と、ズルリと使者の顔がアムルに向いた。虚ろな目がアムルとぶつかる。
首だけが、真後ろを向いていた。そして、そのままアムルの肩ごしに地面へと落ちていく。噴き出る血が、

彼の顔にかかる。
「うおおおおっ！」
首の無い死体を抱きかかえたまま、アムルは手綱を思いきり引っ張った。馬は一声高くいななくと、ようやくその足を止めた。広場をつっきり、あと少しで宮殿に入るところだった。
王も兵達も、黙ってその馬を見ていた。
首無しの使者を乗せた早馬。先刻のアリーシャの予言が無くとも充分に不吉な予兆だった。
「……ノザック、何故、お前ほどの男が……」
血塗れになることも気にせず、アムルは部下の遺骸を抱いていた。
国境守備隊でも一、二の、身の軽い男だった。小柄な陽気な男だった。自分の同行が、ジンとファドに決まった時に、最も悔しがっていた。アムルには、その時の顔が焼き付いている。それが、何故、こんな姿に。国境で何が起きたのか。
その思いは、その場にいる誰もが同じだった。
馬の荒い息だけが、広場に響いている。
ブル、ブフム、ブル、グルル、……グァグルルル……。
馬の声が、低いうなりに変わった。
「いけない、アムル。その馬は——！」
アリーシャが叫んだ。
突然、馬の腹が二つに裂けた。

バランスを崩して、馬はドウと横倒しになる。その寸前に飛び降りたアムルだが、左足を何かに引っ張られて地面に叩きつけられた。
メシリ、メキ、メキメキッ！
馬の身体が奇妙にねじくれ、その中から、尖った足が突き出した。一本だけではない。次々に、馬の腹を破って紡錘状の足が現れた。それに続いて赤く輝く八つの目。不気味に膨らんだ腹。
巨大な蜘蛛だった。
おぞましい唸り声をあげて、人間ほどもある蜘蛛が八つの足を小刻みに動かしながら、馬の腹から這い出してきた。
アムルの左足には、蜘蛛が吐いた糸がしっかりと巻きついていた。
半身を起こして剣を抜こうとした彼に、化け物蜘蛛が再び糸を吐きかけた。右腕が身体に縛りつけられる。
もがくアムルを、化け物蜘蛛は、その巨大な姿に似合わない素早さで押さえ込んだ。吐き続ける糸が、アムルをがんじがらめに縛り上げる。
ギシャアッ！
とどめを刺そうと、振り上げた蜘蛛の前足は、しかし、アムルの首に届く寸前、弾き飛ばされた。
金髪の騎士が、彼と蜘蛛の間に立ちはだかっていた。
ラインだった。飛び込んだ彼の剣が、間一髪、大蜘蛛の攻撃を弾き返したのだ。
「ミッドガルドの騎士が、無様な姿をさらすんじゃない。早く立たぬか」
その隙に、アムルは怪物の下から転がり出た。

新たな邪魔者の出現に、大蜘蛛の目は怒りで赤く輝いていた。その周りを、ラインとその部下たちが取り囲んだ。
「重騎兵！」
彼の合図で、重騎兵の長槍が蜘蛛の腹めがけて突き進む。が、槍は二つにへし折れ、蜘蛛の足が重騎兵自慢の甲冑をぶち抜いた。そこに、近衛兵が剣をかざして打ちかかる。大蜘蛛は、唸り声をあげながら騎士たちを打ち払った。兵たちは、怪物の攻撃に次々に血祭りにあげられていった。
「あれは、邪霊獣。ガルダめ、そこまで……」
祭塔の上で大司祭が低く唸った。
「ターナ、聖水をもっとるか」
「ここに」
巫子戦士が腰の小瓶を取った。老人はターナの剣を取り聖水を振りかけると、小声で呪文を詠唱した。
「あやつは、暗黒神の邪獣。聖なる神に清められた剣でなければ倒すことはできん。このままではミッドガルド軍は全滅じゃ。これを使え」
ターナはうなずくより早く、身を翻して階段へ向かった。
アムルは、蜘蛛の糸をほどこうと懸命にもがいていた。
駆けつけたジンが、その身体を後ろへとひきずった。糸を断ち切ろうと剣をふるうが、魔の力に護られているのか、彼の剣では歯が立たなかった。蜘蛛の勢いに押され、兵たちもジリジリと下がっている。

もがくアムルは、右腕が自由になるのに気が付いた。さっき地面に叩きつけられた時に傷ついたのか、右の二の腕から出血している。その流れ出した血に触れた部分だけ、あれだけ丈夫だった蜘蛛の糸が溶けて消えていた。

「ジン、俺の腕を刺せ」

自由になった右腕を、ジンの前につきだす。

「こいつは、血で溶ける。俺の血で溶かせる」

「ほんとっすか」

「多分な」

「信じますよ」

そう言いながら、ジンは筋を傷つけずに血が出るところを狙って剣をふるった。

右腕から鮮血がほとばしる。その血を身体になすりつける。血が触れた部分から、糸は白い泡となって消えていった。

アムルは、やっと自由になった両手で、残った糸のついたマントを脱ぎ捨て、蜘蛛に向かって駆け出した。駆けながら身体中に血を塗り付けた。

「どけ、ファド。俺がやる」

蜘蛛の行く手を阻もうと、大戦斧を振り回していた大男を制した。

抜きはなった剣が、右腕から流れ続ける血に染まり、赤く輝いた。その剣を逆手に持ち替える。

グギヤァッ！

アムルめがけて、蜘蛛が糸を打ち出す。が、アムルの血がその糸を溶かした。
大蜘蛛は、一瞬ひるんだかのように、動きを止めた。
その隙を突いて、アムルが跳び上がった。
「おおっ！」
ラオス王が、大司祭オードンが、アリーシャが、そして、そこにいたすべての兵が目をみはった。
アムルが舞ったその時、なぜかそこに青い光を、真っ赤な血にまみれた姿にもかかわらず、アムルの背後に青い翼のはばたきを見たような気がしたからだ。
「キエエエエエエェィ！」
裂帛の気合と共に、蜘蛛の頭部、赤く輝く八つの目の中央部に深々と剣を突き刺した。
蜘蛛が、奇怪な叫び声をあげた。あたりかまわず糸を吐き出す。
アムルは、蜘蛛の頭に片足をかけ剣を引き抜くと、とどめの一撃をその首めがけて振り下ろした。鈍い音とともに、怪物の頭が地面に転がる。首を失った胴体は、二、三度細かく震えると、ドサリと地面に崩れ落ちた。緑色の体液が噴き出し、むせかえるような生臭い匂いが広場を包んだ。
渾身の力を使い果たしたのか、アムルも膝をついた。
が、気を緩めた彼の背後から、倒れた筈の大蜘蛛の前足が襲いかかった。化け物の最後のあがきだった。
「はなれなさい！」
彼の頭に突き刺さる寸前、飛び込んできた女戦士がその蜘蛛の爪を斬り落とした。
ターナだった。

オードンにより清められた剣を、蜘蛛の腹に突き刺す。
「太陽神の名のもと、悪しき魂よ、土に還れ」
詠唱と共に、巨大蜘蛛の身体はどろどろと溶け、緑色の液体に変わった。
一瞬の沈黙の後、騎士たちの歓声が大広場を包んだ。ジンとファドが、アムルを抱え起こした。
「あの小僧、自分の血を聖水代わりに使いおったわ。青龍の影を持つ者か。ま、怪我の功名という奴じゃな」
塔の上のオードンが、笑った。
その大司祭の独り言が、聞こえたかのように、アリーシャも同じ言葉をつぶやいていた。
「青龍の影を持つ者……」
いつ謁見台を降りたのか、アリーシャがアムルの前に立っていた。
大蜘蛛に向かっていったアムルの姿が、心の中に何かのイメージをつくろうとしている。その衝動が、彼女をここまで動かしていた。
つぶやいてから、その意味に気がついた。彼女の瞳に輝きが戻った。
「……言わなければならないのは、このことだったんだ」
大きく息を吸うと、再び予言の続きを始めた。
「陽光蝕される時、闇の彼方より悪夢訪れたり……」
凛とした声が、ざわめく広場に響きわたった。
「――が、邪神世にはびこる時、碧き翼は天に舞う。剣を掲げよ。希望はそこに現れん」
アリーシャは、夕焼けに染まった空に、その右手を掲げた。

「……碧き翼」

アムルが、聞き直した。

アリーシャは微笑むと、同じ言葉を繰り返すだけだった。

「剣を掲げよ。希望は、そこに現れん……」

第2章

嘆きの大剣

●

6

忽然と、まさしく忽然と、ゴズアル軍は姿を現した。
国境からも北方の砦からも何の連絡もないまま、シルドアレンの目の前にゴズアルの大軍が出現した。それはまさに、電撃的侵攻だった。
ゴズアル軍に不意をつかれたミッドガルド軍は、やすやすと第一の市壁を突破されてしまった。残る市壁は大きく分けて三つ。これが破られると、ミッドガルド城は丸裸になってしまう。
ラオス王は、城門を開き市民たちを城の中に避難させ、三つの市壁を兵で固めて、徹底抗戦の構えをとった。
兵たちも王の期待に応えた。第一市壁が落ちたことが逆に奇襲の狼狽から立ち直らせたのか、一時は市壁の外にゴズアル軍の大半を押し戻すまでの勢いを見せた。
夜が、来るまでは――。
日が沈み、闇が天と地を覆った時、ミッドガルドの兵達は、シルドアレンの民たちは、自分たちが戦っている相手の真の姿を知った。
彼らは、死人だった、生ける死人だった。
これも、邪神官ガルダの魔導の術なのだろうか。
夜の訪れと共に、ゴズアルの兵は、腹を裂き首を落としても立ち向かってくる、おそるべき生ける屍の軍隊と化した。
国境守備隊も北の砦も、この怪物たちの手により壊滅したのだろう。大広場での怪事は、この前触れだっ

たのだ。
倒しても倒しても襲い来る死人兵の攻撃に、さしものミッドガルドの精鋭も疲労の色は隠せず、いつの間にか第二の市壁も落ち、市街戦を余儀なくされていた。

シルドアレンの街は、今や火の海だった。
ゴズアルの兵が放ったものか、それとも、斬っても突いても打ちかかってくる死人兵を焼き殺すために放ったものか、その火元はともかくとして、この、大陸でも一、二を争う豊かな街が今や灼熱地獄と化していた。
その炎の中、焼け落ちてくる瓦礫を巧みにかわしながら、馬を駆る三人の騎士がいた。アムルたち、国境守備隊の三人だ。
彼らは、神殿で浄化された武器を前線の兵士たちに渡す任務を命じられていた。たった今も、陥落寸前の南の第三市門に剣を届け、死人兵の一団を壊滅させたところだ。
腕っぷしが自慢のファドも最初は不服そうだったが、実際、彼らが運んだ剣や槍が味方の窮地を救うのを見ていると、まんざらでもなくなったらしい。新しい武器を受け取るため、城にもどっている彼らの先頭を切って馬を走らせている。
そのファドの馬の前に、突然、何者かが飛び出してきた。
「ぬううっ」
ファドが、あわてて手綱を引く。
後ろから続いていたアムルとジンも合わせて止まった。

「気をつけろ、この大男。こんな所で急に止まる奴があるか」
と、悪態をつくジンも、飛び出してきた相手を見て口をつぐんだ。
大人の半分ほどの背丈。緑の服。その背丈に似合わぬ豊かな髭。そこに立っていたのは、ノームだった。
土霊使いから助けを求めてきた小男が、両手を広げ立ちふさがっていた。
「昼間のノームじゃねえか。何の用だ」
問いかけるファドの言葉も終わらぬうちに、ノームは彼らの前から駆け出した。家並みの切れ目、T字路の所まで行くとピタリと止まり、振り返る。アムルたちを待つかのように、こっちを見つめている。
「よっぽどあのノームに気に入られたらしいな、ファド。俺たちを誘ってやがる」
アムルが、苦笑いを浮かべた。
「罠ですかね」
ジンの言葉にアムルがうなずいた。幻覚にだまされ道化の人形を斬った時の手ごたえは、まだ彼の腕にはっきりと残っていた。
「が、何かを知らせてるのかもしれん。俺はいくぞ」
ファドが、小男の後を追おうとした。ジンがそれを制する。
「待て待て、どうもお前さんはノームとか巨人族とか昔話に弱くていけない。目の前の死人兵はどうすんだよ」
「わかった。ここは二手に分かれよう。ファドはあいつの後を追え。ジンは城に戻って、剣を受け取ってここに戻って来い」

「隊長は？」
「俺は、ファドと一緒に行く」
「ひでぇ」
ジンが口をとがらせた。
「そういうな。こいつ一人じゃ、どこまで追いかけていくか分からないからな。城まで行ってくる間には、俺たちも戻っている。ここで合流しよう」
「わかりました。その鉄砲玉野郎のおもり、しっかりお願いします」
不服そうではあったが、決意すると行動は早い。あっという間にジンは駆け去った。
様子を窺っていたノームは、アムルとファドが向かってくるのを見ると、再び、その小さな身体に似合わない脚力で炎の中に消えていった。
城内の大広場にはあちこちにテントが張られ、ある場所は傷ついた兵士たちの休息所に、またある場所では浄化した剣を集めて兵に配布したりと、ミッドガルド軍の本部という風を呈していた。
兵士たちの叫びだろうか。うおおおん、という声が街の四方から響いてくる。空を見ると、だんだん火の手が近づいてくるのがよく分かる。休息所に運び込まれている怪我人たちも、どんどん数が増えていき、しかも重傷の人間が目立っている。
宮殿への入口を守る若い衛兵が、そのテントの方を見ながら、ふうっと、大きくため息をついた。
「怖いか」

横に立っていた先輩の兵士が声をかけた。こちらは、一回りほど年が上の日焼けした男だ。若い兵士が、あわてて首を振る。その様子を見て、年長の兵士が笑いかけた。
「強がらなくてもいい。誰だって、初めての戦の時ぁ震えがとまんねぇもんさ。が、お前はついてるぜ。いくらゴズアルだろうと、この城の結界はまず破れねぇ。ここを守っときゃあ、死ぬ心配はねぇさ」
「誰も、怖いなんて言ってませんよ。みんなが敵と戦い、ああやって傷ついて戻ってくるのを見てると、ただこうして門番みたいなことをやってる自分がなさけないんです」
若い兵士がむきになってつっかかった。その頬がひくひくと震えている。
「そうかいそうかい、こいつは頼もしいや。ラオス王は、敵が攻め疲れるのを待って一気に討って出るつもりらしい。そん時ゃ、お前も存分に活躍できるだろうよ」年長の兵士は苦笑いを浮かべて、若者をいなした。が、その顔が途中でこわばった。
地面が緑色に光っていた。
強く、弱く、強く、弱く、息をしているかのように一定のリズムを刻んで輝く光に、広場が妖しく浮かび上がっている。
同時に、何処からともなく、怨むようなあざ笑うような、低い男の声が響いてきた。
……デル・エル・サバクダニ……エムス・オギス・ガルマニア……
……デル・エル・サバクダニ……デル・エル……
妖光は、輝きを増しながら地面を這うように蠢いている。
「こっちに来るぞ！」

若い衛兵が叫んだ。
宮殿の入口の辺りで、稲妻が落ちたように光が弾けた。弾けて、光の塊がそこに現れた。その場所が、夕刻、化け物蜘蛛が若き国境警備隊長の手により倒された所だということに気づく余裕は、若者にはなかった。
「……な、何者だ！」
若い衛兵の声はうわずっていた。
光は徐々に人の形を取り始めた。じりじりと彼に向かって近づいてくる。それが異様な圧迫感となって、若者の胸をしめつけた。剣を持つ手が、細かく震えている。
「やめろ、リック。手を出すな！」
若者は年長の衛兵の制止を押し切って、その光に襲いかかった。恐怖に耐えかねたのか、狂ったような声をあげてやみくもに剣を振り回す。が、次の瞬間、彼は光の中から突き出した剣に、その腹を串刺しにされていた。
闇が光を呑み喰らうようにして、妖光が巨大な男の姿に変わっていた。
異形の男だった。
赤銅色に鈍く輝く奇怪な鎧に身を包み、普通の倍はあろうかという大剣を天に掲げている。その剣にはまだ若い兵士が突き刺さったままだ。その腹から流れ出る血が剣身を伝わり、男の腕に、肩に、兜にしたたり落ちる。その血を吸った鎧が、一段と赤く輝いている。この鎧の色は、そうやって数多くの戦士たちの血により染められていったものなのか。
騎士と言うよりは魔人。巨体が動くたびに、禍々しい気が臭ってきそうだ。

剣をふるうと、若い兵士は地面に叩きつけられた。
「リック！」年長の衛兵が、若い兵士の名を叫んだ。既に事切れていた。剣を抜き、周りに大きく叫んだ。
「侵入者だ――」
衛兵の口が、あ、の形に開いたまま、宙を舞っていた。首を無くした胴体がドサリと地面に倒れる。
その断末魔の声に城詰めの騎士たちが飛び出してきた。不審な男の周りを、取り囲むと一斉に剣を抜く。
またたく間に二人の兵士を倒した異形の男は、ボソリとつぶやいた。
「これがミッドガルドの兵か。落ちたものだな」
金髪の騎士が一歩前に出た。
「ならば、本物のミッドガルドの騎士の力、お見せしようか」
ラインだった。剣を構えて男のほうに踏み出した。
「太陽神の結界を破って、たった一人でこの城に乗り込むとは大したものだ。とりあえずお名前を伺っておこうか、ゴズアルの騎士よ」
魔人は、低く笑った。
「名か、儂の名を聞くと地獄に堕ちるぞ」
それを聞いて、騎士たちがいろめき立った。
「はん、戯言を」
「地獄に堕ちるは貴様の方だ」
ギロリと兜の下から暗い視線でねめつけると、男はゆっくりと、こう告げた。

「それほど死にたくば教えてやろう。名ならば二つある。今は、アズ・ロッグウェル。が、かつてはこう呼ばれていた。グレイ・ロッグ・ミッドガルドとな」
「なにぃ」
ラインの顔がこわばった。
男が言った名の一つは、ゴズアルの国主。そして、もう一つは、かつて、国王ラオスが武芸の訓練中に過って殺したといわれるミッドガルドの第二王子のものだった。
ふしゅう。
男が唇を歪め息を吐き出した。あたりに異臭が漂う。周りを囲んだ騎士達は、一瞬激しい嘔吐感に襲われた。
それはまぎれもなく、死臭だった。

7

街の西のはずれ、切妻造りの家並みが続く路地に、オードンは立っていた。土と石で築かれた二階建て・三階建ての家々が防火壁の役割をしているのか、ここはまだ火の手に侵されてはいない。住民たちはとうに城内へと避難している。橋一つ向こうでは凄絶な戦いが繰り広げられているのが信じられないほどの、静けさだった。
その路地に立ち、この大司祭は錫杖を片手になにやら呪文を唱えている。
と、ボウッと壁に奇妙な図形が浮かび上がった。

魔法陣（まほうじん）。
それは、ターナが封じた筈（はず）の、消える血で描かれた魔法陣だった。
「フム、これが最後のようじゃの。ガルダめ、こそこそと小細工（こざいく）をしおって」
言いながら手にしていた古い絵図に印を書き込んだ。どうやらそれは、シルドアレンの古地図らしい。既（すで）に五つ、街のあちこちに印が書き込まれている。それは、それまでに彼が見つけた闇の魔法陣の位置だった。
オードンは、ゴズアルの兵が死人だという報（ほう）を聞くと、一人で街に出て、暗黒神の魔導師（まどうし）達の仕掛けた魔法陣を探していた。あわせて六つ。一つはターナにより封じられていたが、残りの五つの力によりその封印（ふういん）が解かれていた。この魔法陣により、暗黒神の意志が死人兵に伝わる。
書き終わるとオードンは、手の平を壁に向かって広げた。ボオッと火が走る。手を閉じると炎（ほのお）も消え、魔法陣は消えてなくなっていた。
続いて、しわだらけの手で器用（きよう）に地図を丸めると、再び詠唱（えいしょう）を始めた。
「古きものよ。祝福（しゅくふく）された都市を描きし古きものよ。闇の流れを光に変え、我を導け」
と、手の中の地図が光球と化し、炎に染まる空に向かって飛び出した。六つの魔法陣は、街の周囲にある規則性を持って配置されていた。それらが囲んだこの都市の何処（どこ）かに中心の大魔法陣がある。そこに闇の力がそそぎ込まれている筈だ。この光はその闇の力の流れを教えてくれる。
光球は空へ舞い上がり、東に向かった。その行方を見て老人はうめいた。
「……城か！」
夕刻倒した大蜘蛛（ぐも）の姿が脳裏（のうり）を走った。

――あれも、捨て石か！
大蜘蛛の緑色の体液が、城内の大広場に広がっていく様を思いだし、大司祭はほぞをかんだ。
――城の結界に穴を開けられた。あの蜘蛛の体液が城内に闇の意志を持ち込み、魔法陣を完成させたのだ。
まんまと、ゴズアルの邪神官にしてやられてしまった。
城へ急ごうとする大司祭だったが、空を見て歩みが止まった。彼が放った光が宙空で消えたのだ。目に見えぬ矢に射落とされでもしたように、不意にかき消えてしまった。
「ぬ」
不吉な予感に襲われ飛び退こうとしたその時、足元から鮮血の柱が上がった。凄まじい勢いで、真っ赤な血が噴き上がってくる。その血の勢いに、オードンの僧衣はズタズタに引きちぎられた。オードン自身、立っているのがやっとであった。
いつの間に現れたのか、血の奔流の前に男が立っていた。
邪悪な意志が妖気となり、ゆらゆらと、その身を包んだ暗緑のローブにまとわりついていく。その顔につけた黄金の仮面が、街を焦がす炎に妖しくきらめいている。切れ長の目の奥は果てしなく昏く、そこにどんな輝きの瞳が隠されているのか知ることもできない。
邪神官ガルダ――ゴズアル軍の参謀格とも言える大魔導師が、大司祭の目の前に立っていた。いつの間にここまで侵入していたのか。手にした錫杖を掲げると、鮮血の噴出はピタリとやんだ。
血染めの大司祭が男をにらんでいた。
「いきなり総攻撃をかけてくるとはまた思いきった手を打ったもんじゃ。ここまではお前の目論見通りかな。

が、ガルダよ、闇が世界を制した試しはないぞ」
「失礼ながら、この世の本質は闇。光は、その闇の大海が気まぐれに生んだ泡沫かと……」
「フム、それが暗黒神の教えであったの。が、残念ながら夜明けの来ない夜はなし、じゃ。いつまでも、ことがうまく運ぶとは思うなよ」
オードンの太い白い眉の下の瞳が、クワッと見開いた。眼光が邪神官を刺す。超然と立っていたこの暗黒の使徒が気押された。老人が呪文を唱えた。ガルダの周りに光の壁ができあがった。
「そのまま朝が来るのを待つがよい。太陽神の目覚めと共にお前の力は封じられるわ」
クックックックック……。
封じ込められた筈のガルダが、何がおかしいのか含み笑いをしている。
「さすがは大司祭殿。あなたが全力を出されたら、いかな私でも手は出せませぬなあ……」言いながら錫杖を軽くふるった。光の壁がガラス細工のようにうち割れた。「やはり、その魔法陣を用意しておいて正解だったようですね」
オードンの足元に、奇妙な図形が現れていた。ルーン文字と円や三角形の組み合わせが、鮮血で描かれている。人一人がすっぽり入るくらいの大きさの魔法陣が大司祭を囲んでいた。ただ囲んでいるのではない。ゆっくりと、しかし確実にその輪は小さくなっていた。しかも、足元から地面に沈んでいく。
「これは……」
さしもの大司祭も顔色が変わった。幾つもの呪文を唱えるが、何の効果もない。足が、腿が、徐々に地面に呑み込まれていく。

邪神官の妖しい笑い声が響いた。
「ここで封じられるは私ではない。我が血を与えた三人の魔導師たちが先にこの地であなたを待っていたのですよ。いかがでしたか、闇の血の洗礼の儀式は。その血を浴びた方は、暗黒神に捧げられることになっています」
ターナの目の前で死んだ魔導師たち、その流した血の魔法陣の狙いはこれだった。街のあちこちに描かれた魔法陣は自分をここまでおびきよせる罠でもあったのだ。ガルダの手にまんまとはまった自分の愚かさに、オードンはうなった。その身体も、既に腰から上だけしか残っていない。
その姿を見て、ガルダがあざ笑った。
「その魔法陣は虚無への入口。あなたの力は、無限の闇が喰ろうております。暗黒の果てで永遠の眠りにつきなさい、大司祭殿」
「ガルダ、おのれは何を、何を企んどる!?」
炎の照り返しか、仮面の邪神官の硬く冷たい唇が、軽く微笑んだように見えた。そして、低い声でポツリと一言つぶやいた。
「……ザウエル」
「なにぃ……」
胸まで沈んだ身体で、オードンは仮面の男をにらんだ。
その頭を左手で掴み、ガルダは大司祭の額に右の人差し指を当てた。
「虚無に沈む時には、凄まじい苦痛が訪れるとか。その前にとどめをさしてあげましょう。一度は教えを乞う

た方への、せめてもの情というものです」

笑いながら、その指で額を突こうとしたその時、背後で地響きがした。同時に地割れが走って来た。路地に敷き詰められた石畳、その上にかかれた魔法陣を二つに裂き、地割れは壁でとまった。

「大丈夫か、じいさん！」

路地の向こうにファドがいた。巨大な戦斧を、深々と地面に突き立てている。厚みが人の腕ほどはある斧の刃が、石畳を二つに割っていた。大男自慢の大戦斧が、からくもオードンの危機を救ったらしい。

「無茶をするわい」

上半身だけのオードンが深く息を吐いた。二つに裂かれたために陣が破れたのか、とにもかくにも沈下はそこでおさまったようだ。

この時、邪神官は既に上に跳んでいた。地割れと同時に、跳んできた人の気配を感じたからだ。跳ぶ寸前、ローブの背中を斬撃がかすった。

アムルの剣だった。

ノームに誘われるように走ってきたアムルとファドは、絶体絶命の大司祭を見つけ、これを助けるために打ちかかったのだ。

ガルダに一歩遅れて、アムルも跳んだ。

着地した邪神官に、二太刀目を打ち下ろす。

が、ガルダは錫杖でこれを受けた。杖とは言っても、その先端の飾り部分は鋭い刃と鈎爪となっている。一種の鉾槍だ。逆にアムルを弾き飛ばす。

「いきなり後ろから襲うとは、ミッドガルドの騎士にあるまじき行為ですね」
ガルダが言った。
「背中にも目がありそうだったから、わざわざ断るまでもないと思ったんだ。お気に召さなかったかな」
剣を構えなおして、アムルが言う。
「そういうやり方、私は好きですよ」
ガルダが笑った。
「気をつけろ。そやつがガルダじゃ、一筋縄ではいかんぞ」
オードンが叫んだ。
戦斧をかかえたファドが、アムルの横に並ぶ。
「……こいつがゴズアルの大魔導師か。こりゃ面白くなってきたな」
二人は、じりじりと邪神官との間合いをつめていった。
が、オードンはその光景に一人焦っていた。
「今のあやつらでは、奴には到底太刀打ちはできん」
しかし、いくらもがこうと虚無の闇に沈んだ下半身は微動だにしなかった。

8

轟ッ！
荒れ狂う嵐のように大剣がうなった。

ぐぎゃあっ！
鎧ごと腹を断たれる。右腕を飛ばされる。頭が割られる。
一振りで三人、返す刀で五人。
魔人の大剣が、うちかかる兵を次々に切り刻んでいく。血糊で固まるはずのその剣は、人を斬れば斬るほど斬れ味を増していくようだった。
アズ・ロッグウェル。たった一人の男に、城詰めの兵が城内にまで追い込まれていた。
一階の大広間、ラオス王自慢の謁見の間が今や阿鼻叫喚の修羅場と化していた。荘厳な壁画が、豪奢な絨毯が、兵たちの血で染まっていく。第三近衛隊も生き残っているのは、ライン一人だった。ロッグウェルに打ちかかろうとする足がもつれ膝をついた。
が、その姿を見れば立っているのが不思議なくらいだ。腕に胸に幾つもの刀傷を受けている。その整った顔は血と泥にまみれ、自慢のブルーのマントはボロボロに裂かれている。
（なぜだ、なぜ俺では駄目なんだ）
悔しさと焦りが混然となり、ラインの胸を焦がした。他の騎士たちを一刀のもとに倒している魔人の剣を受けて、ここまでよく抵抗しているのだが、逆上しているラインには、それも命惜しさのふるまいとしか思えない。羞恥の思いが全身を駆け巡った。激しい出血のためか、目がかすんでゆく。意識が遠のく。
そのかすむ目の前に、あの国境守備隊の男の姿が蘇った。
突然現れた化け物蜘蛛を倒したあの男、アムルとかいう若僧の姿が、彼の頭からはなれない。
剣には自信があった。都でも一、二の使い手と言われているが、自惚れではなくその通りだと思う。あの男

大広間から二階へとつながる階段、その踊り場にラオス王は立っていた。兜をつけ、剣を持ち、青い鎧に身を包んだその姿は、この三〇年間一度も見せたことのない出陣時の王家の正装だった。踊り場の壁には、聖龍と太陽神の姿を描いた豪奢なステンドグラスがしつらえられている。その色鮮やかな輝きを背に、ロッグウェルを見おろしていた。

「陛下！」

ラインたちが階段下に駆け寄る。王を守るように魔人の前に立ちはだかった。

が、ラオス王は、

「下がっていろ。お前たち若き者の手が、そのような邪悪な血に汚れることは太陽神も決して喜ばぬ」

言いながら、一段一段を踏みしめるようにゆっくりと階段を降りてきた。

ロッグウェルが、笑った。

「やっと現れたか、兄上」

「哀れな姿になったな、グレイ」

一同は、その王の言葉を聞いて顔を見合わせた。

「……では、この男は、本当にグレイ王子……」

ラインが問うた。王はうなずいた。

「かつてはな。が、今のこやつは暗黒神に身を委ねた闇の巨魁にすぎぬわ」

王の手にした剣を見て、ラインは息を呑んだ。彼だけではない、そこにいた騎士たち、そしてロッグウェルまでもが何らかの感慨を受けたようだった。

《嘆きの大剣》、それが剣の名だった。
人の背丈ほどもある両手剣。刀身は厚くその切っ先は鋭い。柄には、太陽と龍の細工がしてある。それこそ、ラオス王が若き日あやまって弟の王子を殺してしまった剣であった。それ以来この剣は鎖でつながれ、玉座の上に封じられた。王も自ら《慈悲王》と名乗り、血気にはやりそうな時はその剣を見て己を戒めたという。

その剣を、二度と握る筈のない剣を、ラオス王が握っている。
「面白い趣向よのう。またぞろその剣で儂を斬るつもりかよ」
そう言って、ロッグウェルはふしゅうと息を吐いた。
「そのつもりだ」
ラオス王が言った。王の身体は、魔人に負けぬほどの気迫に満ちていた。
「悲しき男よ。死して三十余年経つというに、未だ現世への欲を捨て切れぬか」
「ほほぉ、さすがはミッドガルドの王。稽古にかこつけて、弟を暗殺した男にふさわしい言葉だ」
その言葉に、ラインは驚いて王の顔を見た。不慮の事故と聞いていたがその裏に何があったのか。王は、わずかな沈黙の後にため息のように、一言吐いた。
「後悔しておるよ……」
「命ごいかな。ならば、遅いわ」
魔人が笑った。
「勘違いするな。あの時斬らねば、暗黒神に心傾いていたお前は必ず父上や私を殺し、ミッドガルドを邪教

の都にしていたはずだ。後悔しておるのは、私の剣に迷いがあったことだ。いくら邪念を抱いた男とはいえ、弟を斬るには私は若すぎた。その迷い故に、お前の魂は太陽神の祝福も受けられずに、魔道にたぶらかされた。憎むべきは人の心の弱さにつけこむ魔導師の術よ。お前と私の迷い、今一度、この剣で断ち切ってみせよう」

掲げた剣が光った。

「断たれるは、貴様の、そしてこの国の命運よ」

ロッグウェルも、その魔剣をかまえた。

巨人対魔人、二人の気迫が激しくぶつかる。声のない気合いが響いて、二人は同時に駆け出した。

二人の剣がぶつかり合う。

鈍い音がして、ロッグウェルの剣が真っ二つに打ち折れた。

「ぬ」

魔人の顔色が変わった。そこで後ろに下がれば、伸びてくるラオスの剣に喉を突かれていただろう。が、ロッグウェルはそのまま肩からぶつかっていった。思わぬ敵の体当たりに不意を喰らい、ラオスは階段にふっとばされた。衝撃で剣を落とした。

拾おうとのばした手を、ロッグウェルが踏みつけた。

ぐしゃり。いやな音が大広間に響いた。彼の右の手の骨が砕けた音だった。

「おのれ！」

囲んでいたラインたちが打ちかかろうとする。

「手を出すな！」
苦悶の表情を浮かべながらも、ラオスは部下たちをとめた。その額から脂汗が流れていく。
「強気だな、ラオス王。が、遅かれ早かれみんな死ぬ。このシルドアレンは廃墟と化すのよ」
魔人は哄笑と共に、ラオスが落とした剣を拾い上げた。
「どうやらこの剣で落とされるのは、貴様の首だったようだな。暗黒神が待っているぞ、兄上」
うずくまっている王めがけ、大きく剣を振り上げた。
が、次の瞬間悲鳴を上げていたのは、ロッグウェルの方だった。剣を握っていた両の手がボロボロに溶けて崩れている。剣身から水が湧き出していた。その水が剣を伝いロッグウェルの肉体を溶かしている。
「こ、これは……」
剣を投げ捨て己が手を見たロッグウェルは呆然とした表情を浮かべた。
ラオスが再び剣を拾った。気合い一閃。その剣が、ロッグウェルの胸に突き刺さった。
「それはこの剣の涙。悲運の弟の宿業を嘆き、その剣に己の涙を託した王の悲しみゆえに名付けられた。《嘆きの大剣》とは、暗黒神の誘惑から王家の血を救えなかった太陽神の涙でもある」
魔人の胸から剣を引き抜くと、ラオスが言った。
傷口を押さえ血を吐きながら、それでもロッグウェルは、その顔に笑みを浮かべていた。
「なるほど……しょせん最後は神頼みか……。ならば、儂もそうさせてもらおう。……ラオスよ。何故儂が三十数年、この都に攻め込むのを待っていたと思う」笑うロッグウェルの身体から、邪気が噴き出してきた。
「今日という日を、この大いなる蝕の年の始まりを待っていたからだ。見せてやろう、暗黒神の真の力を。闇

が光を呑み喰らう時代の始まりを……」

ぐぁがるる……。

ロッグウェルの顔が醜く歪み、人の声とは思えぬうなりが響いてきた。彼の身体も大きく歪み始める。そして、水で一杯の薄い革袋のように弾けとんだ。

グァアアアオォーンッ！

一同がそこに見たのは、この世の物とは思われぬ変身だった。

魔獣――。かつて暗黒神がこの世を治めんと、太陽神と果てしなき戦いを繰り返していた伝説の時代、地上に君臨していたと伝えられる巨獣プレシオサウルスが、咆哮をあげていた。

「邪霊獣……グレイ、そこまで……」

呆然と、そして深い悲しみをたたえて、ラオスは弟の変わり果てた姿を見上げていた。

9

シルドアレンの太陽神殿は、ミッドガルド城内、王宮に隣接する形で造られている。中央にあるドーム型の大礼拝堂、そこが市民たちの避難所になっていた。ゴズアルの攻撃に家を焼かれた者、傷を負って息もたえだえの老人、親とはぐれ泣き叫ぶ子供。老若男女、様々な人々が着のみ着のままの姿で、この、普段ならば穏やかに太陽神に祈りを捧げているはずの場所に肩を寄せ合っていた。

アリーシャはその中を、怪我人の手当て、食事の手配、寝床の準備と、てきぱきと指示している。城の女中、下僕、城付きの薬師、神官たちが、彼女の声に従い人込みの中を走り回っていた。

「アリーシャ姫」
女の声に、彼女は振り返った。ウルドの巫子戦士が立っていた。
「ミッドガルドの姫君が、こんなことまでしなくてもよさそうなものだけど……」
「ターナ……」
「元気だった？」
そう言って、ターナはかるく会釈した。
アリーシャは、駆け寄り彼女の手を握りしめると、
「じゃあ、あれはやっぱりターナだったんだ。ずいぶん勇ましくなったのね。あんな怪物蜘蛛を浄化できるなんて。見違えたわ」
そういって、満面の笑みを浮かべた。
「オードン様に随分鍛えられたから」
ターナもアリーシャの手を握り返して、笑いかけた。しかし、その笑顔はほんの一瞬のものだった。すぐに真顔にもどると、アリーシャにささやいた。
「みんなをここから避難させて。お城の結界が破られたわ。しっ。彼らに聞こえちゃいけない」
結界が――！　と、声をあげそうになったアリーシャの口を押さえ、ターナは静かにと目配せすると先を続けた。
「敵の首魁ロッグウェルが宮殿内に現れて邪霊獣に変身したわ。今は、巫子たちが動きを封じているけどいつまでもつか……」

プレシオサウルスと化したロッグウェルに、巫子たちが総がかりで結界をつくった。その外から矢を射かけ槍を投げているが、今のところ致命傷を与えることはできていない。

それだけではなかった。

ロッグウェルの変身と呼応するように、ゴズアルの死人兵たちも次々に邪霊獣と化していた。剣をふるい矢を射かけるミッドガルドの兵士たちの目の前で、彼らはその姿を異形のものへと変えていった。ある者は巨大な翼あるトカゲに、ある者は毒花粉をまき散らす人面樹に、次々と変身していった。

邪霊獣——。

人が姿を変えたのか、人の姿を借りていたのか、大司祭オードンが、暗黒神に仕えると語った異形の魔物。それが、ゴズアル軍の正体だった。何故彼らは苦もなく国境の山岳地帯を突破できたか。何故彼らはミッドガルド国内を、夜の霧のように音もなく首府シルドアレンまで押し寄せることができたのか。邪教徒の変身を前にして、人々は、その理由を知った。同時に、暗黒神のおそるべき力も……。

太陽神を信じて疑うことのなかったシルドアレンの民たちに、初めて動揺が走った。その混乱の中で、兵たちもよく戦ってはいるが、浄化した武器の数は少なく、思うような戦果はあがっていない。このままでは、ミッドガルドの滅亡はそう遠くない。

告げるターナの言葉は、彼女自身の気持ちも暗くしていった。

「オードン様は、大司祭様はどうしたの」

アリーシャの問いに、ターナは首を横にふった。

「街につくられた魔法陣を封じに行ってそれっきり……。ここも危険よ。避難してる人たちを早く逃がさない

と」
「……どこへ」
アリーシャが、巫子戦士の顔をキッと見すえた。
「この城が駄目なら、この街にはもうどこにも逃げ場所はないわ。今彼らにこんなことを告げれば、ますます混乱するだけよ。それこそ、ゴズアルの邪神官の思う壺じゃなくて。行きましょう。ターナ」
「行くってどこへ」
足早に歩き出すアリーシャを追いかけて、ターナが尋ねる。
「祭塔よ」
「祭塔？」
「そう、《太陽神の祭塔》。私たちが太陽神を信じなくて、街の人々が信じられて」
「今からお祈りでも捧げようっていうの」
けげんそうなターナに、アリーシャは微笑んだ。
「私に考えがあるの。手伝って」

アムルとファドは、疲労しきっていた。二人がいくら打ちかかろうと、ガルダの身体を掠りもしなかった。目の前の邪神官はせせら笑うかのように、錫杖を構えている。ここまで彼らがまがりなりにも生きているのは、背後にいるオードンの支援があったからだ。
「魔導師ってのは、普通、武術の方はからっきしってのが常道なんじゃねえか」ファドは肩で息をしている。

裸のたくましい胸板がぱっくり裂けて血が噴き出している。邪神官の錫杖がえぐった傷だ。
「これも修行のたまものですよ」ガルダが言った。「どうしました、それで終わりですか、ラフィエルの。とんだ見込み違いだったようですね。これでは父親の方がまだましだ」
「父親？　まさか貴様……」アムルの顔色が変わった。
「スコット・ログ・ラフィエル。彼の使命は、ロッグウェル殿の暗殺。さすがは《騎士の国》ミッドガルド。宣戦布告前に国首暗殺の刺客を差し向けてくるなど、我らにも思いつきませんでした。目的のためには手段を選ばない。龍騎士の名に恥じぬ立派な戦士でしたよ。ちょうどあなたが、いきなり後ろから斬りかかってきたようにね」
　怒りに、アムルの身体が小刻みに震えていた。
「罠だぞ、挑発に乗るな」
　かばうように、ファドが一歩前に出た。
　その時、邪神官が小さく詠唱した。
「いでよ、グライヤー」
　突然、ファドが血を吐いた。悲鳴を上げ苦悶の表情を浮かべ、胸をかきむしった。胸の傷から血が噴き出し、ボコリとそこから肉塊が飛び出してきた。
「ファド！」
　アムルが叫んだ。鳥か、翼のあるトカゲか。ヌメリとした肌を持つ人ほどの大きさの怪物が、大男の身体から現れた。ガルダの悪い冗談か、それは、奇しくもスコットの両手を食いちぎった怪物だった。ファドは気

力を振り絞り、その怪物に戦斧をふるった。怪物の身体がちぎれ白い泡となって消えた。が、ファドもそこに崩れ倒れた。アムルが駆け寄る。

「ファド、しっかりしろ、ファド！」

大男は既に意識を失っていた。ガルダの笑い声が響いた。

「邪魔者には退場してもらいました。さあ、見事、父親の仇とれますかな」

「魔導師め、卑怯な真似を……」

再び、ガルダに向かい合ったアムルの顔からは、それまで見せていた陽気な色が消えていた。

「許さん」

剣を構える彼の身体から、激しい怒気が噴き出していた。その怒りが、剣に集まる。アムルの身体が一回り大きくなったようだった。

そして、アムルの瞳が赤く染まった。怒りの炎が染めあげたかのように、二つの瞳が真っ赤に変わっていった。

その変貌に、邪神官もかるく声をあげた。

「《赤輪の瞳》……やはり、お前が選ばれし者か……」

その言葉通り、瞳に太陽を持つ男、それが今のアムルだった。彼の中でざわざわと何かがうごめき始めた。

血が背骨に集まり、肌が粟立つ。何かが目覚めようとしている。そんな予感に身体が震えた。

が、何者かの目覚めよりも怒りの沸騰点の方が先にきた。

「たわごとはそこまでだ！」

剣を構えアムルが飛び出した。邪神官も錫杖をふるう。
「いかん、アムル、まだ早い！」
オードンが叫んだ。援護の呪文を唱える間もない。老人は、思わず唇をかんだ。一歩ガルダが早い。剣よりも先に邪神官の錫杖が彼の喉元を貫く。そういう間合いだ。
その時、光が邪神官の目を刺した。空の一角から差す光に、一瞬彼の動きが止まった。
ガキィイイン！
襲いかかったアムルの剣をかろうじて錫杖で受けると、邪神官は大きく跳びずさった。
アムルには何が起こったか分からなかった。その光が、邪神官の目を眩ませて自分を救ってくれたことに気づいた時には、とは言ってもほんの数秒後のことだが、既にガルダの姿を見失っていた。その行方を探して辺りを見回すアムルの後ろから、大司祭の声が聞こえた。
「きゃつは城だ、城に向かったぞい」
「城へ？」
振り向いたアムルの目が、まばゆさに細くなった。光が直接差し込んできたのだ。それは、街の中心、《太陽神の祭塔》から発せられていた。
「急げ、アムル。ガルダはあの塔をねらっとる」
「しかし、ファドは」
「お前がいてどうなるものでもなかろう。大丈夫、この大男はわしにまかせろ」
そう言って、大司祭は生命力の気を倒れているファドに送り込んでいた。

「わかりました……」
アムルが指笛を鳴らすと、馬がかけてきた。その背に飛び乗ると彼は、城に向かって去っていった。
ミッドガルド城が燃えていた。建国以来数百年、不落を誇った太陽神の都の象徴が、いま燃え落ちんとしていた。
グァアアアオォーンッ！
プレシオサウルスはその炎の中で、歓喜の声とも聞こえる雄叫びをあげている。
「グレイよ、本望か。その身をそこまで醜く変えてまで、その城を焼きシルドアレンに死をもたらす。それがうぬの望みかー！」
ラオス王は顔半分が焼けただれ、左足に深い傷を負っていた。青い鎧が血で真っ赤に染まっている。変身したロッグウェルにやられた傷だ。それでも、何度も巨獣に突っ込んでいこうとするラオスを国務大臣が必死で止めていた。
「おやめ下さい、陛下。今あなたが倒れてはこの国はどうなります。近衛兵よ。陛下を離すでないぞ」
その命に従い、ラインたち生き残った近衛兵は国王を守って、というよりは無理矢理引きずるような形で大広場の片隅まで逃げていた。が、ラインも許されるものならば、勝機はなくともあの怪物めがけて打ちかかりたかった。この生え抜きの若き近衛兵にとって、それがミッドガルドの騎士道だった。
彼らの思いをあざ笑うかのように、巨獣は炎の中から姿を現した。
（燃えろ燃えろ、すべては破壊と混乱の中に。それこそが暗黒神ザウエル、そしてこの呪われた王子の願いだ）

巨獣の咆哮は、そう叫んでいるようだった。その邪悪な意志を炎に変えたのか、巨大な火炎球を口から撃ち出す。その炎が巫子たちの結界を破り、城を焼いている。
「なぜですか、ラオス陛下！　なぜ我らでは歯が立たぬのです！」思わずラインが叫んだ。「きゃつらが暗黒神の下僕なら、我らは太陽神の子。あやつらがあれだけの力を与えられて、何故我らはそれを指をくわえて見ていなければならないのですか。太陽神に助けを乞おうとは思いません。が、せめて奴らと互角に戦える力を授けてくれてもいいではありませんか」
　ラインの興奮が、逆にラオスを冷静にさせたようだった。彼の叫びに我に返ったように肩の力を抜き、首を振った。
「……いや、それは無理だ。太陽神は戦いは好まぬ。力を求めてはいかん。うかつな力は滅びを呼ぶだけだ……」
「滅び？　今のこの状態を、滅びというのではないのですか」
「邪なる力には、邪なるものを……。それが太陽神の教えだ。暗黒の力の盾となるは我らの役目ではない。うぬらも、ああいう姿になりたいか」
　王の謎めいた言葉に、ラインはますます苛立った。
「邪なるものに立ち向かわずして、何が太陽神の騎士かっ。老いたか、ラオス王！」
「口を慎め、ライン！」
　国務大臣が、王の横から叫んだ。それにかまわずラインは、
「第三近衛隊ここに！　かなわぬまでも、あの怪物の足だけは止める」

彼の声に数人の騎士が応え、駆け寄った。もう生き残りの兵は数えるくらいしかいなかった。
「待て、ライン」
「止めても無駄です」
王の声も聞かず飛び出そうとしたラインの前に、ラオスは腰の大剣を差し出した。
「これを持っていけ。本当ならば、儂の手でやらねばならぬことだが、どうやらそうもいかぬらしい」
興奮状態から醒めたためだろう、これまでの疲れと傷の痛みが一気に襲ってきたのか、ラオスはその場に座り込んでいた。
「この男も離してくれぬようだしな」
側に立つ国務大臣をいまいましげに見上げた。
ラインは、王を見つめ深く一礼すると《嘆きの大剣》を受け取り、巨獣目指して駆け出した。彼の後に、部下たちが続く。その姿を見送りながら、ラオスはポツリとつぶやいた。
「王とはつまらぬものよな……」
横にいた国務大臣が言った。
「なにをおっしゃられます。陛下がいれば、ミッドガルドは再建できます。民はそのための礎……」
ラオスにギロリとにらまれ、大臣はそこで口を閉ざした。
走るラインの中で激しい闘志が燃えていた。――今度こそ、今度こそ、この手で……！　あの怪物とて形あるもの。この剣で必ず息の根を止めてやる。彼の脳裏に、再びあの国境守備隊の男の姿が浮かび上がっていた。――俺にもやれる！　大剣の長い柄を両手できつく握りしめた。

その時、〈奇跡〉が起こった。
神殿の中央にそびえる祭塔、その先端からまばゆい光が発せられた。白く柔らかい光だった。その光に照らされた途端、プレシオサウルスは、それまでの勢いを失い、いきなり苦しみ始めたのだ。
「あの光は……!?」
ラオス王の問いに側近の一人が答えた。
「先程アリーシャ様が、祭壇の間に上がられたとのことです」
「姫か……」
王が、その場にいあわせた兵たちが、一斉に祭塔を見上げた。
「成功よ！　邪霊獣の力が、闇の力が弱まっていくわ！」
祭塔の最上階、祭壇の間の出窓から覗いていたターナが奥のアリーシャに叫んだ。彼女は目を閉じてひたすら太陽神に祈りを捧げている。彼女の前で祭壇の炎が赤々と燃えていた。その前には窓にはめ込まれていたクリスタルが置かれている。光の束はそこから発せられていた。
アリーシャの考えが、見事に功を奏したのだ。
普段は部屋の中央に光が集まるようにつくられたクリスタルで、今は逆に祭壇の光を一つに集め、四方の窓から外に向かって照らしている。祭塔は、聖なる光を放つ燈台となっていた。
聖光の直撃を受けたプレシオサウルスから、白煙が上がっていた。
グルルルルゥ、ギャワァアアアンンッ！
厚い灰色の皮膚が光の束に焼かれ、白く泡だってゆく。邪霊獣の巨体が震え、再び変身が始まった。首が、

尾が、巨体を支える柱のような四肢が縮んでいく。光の中で巨獣はみるみるうちに人の姿へと戻っていった。
「なぜだ、約束が違うぞ、ガルダ!」
身体のあちこちに爬虫類の皮膚を残し、顔も醜い瘤だらけとなったロッグウェルが、天を仰ぎ叫んでいた。
その前にラインが立ちはだかった。
「《北国の雷暴君》アズ・ロッグウェル。御首頂戴」
「どけぇい、若造。儂の相手は貴様などではないわー!」
ロッグウェルが怒りのうなりをあげた。
が、《嘆きの大剣》の前には、闇の力の加護をなくした男はもはや敵ではなかった。魔人の首と身体は、一刀のもとに斬り離された。
囲む騎士たちの歓声がどうとわいた。
「……さらば、弟よ……」ラオスはつぶやいた。「闇に魂をもてあそばれた哀れな男よ……」
ゴロリ、大広場の石畳に転がったロッグウェルの首は死してなお兄の姿を探すかのように、カッと見開かれたままだった。

10

王宮に、市門に、シルドアレン中に柔らかい暖かな光が広がっていた。その光に照らされると、それまで猛威をふるっていたゴズアルの邪霊獣は苦しみ悶え始めた。その機に乗じて、ミッドガルド軍は一気に押し返している。一度その聖なる輝きに照らされた武器は、浄化を受けたように邪獣たちの身体を貫いていった。ミ

ッドガルドの最後の猛攻だった。
そのきっかけをつくった二人の巫子は、ただひたすら、太陽神への祈りを捧げていた。
ゆらり。祭壇の炎が揺れた。炎の中に黒い影が走った気がして、アリーシャは目を開けた。
「ほほぉ、誰の仕業かと思えば、ミッドガルドの姫君にウルドの巫子戦士ですか。シルドアレンもなかなかしぶとい」
聞かぬ声だった。アリーシャの顔色が変わる。
「何者ですか。ここは神殿巫子団以外立ち入り厳禁の場所です」
「ふふ。噂に違わぬ気丈なお姫様だ。おまけにとてもお美しい。そう堅いことを申されるな。私も一度はオードン殿に教えを乞うた身。あなた方とは、いわば兄弟弟子」
そう言いながら、男は部屋に入ってきた。黄金の仮面が、炎に照らされる。その仮面を見て、ターナがハッとした。
「姫、こやつは……ゴズアルの大魔導……」
ガルダだった。いつの間にここまで忍び込んだのか、暗緑のローブを翻して邪神官がそこに立っていた。
ローブを後ろに払い、アリーシャに会釈をした。その動きはあくまで優雅だ。
「我が名はガルダ。《暗緑の邪神官》とも《仮面の魔導師》とも呼ばれております。以後お見知りおきを……」
言うやいなや、手にした錫杖をクリスタルめがけて投げつけた。ターナがうち払おうと剣をふるったが一瞬遅く、錫杖は命中。クリスタルは粉々に砕け散った。
「祭壇の炎をクリスタルで増幅するとは、なかなか面白いことを思い付くお嬢さん方ですね。が、夜は闇が支

配するのが世の必然かと。時の流れに抗うことはできません」
　ガルダが低く笑う。
「だったら、てめえも闇に帰りなよ。このキザ野郎」
　彼の後ろから男の声がした。闇から白い歯だけが浮き上がって見えた。ジンだった。荒い息を吐きながら、部屋に入ってくる。
「まったく足のはやい野郎だぜ。が、ここがお前の墓場だ」
　そう言って、剣を突きつけた。
「あなたは……」アリーシャが言った。
「アムル隊長の命令でアリーシャ姫の護衛を言いつかった者。御安心下さい、一命に賭けてもあなたは守ります。今ごろは隊長もこちらに向かっているはずです」
　無論、口からでまかせのはったりだった。この仮面の男にファドがやられ、アムルがその後を追ってきているなどジンが知ろうはずもない。二人と別れ城に戻った彼は、巨獣と化したロッグウェルとの戦いに巻き込まれ大広場にいた。そこで闇の中を駆け抜けるこの邪神官を見かけ、ここまで追ってきたのである。が、気持ちに嘘はなかった。たとえアムルが命じなくとも、この姫は自分の身に代えても守りきる。
「アムル!? アムル・ラル・ラフィエルですか!」アリーシャの顔がパッと輝いた。
　ガルダは、その表情を見逃さなかった。
「ほほぉ、あの怖いもの知らずはとんだ二枚目のようだな」
　アリーシャがガルダをにらんだ。ジンが怒鳴る。

「やかましい。人のことより、自分のことを心配するんだな。格好つけて得物を離したのが運の尽きだ。くたばれ！」
　ガルダの錫杖をターナが押さえていた。アリーシャは呪文を詠唱し、魔導の術を封じ込もうとしている。素手のガルダに、ジンは剣を打ちふるった。その腹に剣が突き刺さった。
「ああっ！」アリーシャとターナが同時に叫んだ。
　ガルダに刺さっている筈の剣が、なぜかジン自身の身体を貫いていた。自ら腹に剣を突き立てた格好で、ジンは膝をついた。
「な、なぜ……」
「どうやら、あなたも気づかないうちにあなたの身体は暗黒神に帰依したらしい」
「人の心をあやつれるというの……」アリーシャが呆然と言った。
「……そんなことが」
　ターナは信じられない面もちで黒人を見ていた。これが暗黒神の力だというのか……。
「そう、それが暗黒神の力です」
　その気持ちを見抜いたかのようにガルダが言った。ターナはあわてて心の中で太陽神の御言葉を唱えて、意識にガードをつくった。
「けっ、ざまねえな。犬死にってわけかよ……」ジンが言った。息をするたびに、ガボッと血の塊を吐いた。
「いいえ、犬死にではありません。お前はよいことを教えてくれました。おかげでしばらくは楽しめそうで

す」
ガルダの冷たい声に、ジンの顔がこわばった。
「何だと、何のことだ……」
それには答えず、邪神官はひょいと右の人差し指を上にあげた。ジンの両手が剣を上に引き上げた。
ぐわぁぁぁぁぁっ！
邪神官の仮面に、ポツリと一滴、赤い血がとんだ。

（今の声は、もしや……ジン！）
大広場を駆け抜けるアムルは塔の上から聞こえた悲鳴に、いっそう馬をはやらせた。
広場は一種滑稽味を帯びた修羅場と化していた。兵士たちは皆、見えもしない敵に対して戦いを挑んでいた。おそらく、それもガルダの魔導の術だろう。が、今のアムルにはどうしようもない。できることがあるとすれば、唯一つ、あの邪神官を打ち倒すことだけだ。
――許さない。アムルの中に決して消えない怒りが燃えていた。肌がざわざわと粟立ってくる。馬のまま祭塔に飛び込む。巧みな手綱さばきで螺旋階段を一気に駆け上った。最上階、祭壇の間の扉を蹴破って馬から飛び降りた。
そこにジンがいた。
腹から喉元までを大きく剣で斬り裂いて、跪いたまま絶命していた。
「ジン……まさかお前まで……」

血溜まりに足を取られながらも、駆け寄った。ジンの喉に突き刺さった剣を抜き、身体を横たえさせた。
死ねるなぁ、ありゃあ死ねる──
ジンのとぼけた声が蘇った。式典でアリーシャを見て吐いた台詞だった。
「バカが、ほんとに死ぬかよ……」
アムルの目から一筋、熱いものが流れた。ぬぐいもせずに顔を上げると、喉も裂けよとばかりに叫んだ。
「ガルダ、どこだ！　出てこい！　今度こそ決着つけてやる‼」
その時、天井が崩れ落ちてきた。残骸をかわしたアムルの目の前に、女戦士が落ちてきた。
「どうした⁉」
アムルは彼女の鎧に見覚えがあった。大蜘蛛を倒した時に、その最後の一撃から救ってくれた巫子戦士。名をターナとか言っていた。
「……姫が、アリーシャ姫が！」
傷だらけの女戦士は、それでも剣を手放さず天井を指した。見上げると、ポッカリと開いた穴の向こうに、巨大な怪鳥が舞っていた。翼一つが馬一頭程もあろうか。赤、黄、紫、極彩色に彩られた尾羽は南方の神鳥孔雀思わせる。が、その華麗な姿とは裏腹に残忍に輝く瞳と鋭い嘴が、秘めたる凶暴性を表していた。その名をピーカック。邪神官が呼び出した邪霊獣だった。その背にガルダと、そして彼に抱きかかえられたアリーシャがいた。ターナの必死の抵抗もむなしく、姫は囚われの身となっていた。
「アムル！」
彼の姿を見つけたのか、アリーシャが瞳を輝かせて叫んだ。

ガルダが言った。
「ほほぉ、よくここまで追ってこれたな。が、姫は預かりました。もう二度とこの都に光が射すことはない。闇が光を喰らう様、空の闇から見物させて貰うことにしよう」
そう言って、ピーカックの首を軽く叩いた。
クケーッ！　一声鳴くと怪鳥は大きく羽ばたいて、どんよりとよどんだ灰雲の空に昇っていった。
「アムル！」
もう一度アリーシャが叫んだ。何も言えずにアムルは、ただうなずいた。それを見てアリーシャも大きくうなずく。その目には恐怖一つない。ただ、自分を信じてくれている。なぜか、それがアムルにはよく分かった。
その時、アムルの背骨に咆哮が走った。彼は初めて知った。自分がどれほどその女性を想っていたか。その女性がどれほど自分のことを必要としていたか。ただ、うなずきあうだけの瞬間に、彼の意識はそのすべてを感じた。
ガルダへの怒りが、身体中を駆け巡っていた。あの男が、自分の前から奪った者達の顔が次々に走る。
「……ファド」
血が熱く滾り、ざわざわと肌が粟立つ。
「……ジン」
怒りに、瞳が真っ赤に染まった。
「……親父」

全身の細胞がうごめき、背骨がきしみ、心臓が唸りをあげた。
かつて聞いた言葉が、身体の中から噴き出してきた。
――剣を掲げよ。希望はそこに現れん。
その言葉通り、剣を天に向け突き上げた。
「アリィシャアアーッ！」
アムルの中で何かが弾けた。

ラインは、幻の邪神官相手に大剣をふるっていた。
ターナは、塔の屋上からアリーシャの行方を追っていた。
オードンは、近づく邪霊獣たちを封じるため結界を張っていた。
その時、シルドアレンの空を蒼い光が裂いた。
ギアアアアアーン！
咆哮が、街を震わせた。
人々は、空を見上げた。
そこに龍がいた。
青い輝きに包まれて、巨大な龍が翼を広げていた。太い脚、怒りに燃える赤い瞳、天を斬り裂くように伸びた二本の金色の角、気高く力強い姿だった。
「……まさか、あれは……」ラインがつぶやいた。

「……邪神世にはびこる時、碧き翼は天に舞う……」ターナが、アリーシャの神託を口にした。
「……龍が目覚めたかよ……伝説の龍が……」オードンが目を細めた。
街のあちこちから、人々がささやく声が聞こえ、やがてそれは一つになっていった。
……ブルードラゴン……ブルードラゴン……ブルードラゴン！
伝説の聖龍が、今、蘇ったのだ。
ギルギアアアアアーン！
龍は、もう一度、天に向かって大きく鳴いた。空気が震え、空を覆っていた灰雲が二つに裂けた。そこにピーカックがいた。
「信じられん……自力で変身したというのか……」
空に舞う聖龍の姿にガルダがうなった。
「……希望だわ、最後の希望よ……」アリーシャが微笑んだ。
龍が、猛烈な勢いで舞い上がってきた。
「やれ、ピーカック！」
ガルダの声に、怪鳥は矢羽を打ち出した。無数の羽根が極彩色の矢となってブルードラゴンに襲いかかった。が、聖龍を包む青い輝きに触れると、その羽根は次々に消えていった。
「ええい。トボ・プテラ・ファボス・エムス・オギス！　来い、邪獣の群れよ！」
初めて邪神官の声に動揺の色が見えた。邪霊獣を呼ぶと自分を乗せたピーカックは向きを変え、北の空に向かって猛スピードで飛び去り始めた。

その後を追う聖龍の前に、ガルダの召喚に応え、わらわらと異形の怪物が現れてきた。むささびの怪物トボ、翼龍プテラ、飛行する兜蟹ファボス。何十匹という邪霊獣が、ブルードラゴンを取り囲んだ。
ギェェェーン。ブルードラゴンの爪が邪獣たちを切り裂いた。
「無駄ですよ、あのような者たちにやられるブルードラゴンではありません」
アリーシャがきつく言い放った。その顔に邪神官は右手を覆いかぶせた。気を失ったのか、たちまちアリーシャの身体がぐったりとした。
「……少し黙っていろ」
一度に多数の邪獣を召喚したのが堪えたのか、さすがの大魔導師も疲れは隠せなかった。が、いくら伝説の聖龍とはいえ、あれだけの邪霊獣を相手にしてそうやすやすと突破できるものではない。このピーカックの飛翔力は邪霊獣の中でも群を抜くもの。きゃつが、後を追おうとした時には、既にゴズアルの城にまでたどり着いているはずだ。そう思った時、怪鳥の下の灰雲に何かの影が映った。
雲の中から、ブルードラゴンが飛び出した。
「ば、ばかな！　こんなに早く！」邪神官が言った。
――アリーシャを返せ！
そう叫んでいるかのように行く手をふさぐ聖龍の力強い羽ばたきに、ピーカックもすっかり気を呑まれ身をすくめている。
「小僧だと思って見くびったか……」
さしものガルダも、己の計算違いを呪った。

が、龍の牙が怪鳥の翼を切り裂こうとしたその時、なぜかブルードラゴンの動きが止まった。その赤い瞳に、愕然とした思いが広がっていく。
「……ガ、ガルダァアーッ！」
叫び声と共に、邪神官の目の前から聖龍の姿がかき消えていった。
邪神官の握りしめていた手が、汗でぐっしょりと濡れていた。
「……クッ……ククッ」
ブルードラゴンが消えた空を見つめて、ガルダは笑いだした。
「……精神力の限界という奴か……。どうやら時は暗黒の世界を望んでいるようだ……フハハハハ、ハーハッハハ……」
笑い声と共に、ガルダをのせた怪鳥は北の空に消えていった。
ラインの目の前に、青い光の塊が落ちてきた。新手の邪霊獣かと身構えるラインの前で、光は男の姿に変わっていった。アムルだった。彼は、よろよろと二、三歩進むと、
「……アリーシャ……」
一言つぶやいて、そのまま崩れ込むように意識を失った。深い眠りの底へと落ちていった。
その様子を見たラインがつぶやいた。
「……まさか、この男が……」
「そのまさかのようね、彼こそ伝説の龍族の末裔……」

女が答えた。塔から降りてきた巫子戦士だった。
「お前はターナ……」
「久しぶりね、ライン兄さん……」
ターナが微笑んだ。ターナ・エル・ベルバード。兄のラインとは五年ぶりの再会だった。
指揮官を失った邪霊獣は烏合の衆と化し、朝までにその大半が倒されていた。が、シルドアレンの火事がおさまったのは翌日の昼を過ぎた頃だった。街の四分の三を焼き尽くしていた。その被害量り知れず。ラオス王も、この戦いで受けた傷が深く安静の状態が続いていた。結果的にミッドガルドとゴズアルはお互いを潰しあったことになる。
が、肝心のロッグウェルの首は、あの夜以来消え失せて、懸命の捜索にもその行方はようとして知れなかった。

第3章

龍族の末裔

11

暗闇に声が響いていた。

……エーヌドル・アル・ハッシャベル……ギルバドル・イグニシアルベア……。

世にもおぞましい光景だった。闇の中で詠唱を続けているのは仮面の魔導師ガルダ。その呪文は聞く者の魂を凍らせる邪悪な響きに満ちていた。彼の前には、男の首が宙に浮かんでいる。浮かぶ生首の唇がひくひくと動き、両の眼が見開いた。

〈ガルダ……ガルダか……〉

「おお、気がつかれましたか、ロッグウェル殿」

首は生きていた。アズ・ロッグウェル、ラインの手により討ち滅ぼされたはずの妄執の王子は、首だけという変わり果てた姿になろうともまだ、ミッドガルドへの憎悪に燃えていた。

〈……ここは、ここは何処だ、儂は何を……オ……オオオ……ラオスめがぁーっ……〉

首を落とされる瞬間を思いだしたのか、ロッグウェルの首は怒りと苦痛に顔を醜く歪め呪いの言葉を吐き出した。

〈……ガルダァーッ、話が、話が違うではないか。邪霊獣は無敵、貴様は確かにそういうたな。が、あのざまはなんだ。たかが聖油の炎に照らされただけで失うような力など欲しくはないわ。力を、きゃつらを、ラオスを屠り去る力を儂にくれーっ〉

「おお、その気力、その執念、それこそ私が必要としているもの。ご心配めさるな、あなたのその想い、決

して無駄にはしない」
〈なにぃ……〉
「あなただけではない、ゴズアルの兵、ミッドガルドの民たち、そのすべてが流した血と苦痛、恐怖と怒りと呪いの言葉、それらは皆、約束された犠牲。大いなる魔王の復活のためにどうしても必要とされたもの……」
〈ガルダ……おのれは、おのれはわざと我らゴズアルに強襲をしむけたな……〉
「すべては時の意志……。その流れに従い人々を導くが、我ら魔導師の役目……」
突然ロッグウェルが笑いだした。
〈……その流れの行く先は滅びかよ……いいだろう、ガルダ。その大いなる暗黒の魔王、この身体を使って目覚めさせい。すべての生きとし生けるものに、恐怖と絶望をもたらせい。今度こそ儂は永遠の命となるわ……〉
ロッグウェルの笑い声の中、ガルダは再び詠唱を始めた。
「……エーヌドル・アル・ハッシャベル……ギルバドル・イグニシアルベア……エーヌドル・アル・ハッシャ……。出でよ、光に封じられし暗黒の王、絶対の暗黒神ザウエルよ」
ウオォオォーン、ウオォオォーン……。
低い唸りとともにロッグウェルの首が細かく震えだした。その震えはどんどんと速く細かくなり、空間そのものを揺るがした。
突然、ロッグウェルの首が闇に食われた。食われたかのように暗黒の闇が生まれた。そして、そこから凄まじい勢いで血が噴き出してきた。これまでの戦いで流された量の血がここに集まるかのように、とめどなく虚

空から溢れ出してくる。ただの血ではない。その色は闇よりも黒く、しかも意志を持っていた。生きている闇、とでも言えばいいのだろうか。邪神官の眼の前で、それは一つの形になり始めた。
ドクン、ドクン、ドクン……。
血が波うつたびに、その姿は巨大になっていく。
そして——闇が吠えた。
「ロッグウェルよ、喜べ。貴方の怨念、見事、凍てついた時の封印を食い破ったわ。今こそ、暗黒の創世記の始まりだ。無限の闇がこの地を食いつくすわ」
闇の中に、邪神官の笑い声と魔神の咆哮が響き渡っていた。

12

ゴズアルのシルドアレン急襲の後、アムルは丸一日眠り続けた。次の日の午後、ようやく目覚めた彼は意識不明のファドを見舞い、その足で大司祭オードンのもとを訪ねた。大司祭は未だに石畳に埋め込まれたままになっていた。
「年寄りがウルドの山奥からノコノコと出てくるからこういう目に遭う」オードンは自嘲した。
「で、何が聞きたいのかな?」アムルに尋ねた。
「アリーシャ姫は、ガルダは彼女を何処に連れ去ったんですか」
「知ってどうする？　助けに行くか」
「分かりきったことを聞くのは年寄りの悪い癖ですよ」

「……さて、今のお前さんで助け出せるかな。あの時もアリーシャの助けがなければ、ガルダめにのど笛を斬り裂かれていたのはお前さんではないかのぉ。いざとなったら、また龍にでも変身するおつもりかな」
そう言ってアムルの瞳をのぞき込んだ。
確かに老人の言う通りだった。あの邪神官の強さは彼自身も骨身にしみている。ましてや龍に変身するなど、一夜の夢としか思えない。
――それでも、俺は助けにいかなければならない。
理屈にならない想いが、アムルの気持ちをはやらせていた。オードンをにらみ返す。
自分を見つめるこの若者の視線に、逆に、まぶしそうに二、三度まばたきすると大司祭はため息をついた。
「とめても無駄……か。血は争えぬな」
「親父のことですか？」
「こんなことは分かっていた筈なんじゃが、年をとるとどうもくどくなっていかんのぉ。奴が一人でロッグウエルを倒しに行くと言い出した時と同じじゃ。お前の親父殿からの預かり物がある。持っていきなされ」
オードンが青い皮の袋を差し出した。表面をびっしりと小さな鱗が覆っている。その中に、赤石のついた頭飾りと古い地図が入っていた。怪訝そうに見ているアムルに、老人は言った。
「そいつはお前さんの一族に伝わる宝玉だ。その地図にはラフィエルの村の位置と《聖剣》の隠し場所が記されておる」
「《聖剣》……？」
「ラフィエル……龍の眷属に伝わる伝説の剣じゃ。かつて、この大陸には今以上に様々な生き物が住んでおっ

た。森の民ノーム、巨人族ギガント、亜人種とでもいうか、人の形をしていながら人以上の力を持つ者たちだ。儂の若い頃はそういう奴らがまだ随分と残っとって、人間たちと共存共栄、それなりにうまくやっとったんじゃがのう、先の暗黒神と太陽神の戦い以来、すっかり減ってしもうた。中でもラフィエル族は意志の力の強い一族での。自身の〈想い〉を〈力〉に変える、意志の力で結界を張ったり攻撃したり……。いってみりゃあ、わしら魔術師も彼らの弟子みたいなもんじゃの。〝気〟をあやつる術は、ラフィエルが教えてくれたものが最初じゃ。もっとも、人と彼らではそのレベルが違うらしい。その身を龍に変えることができるような者がいるくらいじゃからのう」

「じゃあ、伝説のブルードラゴンというのも、ラフィエル族が……」

「ロイ・ラフィエルとかいったらしい。お前さんと一緒だ。惚れた女を暗黒神に殺された仇討ちだったそうじゃ。恋という奴はたいしたもんじゃのお。力の使い方も分からぬお前さんでも、まがりなりにも変身させるんじゃから」

「いや、それは……」

アムルは父の形見を握りしめた。自分の前に大きな運命の扉が開いていくような気がしていた。

「お前の父上がゴズアルに旅立つ前の日にわしの神殿にきて、預けていったんじゃ。息子が龍の一族の宿命に目覚めた時に渡して欲しいと言ってな。《聖剣》とその赤石が必ず力を与えてくれる筈だとも言うとったわ。何故スコット殿が村を離れ傭兵まがいのことをしていたのかはとうとう聞かんずくじゃったがな……」

老人はちょっとの間、遠い目をしていたが、すぐにアムルに視線を戻した。

「ガルダは、恐らく極北の国、虚無氷河の中につくられたダークキャッスルにおるはずじゃ」

「虚無氷河？　あの凍土の果ての、ですか」
　太陽神の伝説によれば、暗黒神ザウエルは太陽神アーリアと聖龍ブルードラゴンとの死闘の末に、時さえも凍らせる虚無氷河の中に封じ込められた。その氷河の上に陣取って邪神官が企んでいることといえば……。
「暗黒神の復活……」アムルが唸った。
「ああ、どうやら今度の戦いは、勝ち負けはどうでもよかったらしいわ。流れた血の量、倒れた人の数、この地を覆った恐怖と怨念、そういうものを糧にして、ザウエル本体を目覚めさせようとしとる。そうなったら、わしらでは手の打ちようがない。どうやらアリーシャの予言通り、お前に最後の希望を託すしかないようだわい。アムルよ、《聖剣》を手にいれて己の中の龍を本当に目覚めさせろ。その旅の連れにわしの一番弟子を預けようて」
　路地の向こうに馬に乗った巫子戦士が待っていた。オードンが言う連れとは、ターナのことだった。アムルを見て微笑む。
「一番弟子というほどのものではありませんが、よろしく」
　断ろうとしたアムルだったが、
「邪霊獣相手に、お前の剣だけでは心許ないわ。なぁに、この街のことならば心配するな。石畳に埋め込まれたのが不幸中の幸い。このシルドアレンの都が今ではわしの身体のようなもの。わしを倒さぬ限りこの街は滅ぼすことはできん。策士策に溺れる、ガルダめ、自分の罠が裏目に出おったわ」と、笑う大司祭に押し切られるような形になった。
　翌日の夜明け前、深い霧に包まれたシルドアレンの街を、誰見送るわけでもなく二人は旅立った。この街の

命運を賭けた者たちの旅立ちにしては、静かなものであった。

それから半日後、同じ北の市門から、一人の男を乗せた馬が飛び出したことを彼らは知るはずもなかった。

ピンと張りつめた空気だ。森は深閑と静まり返っている。

時々ゴウッと風が起こるのは、今でも活発に噴煙を吐き出すベスパロスの火口の息吹か。その風にあおられて焚火の炎が揺れる。

アムルは、見つめていた地図から顔を上げ、沸かしていたお茶を一口すすった。眠らずの木の葉を煮だしたものだ。茶色い液体の香りと苦みが、目の裏の軽い眠気を払ってくれる。

五日目の夜。地図に描かれている通り、ベスパロス山の麓に小さな森に囲まれた湖があった。そこから先は山岳地帯だ。彼らはその湖のほとりにキャンプをはった。ターナを先に寝かせ、アムルが不寝番をしていた。焚火の側に座り地図をながめている。

「……八つの龍を呑み喰らう穴、か……」

アムルは腰につけた革の袋から木ノ実を取り出すと、二、三個口に放り込んだ。硬い果肉を噛み砕くと、香ばしい甘味が口の中に広がった。

地図にはベスパロス山の中腹に印がしてあった。そこがラフィエルの村らしい。余白に手書きで、〈天怒る時八つの龍を呑み喰らう穴、かの地に約束の剣は眠る〉と書き込まれている。それがスコットの筆跡かどうかと言われると、彼にも自信がない。が、今はそれを信じるしかない。

物心ついた時には父と二人、旅から旅に明け暮れた毎日だった。それ以前のこと、自分がどこで生まれ何故

旅をしていたのか。それは覚えていない。記憶に残っているのは、旅の中で自分を鍛えてくれた父の姿だけだ。

ミッドガルドにたどり着き、どういうつてか士官学校に押し込められてからは、その父ともろくに会っていない。彼の戦死も上官から聞いたくらいだ。それが、まさか暗殺隊だったとは……。

（……目的のためには手段を選ばない。龍騎士の名に恥じぬ立派な戦士でしたよ……）

不意に、仮面の邪神官の声が蘇った。奴のことを思い出すと、背骨に熱いものが走る。それを抑えて、思考に集中しようとした。

「……約束の剣ってのは聖剣のことだな。問題は、八つの龍が呑まれる穴だ。洞窟か、井戸か……」と、そこまで言ってため息をついた。「……駄目だ駄目だ。これ以上考えたって見当つかない。ま、行ってみなきゃ話にならんな」

残っていた木ノ実を口に放り込んで、地図を軽く丸めると袋にしまった。そろそろターナが見張りの交代に起きる頃だ。アムルは大きく背伸びをした。

その時、彼は、信じられない光景を見た。

湖の上に騎士が立っていた。

奇妙な鎧をつけた大柄の騎士だった。腕も、脚も、胸も腹も腰も、全身を銀のプレート・アーマーで覆っている。フルヘルムをつけ、顔の被いをおろしているため、どんな表情でいるのかは分からない。左手に持った銀色の盾には赤く、炎に包まれた龍の顔が描かれていた。ゴズアルでも、ミッドガルドでも、近隣諸国のものでもない。今まで見たことのない紋章だった。

どういう力なのか、銀騎士はそれだけの重装備をしながら、湖の水面に立っていた。足元に、静かに波紋が広がった。騎士がゆっくりと動き始めた。歩いているのではない。Vの字型の波紋の頂点に立ち、滑るようにこちらに近づいてくる。

アムルに一瞬緊張が走った。が、騎士は腰に下げている細身の剣からは手を離していた。とりあえず不意をついて襲ってきたのではないらしい。岸の近くで、銀騎士の動きが止まった。

「立ち去れ」

彼は、いきなりアムルにこう言った。

「ここから先は、お前たちのような者の来るところではない。さっさと立ち去れ」

「えらそうに……。なんだ、お前は」言ってから気がついた。騎士は、喋ってはいなかった。アムルの心に直接語りかけていた。

「器用な真似をする奴だな。何の用だ」

騎士は、アムルの問いには構わず一方的に言葉を続けた。

「ここより先は封印された土地。へたに近づくと命はない。何の用だか知らないが、長生きしたければおとなしく引き返すことだな」

「封印された土地……、どういうことだ。この先は俺の故郷、ラフィエルの村の筈。何か知ってるんなら、話を聞かせてもらいたいね」

アムルの言葉に、急に騎士の態度が変わった。

「故郷？　何者だ、貴様」

やる気だな。微妙な敵意をアムルは見逃さなかった。いつでも剣を構えられるよう身体を開きながら、
「俺の名は、アムル。アムル・ラル・ラフィエル。ミッドガルドの国境守備隊長だ」
彼は剣に手をかけた。が、銀騎士は不意に緊張をといた。
「ラフィエル？　ふふん、成程、狙いは《聖剣》だな」
「ど、どうしてそれを」
今度はアムルが焦る番だ。
「お前の頭飾りがそう言っている」
その時、後ろで人の気配がした。ターナが起き出していた。
銀騎士は片足で水面を蹴った。
「どうやら、邪魔が入ったようだ。アムルとか言ったな。もしも、お前が聖剣を手に入れることができたら、その時にもう一度、俺たちは逢うことになるだろう。せいぜい頑張ることだな」
水面が大きく揺れた。
「なんだっ!?」
突然、水中から何かが飛び上がった。水しぶきが二人にかかる。頭の上を巨大な影がかすめた。振り返ったアムルは絶句した。
「翼龍……」
翼を持つ龍が空を舞っていた。その背に銀騎士が乗っていた。馬を操るように翼龍を操って、彼は空を駆けていた。水面に立っているように見えたのは、湖にもぐったあの龍の背に乗っていたためだった。

アムルは馬で追おうとした。それを、ターナがとめる。
「無駄よ、アムル。馬の足じゃとても追いつけないわ」
確かに、既に銀騎士の姿は、空の闇に吸い込まれるように消えていた。
「思わせぶりな台詞だけ吐きやがって。何者だったんだろう、奴は」
「さあ」ターナが肩をすくめた。「あの紋章も鎧の細工も見かけないものだったわね」
「ゴズアルかな」
「どうでしょう。翼龍を操る騎士の噂なんて聞いたことがないし……」
ターナも首をかしげていた。
その時、アムルの耳に蹄の音が聞こえた。
「しっ。誰か来る。奴の仲間かもしれない」
木立の闇から馬に乗った人影が現れた。反射的に剣を構えたアムルだったが、炎に照らされたその顔を見て動きを止めた。見覚えのある男だった。
「ライン……」
金髪の近衛隊長が、そこにいた。
整った作りの顔には、先日の戦いでうけた傷がまだはっきりと残っている。それが彼の印象を一段と険しいものにしていた。厚手のレザーメイルの上に鈍く輝く青い胸当てをつけ、右の肩口から左のわき腹にかけて太い革のベルトを通して、大剣を背に結わえつけている。その剣のためか、自慢のブルーのマントは今日はつけていない。馬を近くの木立にとめると、ゆっくりと近づいてきた。

「剣を向けての出迎えか。それほど招かれざる客かな」
「兄さん、何故こんな所まで」
ターナは尋ねた。ラインは彼女をにらみつけると、
「私に黙ってこんな男と旅に出るとはな。だから私は、お前をウルドにやることには反対だったんだ」
その言葉に、ターナが笑いだした。ラインの顔色が変わった。
「な、なにがおかしい」
「だって、兄さんの言い方だと私たちが駆落ちでもしてるみたいじゃない」
「おいおい、そりゃ誤解だ」
あわててアムルも口をはさんだ。
「誰もそんなことは言ってない。オードン様の命とはいえ、こんな危険な旅にお前をやることが兄として悔しいのだ」ラインはアムルに顔を向けた。「アリーシャ姫奪回の旅、私も同行させてもらうぞ」
妙に迫力のある、何処か思いつめたような声だった。
「しかし、お前には残った近衛隊を指揮してミッドガルドを再建する役目があるんじゃなかったのか」アムルが聞く。
「ラオス王の許可はいただいてある。それが証拠に、王は私にこの剣を与えて下さった」
ベルトをはずし、背の大剣をアムルに見せた。
「この剣は……」
「そう。ミッドガルド城に封印されていた《嘆きの大剣》だ。私はこの剣で、ロッグウェルの首を叩き落とし

た」

「見つかったのですか、ロッグウェル、いや、グレイ王子の首は」

ターナが聞いた。彼女たちが出発する時には、かの首が消え失せたという噂が街中を駆け巡っていた。

「いや、まだだ」ラインはかぶりをふった。「神殿にまつり、迷える魂を太陽神のもとに届けない限り再び王子の亡霊がシルドアレンを襲うなどという不穏な噂を流す者もいるが、なあに、それもあの邪神官を倒せばすぐに消える」

「えらく簡単に言うじゃないか」

アムルがあきれたように言う。少しの間、彼はラインを見つめていたが、やがて大きく一つ息を吐いた。

「……まあ、いい。ついてくるんなら文句は言わない。腕の立つ奴ならなおのことだ。じゃあ、俺は寝るぜ。休めるときにはきっちり休む。それが国境のやり方だ」

「アムル……」

テントに向かう彼にターナが声をかけた。ふりむいた彼に、軽く微笑んだ。彼女なりの感謝の念の表れらしい。ちょっと照れたのか、アムルは一段と厳しい顔をつくって彼女をにらむと、

「明日からは山にはいる。馬はここに置いていくから厳しい行程になるぞ。今のうちに眠っとけよ」

そういって寝床に潜り込んだ。

アムルの言葉が聞こえたかどうか、ラインは背を向け馬の荷を下ろしていた。ターナは、その兄の背中をじっと見つめていた。

「ライン兄さん、無茶なことを……」

ラインが手を止めポツリと言った。
「……ターナ、お前は信じるか。人が龍になるというオードン様のお言葉を」
「それが、神の御言葉ならばたとえ誰の口から出た言葉だろうと信じるわ」
「……巫子の模範のような答えだな」
「言葉だけじゃないわ。兄さんも見たはずよ、シルドアレンの空に聖龍が現れたのを。あれがアムルの力。私はその力に最後の希望を託すわ。大司祭様も同じ思いの筈」
「ああ、確かに見た。ブルードラゴンだけではない。ゴズアルの兵が邪霊獣に変わる姿を、ロッグウェルが巨獣に変身するさまを、この両の眼でしっかりと見た。我らミッドガルドの騎士たちがなす術もなくきゃつらに蹂躙されるさまをな」
ラインは、ターナの方に身体を向き直し、その鳶色の瞳を見つめて、ゆっくりと言った。
「……ターナよ。では、人とは何なんだ」
「え……」
「龍族が、ラフィエルだけが選ばれた者なのか。では、私たちは何なんだ。私たち、人は何のために神を信じ闇と戦う。奴らに滅ぼされるためか。人では邪神には歯が立たぬか」
「そんな……」
ラインは、押しつぶしたような低い声で言った。
「私は、それを見極めたい」
テントの中でアムルはごろりと寝返りをうった。

「選ばれた者？　そんな都合のいいもんなら、こんな苦労はしないさ……」
そうつぶやくと、身体をくるんでいた毛布の端を顔まで引き上げて、目を閉じた。銀の騎士といい、ラインの出現といい、眠れない夜になりそうだった。

「ここが、ラフィエルの村……」
目の前に広がった光景に、アムルたち三人は息を呑んでいた。
シルドアレンを離れること一週間。大河アヂリスを渡り、火山地帯の奥に入り、眠れる神々の峯といわれるベスパロスの山頂に入るために馬を捨てた。その間、幾つかの戦いが行われたが、ゴズアルの残党であったり盗賊や野獣のたぐいだったりして、この三人の力をもってすればそれほどの苦労もせずに切り抜けられるようなものばかりであった。最初に予想されていた邪霊獣や死人兵の襲撃は全くなかった。
「ゴズアルも小休止ってとこかな」
アムルの言葉がどこまで当たっていたのか。とにかく、予定通り一週間目の今日、地図上で言えば確かにラフィエルの村とおぼしき所までたどり着いたのだ。
が、険しい山道を越え、峠の向こうに突然その山肌が見えた時、そこに広がる光景は彼らの予想とは全く異なるものであった。
峠の向こうに岩山がそびえていた。奇妙な山だった。麓の所々に亀裂が走り、深い谷をつくっている。赤茶けた山肌には草一本生えていない。その山肌を、頂上から麓に向かって何本も、ちょうど巨大な蛇がうねり這

った跡のように深いくぼみが走っていた。
その中腹あたりに、大小さまざまな大きさの穴が幾つも開いていた。風穴だろうか、その穴を風が通り抜ける度に、山が哭くような音が響いている。
が、アムルたちを驚かせたのは、その風景ではない。そこに棲むものたちの姿だった。
「龍の山……」ラインがつぶやいた。
そこに龍がいた。
何百匹もの龍が、風穴を住処に暮らしていた。
龍、とはいっても、ブルードラゴンのような伝説上のそれとは全く違う。むしろ翼を持つ大型爬虫類といったほうがよい。体長は大きめの馬程度だが、翼を広げるとその五、六倍はありそうだ。灰色の角質化した皮膚、長く伸びた首、前足は翼と一体化しわずかに四本の爪が途中から出ている。紡錘状に斜め上に伸びた後頭部が印象的だ。
「原龍だ、原龍だったんだ……あれよアムル。あの銀の騎士が乗っていたのは」ターナが言った。二日前の夜、彼らの前に姿を見せた謎の銀の鎧の騎士。彼が馬代わりに操っていたのは、目の前にいる爬虫類だった。
「原龍……?」アムルが聞いた。
「ええ、ウルドの神殿書館で読んだことがあるわ。まだこの大陸に地の精霊や巨人たちが生きていた遥か昔、空駆ける巨獣が棲んでいた。聖獣ドラゴンと区別して、その巨獣たちのことを原龍と呼ぶ……。あの銀騎士は、彼らを飼い慣らしていたんだわ。でもなぜ、こんな所に原龍が……」

「ガルダの仕業だ。くそう、みすみす待ち伏せをくらうとは」
ラインが、背の剣に手をかけた。それをアムルがとめた。
「やめろ、ライン」
「臆病風にでも吹かれたか」
「いや。俺には奴らが邪霊獣だとは思えない。見てみろ、奴らの姿を」
アムルは、山肌に広がる原龍の村を指さした。
灰色の翼を広げ風に乗り宙を舞うもの、退化した前足の代わりに後ろ足を器用に使って硬い殻の果実を割るもの、その中の果汁を求めはいずり寄る幼い子龍たち。その表情は穏やかで、彼らの灰色の瞳は知性すら感じさせた。
「奴らはここで生きているんだ、自分たちの意志でな。ここは本当に龍の村なんだよ」
アムルの言葉にターナもうなずいた。
「確かに、今のところ、闇の波動は感じられないわ。」
ラインが緊張をとき、剣から手を離した。アムルに言う。
「で、どうするんだ。このまま、あの龍たちの暮らしぶりを眺めているつもりか。それともあれが、ラフィエルの一族とでもいうのかな」
「兄さん」
ラインの皮肉に、ターナの顔色が変わった。が、当のアムルはそんなことは意にも介さず、黙って山肌をにらみつけている。

「どうした……」
ラインもはぐらかされて、アムルの顔をのぞき込んだ。
「ようし、あれだ」突然アムルが、山肌の中央辺りにある一際大きな風穴を指さした。
「あそこが八つの龍を呑みこむ穴だ。あの穴の中に《聖剣》が眠っている」
そう言うと、岩山の方へ足を早めた。ラインたちもあわてて後を追う。
「なぜ、わかったの」
ターナが尋ねた。アムルが笑った。
「あのでかい穴なら、原龍が八匹くらい入りそうじゃないか」
「そんな、いい加減な。もし違っていたらどうする」
ラインが苦い顔をした。
「その時は、また別の穴を探せばいい。龍族の暮らしを見学に来たわけじゃないんだろう。黙って見てたってしょうがない」
「あなたらしいやり方だわ」ターナが肩をすくめた。
風向きが変わったのだろうか。吹く風はどこか生暖かく湿気を帯び、身体にべったりと絡みつくようで、谷を渡り岩山の麓にたどり着く頃には、三人とも汗で服がずくずくになっていた。
その汗を乾かすように、さわ、と一吹き、風が疾った。
と、原龍たちの様子が突然変わった。一斉に頭を上げると、風の匂いを嗅ぐように顔を動かす。
クォオーーッ。

一匹が大きく鳴くと、翼を広げて飛び立った。続いて一匹、もう一匹、みるみるうちにそこにいた原龍たちは宙に舞っていった。灰色に淀んだ空が、彼らの姿でびっしりと埋まった。

「気づかれたか」

アムルが言った。

「いや、攻撃するつもりはないみたいよ」

見上げたターナの顔に、ポツリと水滴が落ちてきた。

「雨？」

いつの間にか、真っ黒な雨雲が山の上を覆っていた。そこから落ちてくる大粒の雨が、みるみる地面を濡らしていく。稲光が天を疾った。

「雨が嫌いとは、ずいぶん軟弱な龍もいたものだな」ラインが稲妻に目を細めた。

「とにかく、これで奴らを追い払う手間が省けた。今のうちだ」

アムルはそう言うと、山肌をよじ登り始めた。

が、流される土砂に足を取られ思うようには進めない。稲妻を合図に、天の底が抜けたようだった。ほんのわずかの間ににわか雨は大豪雨と化していた。

活発な火山活動により蒸発した大量の水蒸気が空で冷やされて、大スコールとなって落ちてくる。この山ではよくあることだったが、そんなことをアムルたちが知るはずもない。ましてや原龍たちが何を恐れて山肌から飛び立ったのか想像できるはずもなかった。

どどどどど……。低い唸りが聞こえてきた。

「何？」
アムルたちが顔を上げるよりも先に、いきなり猛烈な勢いで水が上から襲いかかってきた。
流れに巻き込まれそうになったアムルは、剣を山肌に突き立てた。剣身が半分隠れる程深く土に埋まり込んだ。その剣にしがみついて身体を支える。
「二人とも大丈夫か」
アムルが振り返ると、ラインもターナも同様に剣を突き立てている。それでも、ともすれば押し流されそうになる。恐ろしいほどの勢いだ。しかもその水量はどんどんと増え、今ではアムルたちの腰の辺りまで流れは来ていた。雨足は一層強く激しくなっている。
「こいつか、奴らが恐れていたのは……」
ラインは激しく叩く雨に顔を歪めている。足を取られないようにするのがやっとだった。
稲妻が何本も空を走る。つい先程までは穏やかな龍の棲む村だったこの山肌が、一瞬のうちに怒れる水神の山と化していた。
稲妻の一つが頂上を狙った。落雷の衝撃に、堅い岩盤が砕け散る。
上を見てアムルが何か叫んだ。が、激しい雨と水流の唸りに阻まれて、わずか数十歩後ろにいるターナたちにすら声が届かない。
「なに？　聞こえないわ！」
聞き直すターナに、アムルは上を指さした。
どどどぉっ。荒れ狂う水の暴走に交じって、人ほどはあろうかという大岩が転がってきた。

「危ないっ！」驚いたターナのすぐ横をかすめて、岩は落ちていった。
同時に、刺した剣身を浅くしてアムルがすべり降りてきた。ラインとターナがその身体を受け止めた。
「岩が落ちてくるから気をつけろって言ったんだ」
再び剣を深く突き刺しながらアムルが言った。ターナがため息をついた。
「ご忠告ありがとう」
「結界は張れないのか」
ラインが聞く。ターナはかぶりをふった。
「結界は邪悪な意志を封じるもの。自然の営みには通じない」
「止むのを待つしかないか」
ラインは片手を目の上にかざして、雨をよけながら雲の様子を見た。
「それまでこっちがもてばいいけど」
剣の柄を握りしめる彼女の両手が青白くなっていた。ラインも手がこわばってきている。雨と水流が、身体の熱をどんどん奪っていく。ちょっと気をゆるめると、水の下を流れる土砂に足をすくわれそうになった。もしそうなれば、さっきの大岩と同じ運命だ。谷底めがけてあっという間に流されるだろう。
ラインは、麓にポッカリと口を開けた深淵を見おろした。ぞっとしない景色だ。その谷に向かって、何本もの濁流がうねりながら走り滝になって落ちていく。そのさまは、さながら猛る龍が敵に向かい喰らいつくようであった。
「あれも龍が呑まれる穴だな……」

「どうしたの」ラインの独白を耳にしたターナが聞き直した。
「何でもない。水流が龍の首に見えただけだ」
「水流？」アムルも下を眺めた。
「確かに、谷の底に龍が長い首を突っ込むように見えないこともないわね……」と、言うターナの顔色が徐々に変わっていった。「一つ、二つ……あの谷に落ちる滝はちょうど八本あるわ！」
「偶然の一致じゃないのか」ラインは冷静だ。
「いや、偶然じゃない」アムルが谷を指さした。「あの流れを見てみろ。地面を削られた跡に沿って河のように走っている。流れのルートは決まってるんだ。こういうスコールの時には、常にあの谷には八本の滝が流れ込む」
　猛スコールが岩山に落とした大量の水は、頂上付近の水を吸わない岩肌を走り、地形に沿って何本かの大きな水流となって麓に向かい猛烈な勢いで流れていく。その勢いが岩を崩し土を削る。巨大な蛇の這った跡は、こうしてできたものだった。
　その水流の一つに彼らは巻き込まれたのだ。
「しかし……」ラインは釈然としない。
「もう一つ、決め手がある」
「決め手？」
　そう言ったターナは、アムルの顔を見て口ごもった。彼の瞳が、真っ赤に変わっていた。彼の身体に気が満ちているのが、はっきりと分かった。アムルは、力強くうなずいた。

「俺の背骨がな、あそこだって言ってるんだ」
　身体を支えていた剣を引き抜こうとする彼の手を、ラインが押さえた。
「無茶はやめろ。流れに巻き込まれたら、命はないぞ」
「あの邪神官相手だ。このくらいの無茶はしなきゃ、アリーシャ姫は助けられないさ。あの谷だ。きっとあそこに聖剣がある」
「兄さん、アムルを信じましょう」
　ターナがラインの肩に手をかけた。躊躇するラインを振り切ってアムルが剣を抜いた。あっという間に谷に向かって流されていく。
「ターナ、お前は――」
　とがめようとしたターナも、アムルの後を追って流れに呑まれていた。
「ええい、ままよ。太陽神よ、我にご加護を！」
　ラインもやけ気味に剣を引き抜いた。たちまち、水流の中に姿を消していく。
　三人を呑み込んだ水流は、地を揺るがして深淵に吸い込まれていった。その滝の中に一つ、青い輝きが煌めいた。

14

　水滴が地面を叩く音がする。天井から落ちる水の音だろうか。その音に、ラインは目を覚ました。洞窟の中は、暗く、その音以外はしんと静まり返っていた。

ゆっくりと身体を起こす。起き上がってから、それでも右手にしっかりと大剣を握りしめていることに気がついた。

「命よりも大事か、この剣が」

あの猛烈な勢いの水流の中でも、王より預かった大剣を離さなかった自分が何故か可笑しかった。これでは、聖剣ほしさに命をかけたアムルのことは笑えない。

「気がついたようね」

ターナの声が洞窟に響いた。ラインは立ち上がり、身体を動かしてみた。幸いどこにも怪我はないようだ。

「どうやら無事のようだな。あいつはどうした」

「ここで眠ってるわ」

「眠る？」

目をこらすと、ターナの姿がぼんやりと浮かび上がった。片膝をついて、横たわっているアムルの胸に両手を押し当てている。生命力の気を送り込んでいるらしい。黄金の甲冑を脱ぎ、今はウルド綿で織ったシャツ一枚になっていた。濡れたシャツは彼女の身体の柔らかい曲線を、はっきり現している。こうしてみると、この勇ましい妹も年相応の若い乙女だった。

と、そこまで思って、この洞窟が完全な暗闇ではないことに思い当たった。どうやら洞窟全体が、微かに光を放っているらしい。

「この光は……」

「光苔の一種みたいね」

ラインは辺りの様子を窺った。深い洞窟の一角らしい。前も後ろも一本の横穴で、その向こうは深い闇になっている。光苔の明かりではあまり遠くまで見通せないのだろう。
「ずいぶん深いな。ここが谷の中か」
「滝の裏側に隠れていた横穴に飛び込んだの。アムルが私たちを抱えてね」
「変身……したのか」
確かにラインも、濁流の中で青い光に包まれたような気はしていた。あまり認めたくないことではあったが……。
「ええ。後を追った私たちを濁流の中からすくい上げると、ここまで飛んで気を失ったの。どうやらアムルの勘は当たったようね。この洞窟は、人により造られたものだわ」
二人は、辺りを見回した。一見土と岩の塊のこの穴も注意して見ると土に埋もれた柱やレリーフの跡などが残っている。淡く洞窟を照らす光苔も、人為的に繁殖させたものかもしれない。
「神殿の遺跡ね。多分、これがラフィエルの村……」
ラインは、妹の観察眼に舌を巻いた。
「たいしたものだ、ターナ。戦場でそれだけ冷静でいられれば、一人前の戦士だ。近衛隊でも充分に通用するぞ。死んだ父上は悲しむかもしれんがな」
「ベルバード家の娘が、剣を持つなど絶対に許さん。そう言ってましたからね、お父様は」
ラインたちの父、ベルバード卿はラオス王の腹心にして無二の親友だったが、五年前に病死していた。屈強で鳴らした大騎士が、わずか一〇日ほどの間に高熱を出してのたうち回りながら死んでいった。その死の奇

怪さゆえ、暗黒神の呪い(のろい)と噂(うわさ)されたほどだ。それまで神殿巫子(みこ)団の一巫子にすぎなかったターナが、神殿都市ウルドに行き直接大司祭オードンの教えを乞(こ)いたいと決意したのは、その事件がきっかけだったのかも知れない。ラインは、そう思っていた。

父の亡骸(なきがら)の横で、「私に力があれば……私に力があれば……」と泣きじゃくっていた妹の姿は今でもはっきりと思い出すことができる。

「で、どうだ。気がつきそうか」

ラインは横たわるアムルをのぞき込んだ。

「どうでしょう、あたしにも見当つかない。聖剣なしで変身するには大変な精神力を必要とするらしいから」

ラインは黙って大剣を握りしめると、ゆっくりと奥に向かって進み始めた。

「どこに行くの」

「いつ起きるか分からない奴を待っててもしょうがない。こいつの勘が当たったのなら、この洞穴(ほらあな)の何処(どこ)かに聖剣が眠っているはずだ。ついでに出口も確認しておく」

「ちょっと待って」

「その眠れる王子様を一人、放り出すわけにはいかないだろう。ターナはここで様子を見ていろ。なあに、すぐに戻ってくる」

「違うの。アムルの、アムルの様子がおかしい」

ターナの言う通りだった。いつの間にか、アムルが起き上がっていた。が、彼の表情に生気(せいき)はなかった。目を閉じたまま闇の奥に顔を向けている。

と、闇の中から一本の赤い光が走ってきた。細い、糸のような光だった。その光がアムルの頭飾りの赤石に吸い込まれた。弾けるように、赤石が明るく輝く。そのまぶしさにラインたちは思わず目を伏せた。
三人の身体を包み込むように光は広がった。ふわりと、三人の身体が宙に浮いた。そして、赤い光が走ってきた方に向かって、すべるように動きだしていった。
ターナは、脱いでいた甲冑をてきぱきと身につけて、不測の事態に備えていた。赤石が輝いた瞬間に、側に置いてあった甲冑をひっつかんでいたのだ。
「どこへ連れてこうってんだ」
ラインは光球の中から周りを見上げて言った。
「決まってるさ。《聖剣》の所へだ」
力強い声がした。アムルが意識を取り戻していた。
「アムル」
「気がついたか」
ターナとラインが交互に声をかけた。
「ああ。脳みそをわしづかみにされたような気分だけどな」
アムルはこめかみに手を当て軽く頭を振った。どうやら赤石の閃光が、彼の意識になんらかの衝撃を与えたらしい。
彼ら三人を包んで、光球はすべるように洞窟の中を走っていく。それに合わせて、洞窟の壁や床が輝きだした。彼らを導くように光が奥へと走っていく。それまで土の中に埋もれていた壁の装飾や柱のレリーフが、再

びその鮮やかな姿を取り戻し始めた。
「きれい。光の回廊ね……」
ターナがため息をついた。アムルもラインも洞窟の変貌に息を呑んでいる。
その時、今まで耳にしたことのない響きの声がした。
〈よくきました、龍の子よ、光の使徒たちよ〉
その声は、厳かではあったが柔らかい。どこか女性的な印象を受ける響きだった。
「太陽神よ、太陽神が語りかけてるのよ」ターナが言った。「アーリアは人の前に現れるときは、女神の姿を取る。そう聞いているわ」
アムルは、流れる光に向かって喋り始めた。
「お聞き下さい、太陽神アーリア。私の名はアムル・ラル・ラフィエル、龍の一族の末裔と呼ばれています。《聖剣》を求めてこの洞窟に入りました」
彼を諌めるように、声はゆっくりと話し始めた。
〈落ち着きなさい、アムル。残念ながら私は太陽神ではない。私は、太陽神に代わり、来るべき選ばれし者を導くために、この聖域を護ってきたラフィエル一族の意志〉
「ラフィエルの意志……？」アムルが聞き直した。
〈そうです。ラフィエルの長老たちは、何人もの意志を練り合わせてこの空間を創ったのです。私はラフィエルの意志を持つ空間。この閉ざされた神殿すべてが私なのです〉
「意志を持つ神殿……そんな馬鹿な……」

アムルが言った。その彼にターナがささやきかける。
「意志の力で龍に変身する男を見た時に、私たちもそうつぶやいたわ。……そんな馬鹿な、ってね」
「それもこれも、ラフィエルの力というわけか。たいしたものだな」ラインの声にはどこか冷たい響きがあった。
〈アムル・ラル・ラフィエル。選ばれし龍の子よ。貴方の力は先程見せて貰いました。意志の奔流を龍に変える身にまとうその力、見事です。貴方ならば、暗黒神の侵攻を阻むことができるかも知れません。いえ、可能性の問題ではない。阻まなければならないのです。貴方がラフィエルの最後の希望なのですから……〉
その言葉にターナは、さっきから気になっていたことを聞いてみることにした。
「ラフィエルの意志よ。先程から聞いていると、あなたの言葉の端々にどこか哀しみの響きがあるのを感じます。ラフィエル一族はどうしているのですか。地図に描かれているラフィエルの村は、原龍の住処と化していました。あなたに《聖剣》を護らせた龍の眷属は、今どこにいるのです」
ターナの問いかけに、声は少し間をおいてから、ゆっくり語り始めた。
〈……二〇年程前の事です。激しい火山活動によりこの地の結界に亀裂が生じました。そこを狙って闇の勢力が襲ってきたのです。彼らの狙いは《聖剣》。ラフィエル族は自分たちの運命を知っていたのでしょう。村の者たちが戦っている隙に、長老たちの手により、この神殿とともに《聖剣》は地の底に沈められました。やがて来るべき龍の子が手にするその日まで、たとえ魔導の術を用いても決して悟られぬように、厳重な結界を張り巡らして……。闇との死闘の末、ラフィエルの村は滅びました。わずかに生き延びた者たちもちりぢりとなり、その行方はようとして知れません。が、私は信じていました。いつか、その中から選ばれし者が、聖龍の

影を持つ者が目覚めることを〉
「それが私のことですか……」アムルが聞いた。
〈立派に育ちましたね、アムル……〉
ふと、意志の中から誰かの肉声がのぞいたような気がした。が、それもほんの一瞬のことで、すぐに声は元の調子に戻った。ラインが厳しい口調で、話に加わったのだ。
「ちょっと待ってくれ。太陽神はどうしたのだ。先の聖戦の時は、アーリアとブルードラゴン、二つの光の力が魔神ザウエルを闇に還したはずだ。なぜみすみす、ラフィエルたちを見殺しにするような真似をした」
「兄さん」ターナがラインの肩に手を置いた。
その手を振り払ってラインは言葉を続けた。
「止めるな、ターナ。今もそうだ。最後の希望などと言っているが、この男はまだ自分の力も充分にコントロールできないんだぞ。なぜ太陽神は我らの前に現れてくれない。邪神を闇に還す法を示してくれない」
沈黙が流れた。
「どうした、ラフィエルの意志よ。なぜ何も言わない」
ラインがうながした。が、声は何も応えない。そのかわりとでもいうように、光の流れが一段と速くなった。その渦の中に巻き込まれていくように、三人を包んだ光球は走っていく。
「ライン、見ろ、あれを」
アムルが前方を指さした。
光の渦の中に、星空が広がっていた。その星空に中に、彼らは飛び出した。光に包まれていた彼らの視界が

広がった。満天の星が四方に広がっていた。突然、星空の真ん中に放り出されたのだ。
「どうなってんだ、こいつは……」目の前に広がる異様な風景に、アムルが呆然としていた。
太陽が、輝いていた。
一〇年もの間、灰雲に閉ざされておぼろにしか姿を見せなかった太陽が、彼らの目の前で燦然と輝いていた。
が、それは何処か病んだ輝きだった。
「……太陽が、蝕まれている……」愕然とターナが言った。
太陽の中に幾つもの暗黒の渦があった。暗黒は、太陽を喰らうようにじりじりと広がり、分裂し、蠢いていた。時折、暗黒を焼きつくそうと太陽は炎の矢を向けるが、逆に黒い渦に呑み喰らわれてしまう。そのたびに表面を赤い炎が走る。太陽の悲鳴だった。
「……あの黒い渦が暗黒神なのか」ラインが言った。
虚空に声が響いた。
〈今、見ている光景は、実際に行われているものではありません。貴方たちに分かりやすいようにイメージを視覚化した幻視です。光と闇の戦いは、私たちの想像を遥かに超えた次元で行われています。人間の智力では、そのすべてを認識することはできません。神は、必要に応じ、人の前にさまざまな姿を借りて現れるのです。ある時は闇を光の世界に変える太陽、ある時は剣をもって闇を断つ女神アーリア。が、太陽神は今、私たちの祈りに応えられぬ程、弱っていらっしゃる〉
「負けるのですか、光が闇に!?」ターナの声が思わず荒くなった。

〈時間と空間が分かれる以前から行われてきた光と闇の闘いです。いくつかのうねりがあるのは当然でしょう。太陽神にも苦戦を強いられる時はある。今は、そういう時なのです。が、その時に乗じてこの地上を闇が支配しようとしているのも事実です。太陽神に頼るのではなく、貴方自身の力で暗黒神を闇に封じて下さい。ロイ・ラフィエルの悲劇を繰り返さないためにも……〉

「ロイ？　その名は確か……」

アムルが喋りかけた時、突然地鳴りがした。

それまで彼らの前に広がっていた虚空が消え、再び光が流れ始めた。が、その流れは先程とは異なり、どこか乱れたものに変わっていた。その中に立つアムルたちは、軽いめまいを感じて足元がふらついた。

「どうした!?」アムルが聞いた。

〈邪神官に気づかれました。地の底からものすごい勢いで、闇の意識が向かってきます〉

地鳴りは徐々に大きくなってくる。周りを囲む壁がうなるのを聞くと、ここが洞窟の中だということを、改めて思い知らされた。

「そんな。ここには厳重な結界が張られているんじゃなかったの」

ターナが言った。

〈貴方たちをこの神殿内に招き入れるためには、一瞬とはいえ結界を開かなければなりませんでした。その一瞬が闇のネットワークに見つかったのでしょう。これも運命です〉

「じゃあ、分かっていて、私達を……」

〈私は選ばれし者にラフィエルの遺産を渡すのが役目。時間がありません。アムル、さあ《聖剣》を受け取り

なさい〉
アムルの手の中で、光が、急速に一つになり始めた。彼らを包んでいた光球もその光に吸い込まれていく。神殿中の光が、今、彼の手に集まろうとしていた。
「こ、これが……！」
彼の手の中で、光が剣の形に変わっていく。アムルの背に熱いものが走り始めた。
〈そうです。《聖剣》とは、ラフィエル一族の意志の結晶。貴方の想いをその剣にぶつけなさい。その想いは剣により増幅され残留思念となります。今までのように、変身している間ずっと精神集中をしている必要はありません。貴方の意志は、ブルードラゴンの真の力を目覚めさせるのに使えます〉
「真の力!?」アムルが尋ねた。
その時、ターナが叫んだ。
「気をつけて、くるわ！」
火柱が噴き上がった。その衝撃に、天井や壁面が崩れ落ち始める。
〈アムル、龍に、ブルードラゴンに、変身しなさい、するのです。私は、この神殿は長くは持たない。ブルードラゴンになって脱出しなさい、早く、さあ、するのです……〉
語りかける声が、だんだんぶれはじめた。エコーでもかかるように何重にも響きだしたのだ。
どどぉっ。また、炎が洞窟を貫いた。
ラインが《嘆きの大剣》を振り回していた。剣身から湧き出る水が、火の勢いを弱めるが、すぐに別の箇所から炎が噴き上げて来る。

「アムル、何をしている。このまま、ここで焼け死ぬつもりか！」
「しかし……」
アムルの手に、青白色に輝く一振りの剣があった。その剣を持つだけで、何か力強いものを感じているのは確かだ。ドクッ、ドクッ。自分の心臓の鼓動がやけに大きく感じられる。しかし、具体的にどうやればいいのか。彼はまだ躊躇していた。
〈信じなさい、信じろ、ラフィエルを、神を、太陽神を、信じろ、自分を、私が、私たちが、私たちの意志が、ここを支えているうちに、剣を掲げなさい、聖剣を、さあ、剣を上に、天に向かって、掲げよ、さあ、アムル、アムルッ！〉
彼を励ます声が幾つもに分かれていた。ラフィエルの意志が、編んだ縄がほどけるように、バラバラに崩れ始めていた。
「……分かった」
アムルは大きくうなずくと、その剣を大きく上に掲げた。
「うおぉぉぉぉっ！」
光が、アムルと聖剣を包んだ。
ギアァァァァーン。
咆哮と共に、光は龍に変わった。ばさり。大きくはばたくとその身体が宙に浮いた。両足で優しく、ラインとターナを掴むと、崩れ落ちる神殿を出口に向かって飛び立った。

15

天井が崩れ、岩の塊が落ちてきた。炎が壁を地面を裂いて噴き上げてくる。地鳴りは激しくなる一方だ。神殿を包んでいた光も今はわずかに残っているだけである。

その洞窟の中を、ブルードラゴンは岩や炎を避けながら、出口に向かって滑空していった。

時折、きらめく光の中に、いくつかの光景が走っていく。

穏やかな村の風景。襲いかかるゴズアルの兵士たち。戦うラフィエルの若者。長老達に囲まれて神殿で祈る気品のある女性、祈りと共に地中に沈んでいく神殿。

人は死ぬ前に、その人生を走馬燈のように思い出すという。だとすれば、今、アムル＝ブルードラゴンたちが見ているのは、ラフィエルという一族が滅ぶ時に垣間見た、パノラマ視現象だった。ラフィエルの意志が消滅する時に解放された記憶の端々が、光と共に現れ、消えていった。

その中に、見覚えのある男がいた。仮面の魔導師が兵を指図してラフィエルの男たちを倒していく。

（ガルダ！）

アムルの意識が叫んだ。ラフィエルの村を襲ったのもあの男の仕業だったのか。怒りが身体を駆け巡った。

その時、声がした。さっきまでのようにはっきりとではない。

〈……アーリアの六つの封印を解きなさい。その時、聖龍の力は目覚め闇は永遠に朽ち果てる……〉

それは女性の声だった。

（六つの封印？）

アムルが聞いた。
〈自分の力で……暗黒神を倒すためには、封印を、封印を解きなさい……ロイの、悲劇を、繰り返さないように……〉
（ロイとは確か、聖龍に変身した男の名……彼にいったい何があったというんですか）
問いかける彼の目の前を、神殿と共に沈んだ女性の幻影が駆け抜けた。彼女は幼な子を抱いて笑っていた。笑いかけている向こうに若き日のスコットが、父がいた。
〈……アムルよ。あなたが選ばれし者となったこと、私はとても誇りに、誇りに……〉
声が消えていった。
（今の声は……かあさん!?）
ブルードラゴンが振り返った。が、すでにその幻影は炎に呑まれてかき消えていた。荒れ狂う炎はすぐ後ろにまで迫っている。神殿を支えていたラフィエルの意志にも限界がきたのか、洞窟は奥の方から音を立てて崩れ始めていた。
前方に光が見えた。洞窟の出口だった。その光めがけて、聖龍は力強くはばたいていった。
険しい山間の空に、何百匹もの原龍たちが舞っていた。
スコールはおさまったのだが、彼らも、邪悪な力が迫っていることを察知しているのだろうか。不安げに上げる鳴き声が、ベスパロスの山々にこだましていた。
ブルードラゴンが谷間の洞窟から飛び出すのと、その洞窟から炎が噴き出すのとは、一瞬の差だった。

「ああ、ラフィエルの神殿が……」
ドラゴンの脚に捕まったターナが、洞窟を呑み尽くす巨大な炎を見て、哀しみの声を上げた。
その時、飛んでいたブルードラゴンの身体が、大きく揺れた。
「どうした、アムル!?」
もう片方の脚に捕まっていたラインが叫んだ。
ゴウッ。その脚の横を火球がかすめた。この火の球の攻撃を受けたらしい。
ブルードラゴンのすぐ上を、巨大な火の鳥が飛んでいた。
燃えさかる炎で全身を包んでいる。その周りをガードするように、幾つもの炎の塊が回っていた。ブルードラゴンが洞窟から飛び出すのを待ちかまえていたらしい。聖龍を包み込むように炎の羽を広げていた。
「あれは……」その怪物を見たターナの顔色が変わった。
グギャアッ！　火の鳥は奇声と共に、口から炎の球を打ち出した。が、ブルードラゴンも今度はうまくかわした。岩山の頂上付近まで飛ぶと、ラインとターナを岩場に降ろした。
「アムル、気をつけて。そいつは只の邪霊獣じゃないわ」ターナが言った。「多分、あれはラウンド・フィーニックス。ザウエルに仕える邪獣神の一匹だわ」
「邪獣神?」ラインが聞いた。
「暗黒神のもと、邪霊獣たちを司る邪獣の神がいたと伝えられてるわ。邪霊獣の軍団の各部隊長のようなものね。あの火の鳥もその中の一匹。ただの邪霊獣とは力が違うわ」
ブルードラゴンは大きく吠えると、炎の羽を広げるラウンド・フィーニックスに、真っ向からぶつかってい

った。火の鳥をガードする火球の攻撃を紙一重でかわしていく。その動きは、今までとは比べものにならない速さだった。これが聖剣の力か、目の前の火炎獣の動きをブルードラゴンは完全に見切っていた。彼の翼が、フィーニックスの胴体を真っ二つに裂いた。が、——。
二つに裂かれた火の鳥を炎が包んだ。どうやら、この怪物の正体は火炎生命体らしい。炎の中でたちまち元の姿に戻っていく。肉弾攻撃の通じない相手に、ブルードラゴンは一瞬とまどったようだった。その虚をついて、ラウンド・フィーニックスの火炎弾がドラゴンを襲った。かわしきれずに、翼に、腹に、直撃を食らう。
グワア。聖龍の口から苦痛の声がもれた。
「アムル！」
空を見上げていたターナは、淀んだ空気の流れを感じて後ろを振り返った。同時に、背後から風を切って何かが飛んできた。
「兄さん、後ろ！」
その声にラインもかろうじて体をかわす。微かに触れただけで、身体にいやな粘りが付着した。それは蜘蛛の糸だった。
岩山の影から、巨大な蜘蛛が姿を見せた。冷たく輝く八つの単眼、びっしりと黒い剛毛に覆われた脚、醜く膨れ上がった腹部には白い泡が固まったような膨らみが幾つもへばりついている。その醜悪さに、ラインは吐き気すら覚えるほどだった。
「ターナ、こいつも邪獣神とかいう奴か」
「ええ。ペーレント・スパイダーと呼ばれているわ」

「ペーレント？　確かにこの大きさはけたが違うな。どうやら敵も本気ってわけだ」
ラインはミッドガルド城の大広場で見た大蜘蛛を思いだしていた。あれと較べても二回り、いや、三回りは大きい。その名の通り親と子ほどの違いだった。化け物蜘蛛に手も足も出なかったあの時の屈辱が、彼の中に蘇った。剣を持つ手に力が入る。
「アムルは……」ターナは、空を見上げた。
ラウンド・フィーニックスの火炎攻撃に捕まり、ブルードラゴンは業火の中で苦しんでいた。
「奴に頼ることはない」ラインは一歩前に出た。「邪獣神だかなんだか知らないが、アムルに聖剣があるなら私にはこの大剣がある。そう簡単にやられはしない」
言うなり、大蜘蛛の方へ駆け出した。
「無茶よ、にいさん」ターナが叫んだ。
「無茶じゃない。勝算はある！」
もう一度、化け物蜘蛛にあったらどう攻めるか。何度も考えてきたことだった。あの時は不覚をとったが、今度はそうはいかない。
高さならばラインの倍はあろうかという巨体を震わせて、ペーレント・スパイダーは糸弾を撃ち出した。待っていたかのように、ラインは身体の前で剣を大きく振り回した。大剣からわきだす水が飛んでくる糸を溶かした。
もう一度糸を吐こうと、大蜘蛛が口を開けた瞬間を、ラインは逃さなかった。大剣が一閃、その口を縦に斬り裂いた。今まさに発射されんとしていた糸弾が、蜘蛛の顔面に飛び散る。緑色の体液と糸が交じった吐瀉

物が、ペーレント・スパイダーの目を覆い視界を塞いだ。大蜘蛛がたじろいだ。
そこにラインの二太刀目が襲った。八つの目の中心に、嘆きの大剣が深々と突き刺さった。
ギァァァァアッ！　大蜘蛛が悲鳴を上げた。苦痛に八本の脚をのたうちまわらせる。苦し紛れに前脚を振り回すが、目が見えないため、体をかわすラインを捕らえることができない。
岩場の先は断崖になっていた。彼はそこにうまくペーレント・スパイダーを誘導していた。
「もらったな」
ラインが会心の笑みを浮かべたその時、ペーレント・スパイダーの腹部の泡が弾けた。と、中から人の手の平ほどの仔蜘蛛がわらわらと這い出してきた。数十匹、数百匹の仔蜘蛛がラインの足から這い上がり、甲冑の下に潜り込んで牙を突き立てた。噛まれたところから、身体がしびれてくる。毒蜘蛛だった。
ラインの動きが止まった。剣を持つ手から力が抜けてくる。
その機をついて、ペーレント・スパイダーは、二本の前脚でラインを抱え込んだ。みしり。鈍い音がした。
ラインの口から鮮血が溢れ出る。あばらが二三本折れたらしい。攻守が逆転した。
「兄さん！」ターナは、襲いかかる仔蜘蛛の群れを打ち払いながら、ラインの方に近づこうとした。
「ターナ、気を、生命力の気を撃ってくれ！」ラインが血を吐きながら言った。
「しかし……」彼女は躊躇した。今の彼に気を放てば、一時的には快復してもその後がどうなるか。引きすぎた弓の弦が切れてしまうように、肉体の限界を超えることにもなりかねなかった。
「何をためらっている。みすみすやられるつもりか。さあ！」
ラインの檄に、彼女は渋々うなずいた。ありったけの念を込めて、気を撃ち出した。ラインの身体が一瞬、

光に包まれた。筋肉が膨れ上がった。
「うおおおおおおっ！」
ラインは雄叫びとともに、剣を何度も振り降ろした。ペーレント・スパイダーの頭部がぐずぐずに崩れた。
頭をなくした大蜘蛛は、狂ったように脚を動かした。その衝撃に耐えかねたのか、足元の岩場が崩れる。バランスを崩して大蜘蛛の身体が崖から落ちかけた。ラインを抱えていた脚のうちの一本がはずれた。その脚で岩場にしがみつく。もがいていたラインの足が地面についた。
ターナが、兄を助けようと駆け寄るよりも早く、
「人間をなめるなーっ！」
ラインが地面を蹴って、大蜘蛛に体当たりを喰らわした。その衝撃で、最後の脚が岩から離れた。ペーレント・スパイダーの姿がターナの目の前から消え失せた。
「兄さん！」
ターナは、岩場の端に駆け寄り、断崖をのぞき込んだ。遥か下方の谷底を、流れの速い川が走っていた。スコールのためか、濁った水が渦巻いている。その流れの中に、ラインを抱きかかえたままペーレント・スパイダーは呑み込まれていった。
「兄さぁぁぁぁん！」
ターナの声が、谷にむなしくこだました。
(ライン！)
アムルも、空の上でその顛末を見ていた。ブルードラゴンに変身したとはいえ、彼の意識は奇妙に醒めてい

る。何度もラインたちを助けにいこうとしたが、ラウンド・フィーニックスが操る火球に阻まれてその場から身動きが取れなかったのだ。

(ラインまでも……)

アムルの中に、ドロドロと溶岩のようなものが溜まり始めた。ラフィエルの神殿を、その意志を、そして仲間までも、みすみす目の前で失う羽目になった怒りが、彼の中で固まり始めた。

(許さん、許さんぞ、貴様ら!)

アムルの意志が爆発した。意志の塊は炎となって、ラウンド・フィーニックスに襲いかかった。

──火炎獣に炎をぶつけてどうする。貴様の炎など呑み喰らってやるわ! そう言うかのように、ラウンド・フィーニックスは大きく翼を広げた。が、ブルードラゴンが放った思念弾は、その身体を貫通した。呑み喰らわれたのは火の鳥の炎の方だった。龍族の思念が邪悪な意志を破壊したのだ。

ラウンド・フィーニックスは悲鳴を上げた。そこをめがけてブルードラゴンの火炎弾が次々に浴びせられた。

聖なる炎の中で、ラウンド・フィーニックスの断末魔が響いた。あれだけ苦戦していたのが嘘のような、火炎獣のあっけない最期だった。

(これが、ブルードラゴンの力……)

アムルは、自分がしたこととはいえ、聖龍の火炎弾の威力に呆然としていた。が、それも一瞬のこと、ターナの呼ぶ声に身を翻した。

「アムル! 兄さんが!」

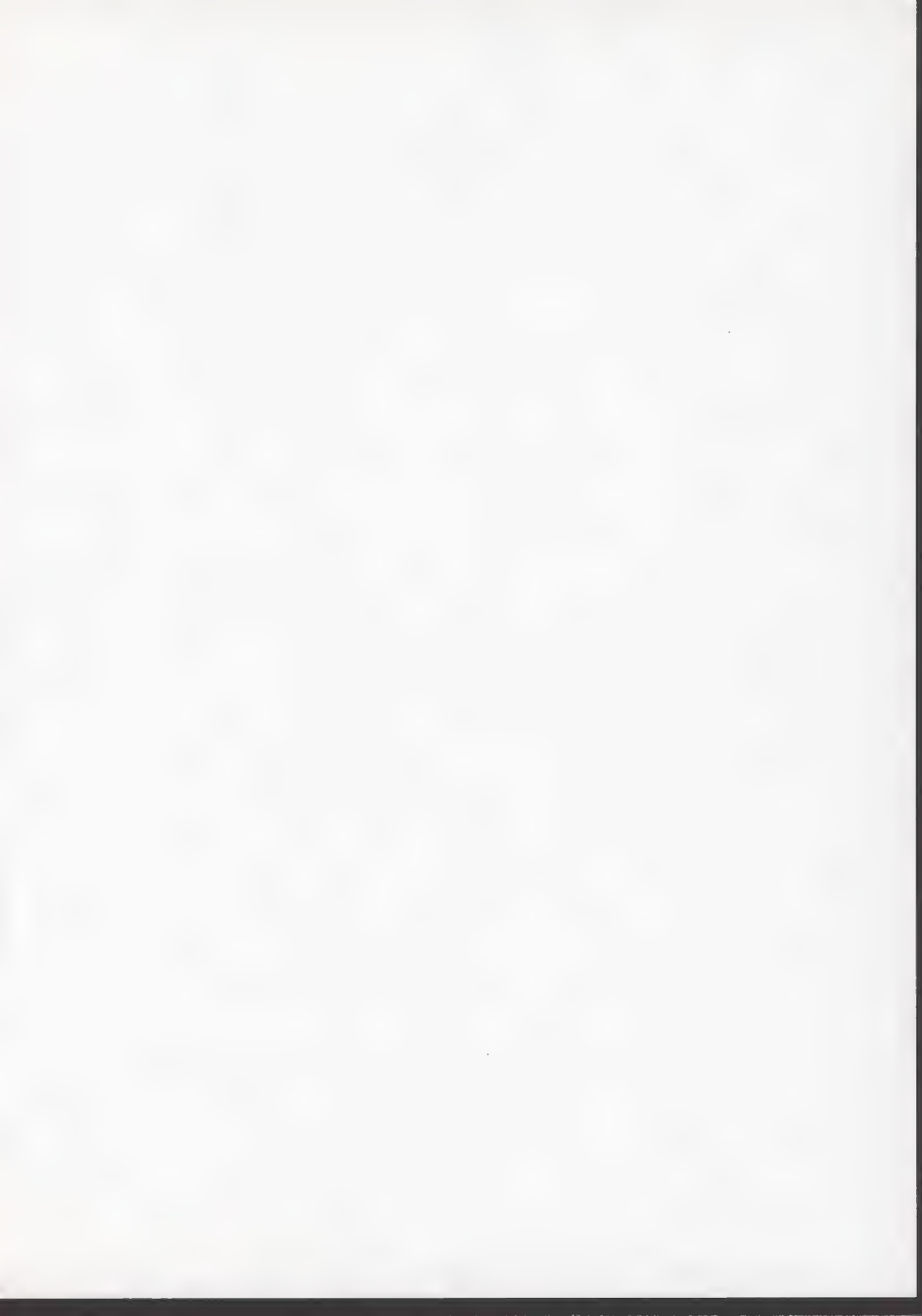
谷底をさして叫ぶ彼女を脚で摑むと、川面まで降りていった。近くの大岩に彼女を置く。そこから捜してみたが、急な流れに呑まれたのか、ラインもペーレント・スパイダーも既にどこにも見えなかった。
「下流に流されたのかしら」
ターナがつぶやいた。うなずくように一声吠えるとブルードラゴンは、彼女を首に捕まらせて、空に舞い上がった。
川は山麓を下り、その向こうに深い緑の山々が広がっていた。人がいまだ足を踏み入れたことのない大森林地帯。川はその森の奥深くへと注ぎ込んでいた。
ターナを背に乗せたブルードラゴンは、眼下に広がる大森林地帯へと向かって行った。
空を舞っていた原龍たちも、騒ぎがおさまったことが分かるのか、ようやく岩山の自分たちの巣へと舞い戻っていき始めた。

その一部始終をもっと上空から眺めている者があるのに、アムルたちは気づいていない。
ブレインアイズ、眼球のついた脳とでもいえばいいのだろうか。空に浮かんで、眼球をギロギロとさせながら、事の成り行きを眺めるその姿は、さながら大海を漂うクラゲのようでもあった。その眼と脳で自分が見た光景を邪神官ガルダの元へ送る、それがこの邪霊獣の役目であった。
と、その背後から炎の太刀が、突然襲いかかった。一瞬のうちに怪物は蒸化された。
銀騎士だった。湖でアムルたちの前に現れた銀の騎士が、翼龍の背に乗って大空を舞っていた。
「こんなところにまで邪霊獣がうろうろしだすとは、ガルダめ、本気で動き出すつもりだな」

右手に構えていた細身の片刃剣を鞘に収めると、彼方に消えていくブルードラゴンを見やった。
「ふうむ。どうやら無事に聖剣を手に入れたようだな。アムル・ラル・ラフィエル……、奴が選ばれし者か。
おもしろくなってきたな、フーヴァニール」
それがこの翼龍の名か、一声鳴くと、ブルードラゴンの後を追って力強くはばたいた。

第4章

赤輪の瞳

16

二つの〝光〟が、〝闇〟を追いつめていた。

一つは青い光。一つは白い光。青い光はその炎で闇の肉を焦がした。白い光はその剣で闇の骨を断った。氷河の中に築かれた宮殿の一角、闇は二つの光の波状攻撃に確実に追いつめられていた。

闇が、怒りの声をあげた。最後のあがきか、闇が放った暗黒の波動が青い光を捉えた。青い光が闇に喰われた。残った白い光の剣が唸った。二つに裂かれた闇の中から、青い光がほとばしる。外からは白、内からは青、二つの光にはさまれて、闇はのたうち苦しんだ。光は炎となり、闇の血の一滴、肉の一片までも焼きつくす。宮殿が音を立てて崩れていった。

二つの神の闘いに、いま決着がつこうとしていた。

勝利の凱歌か、青い光が、高く太い鳴き声をあげる。

その時——。その時突然、白い光の剣が、青い光に振り降ろされた。青い光が真っ二つに斬り裂かれた。

すべてがブラック・アウトした。闇がすべてを包み込んだ。

そして、——夢は、そこで終わった。

寝起きの、ぼんやりした頭でも不思議な気分だった。

(……何故こんな夢を……)

その理由はすぐに分かった。耳元で聞こえてくる唄のせいだ。おそらく子守唄なのだろう、低い女の声で、どこか悲しげなメロディーが聞こえてくる。夢は、その唄の内容だった。

昔々、光は闇と闘った
昔々、龍は闇と闘った
光の剣が闇を断ち、龍の炎が闇を焼き、
時さえ凍てつく地の果てに、闇は封じ込められた
光は乙女になって、天に昇った
闇は言葉で語れぬ姿で、時の氷の中にいる
龍は光に殺された、光の剣で殺された
泣くなよ、泣くと龍が来る
　青い龍が喰いに来る……

懐かしい言葉だった。子供の頃に習ったことがある。確か古代精霊語。恐ろしく古い言葉だ。……精霊……？
さまざまな方向に巡っていた思考が、ぼんやりと一つにまとまり始めた。
（……ここは……ここはどこだ⁉）
起き上がろうと身じろぎした瞬間、全身に電撃が走った。
「ううっ！」
声にならない悲鳴をあげて、横になったまま、のたうち苦しむ。身体中の筋肉がバラバラになりそうだ。息が止まるほどだった。
その様子に、横で唄っていた女が席を立ち、大あわてで部屋の外に出ていく気配がした。
いくつかの波を乗り越えて、ようやく痛みがおさまりだした。

「……どうやら、生きのびたようだな……」
ラインは、大きく息を吐いた。痛みはひどいが、逆に言えばそれも生きている証だ。ペーレント・スパイダーと共に急流に呑まれたところまでは覚えているが、その先は全く記憶にない。
薬草の匂いがぷんと鼻についた。慎重に首を回して様子を窺う。身体中に、薬草を練り合わせた泥状の薬が塗りたくられて、藁をしいたベッドに寝かされていた。木と泥で造られた小さな小屋の中だった。ベッドの横の窓には戸板が下ろされている。その隙間から光が射し込んでくるのを見ると、今は昼間らしい。
と、彼の胸にしわくちゃの手が置かれた。
「まだ、動くでない。もう一晩で楽になる」
手の主が言った。しわだらけの顔がのぞき込んで来た。豊かな白髭と大きな鼻の持ち主だった。
「ご苦労じゃったな、パチャレ。もう山は越えた。下がっていいぞ」
老人の後ろから、心配そうにのぞき込んでいる若い娘、とは言ってもこれも鼻が大きくしわだらけの顔をしていたが、に話しかけた。娘はうなずくと安心したように部屋を出ていった。その腕に赤ん坊を抱えているところを見ると、さっきまでラインの横で子守唄を唄っていたのは彼女らしい。
「お前を川で見つけたのは、あの子じゃ。パチャレという。心優しい子じゃ。感謝することじゃな」
去っていく娘を見送りながら老人が言った。
「ここは、どこです……」ラインが聞いた。
老人はかぶりをふると、
「知らんでもいい。本来なら、儂らはお前たちといっさい関わるつもりはない。が、儂らの仲間が一人お前た

ちに助けられたから、その恩返しじゃ」
「恩返し？」
「お前たち人間と違って、儂らはそういうものを大事にして生きとるのでな」老人の声には、質問を許さない拒絶の響きがあった。
その時、外で悲鳴が聞こえた。老人はあわてて窓の戸板をはね上げた。外は広場になっていた。そこにいた村人たちが皆、空を見上げて悲鳴を上げていた。家に逃げ込む者、子供を抱きすくめる者。誰もが小柄で、しわだらけの顔をしている。その顔はどれも、伝説上のある種族の特徴をはっきりと表していた。
老人は、村人たちに大声で語りかけた。
「騒ぐでない。ここは上からでは絶対に見つからん。安心して家に帰ることじゃ」
その様子を見ていたラインがつぶやいた。
「まさか、ここはノームの村……」
既に滅んだといわれる土の精霊ノーム。その特徴は、小柄な身体と大きな鼻にあるといわれていた。人間とは明らかに違う雰囲気を持った人々。彼は直観的にそう感じていた。
が、老人はその問いには答えずに、苦々しげに言った。
「思った通りお前は疫病神じゃ。よりにもよって龍を連れてきおったわ。治ったら、さっさと出ていってもらうからの」
「龍？」
ラインは、首をずらして窓から空を見た。青々とした葉をつけた枝が何重にもからみあい、広場を屋根のよ

うに覆っていた。その隙間からわずかに空がのぞいている。
その空にブルードラゴンが舞っていた。誰かを捜しているように、何度も何度も同じ所を行ったり来たりしている。
「アムル！」
その時ラインは気がついた。村人たちは、ブルードラゴンの姿を見て恐怖していた。聖龍の飛来を、邪霊獣の襲撃のようにおびえていた。
「心配することはない。あれはブルードラゴン。太陽神と共に暗黒神と闘った聖なる龍の末裔、私の仲間だ」
ラインの言葉に、老人がせせら笑った。
「聖なる龍？　何を言うとるか。あれはラフィエルの龍。肉体をなくしても昇天しきれずに、魂喰らいと化した邪龍の一族よ」
「魂喰らい？」
「まったく、人間とはよほど物知らずにできとるようじゃの。暗黒神を倒した後、龍がどうなったのかも知らんのか」
ラインは言葉に詰まった。確かに、暗黒神を倒したところで彼らの伝説は終わっていた。その後の龍の運命など気にしたこともない。
（……泣くなよ、泣くと龍が来る、龍の亡霊が喰いに来る……）
パチャレという娘が唄っていた子守唄の一節が、不意にラインの耳に蘇ってきた。

17

アムルとターナは、密林の中にこもった熱気に辟易しながら、ラインの行方を追っていた。一動作するだけで、汗が噴き出す。

シルドアレンよりもずいぶん北に上ってきたはずだ。本来なら寒冷な針葉樹林帯が広がっている筈のこの辺りだが、まるで熱帯のジャングルだ。地熱のせいだった。これも激しい火山活動が生んだ異境の一つだろう。

ブルードラゴンとなり上空から何度となく捜索したのだが、うっそうと生い茂る緑の壁に阻まれて、細かいところまではなかなか見通せなかった。それでも、三日月型に曲がった砂州に打ち上げられたペーレント・スパイダーの死骸を発見し、そこから先は川沿いに森の中を進むことにしたのである。

「ごめんなさい、アムル。余計なことで手間を取らせて……」

足に絡まるツタを短刀で刈り取りながら、ターナが言った。

「気にするな。俺が捜したくて、こうしてるんだから」

アムルの言葉に嘘はなかった。最初にあった時からうまの合わない男だったが、それにしたって仲間であることに間違いはない。アリーシャの消息は気になるが、これ以上の犠牲を出すことは選ばれし者の誇りにかけても許せなかった。

彼は腰の聖剣に手を伸ばした。この剣に触ると焦る心も落ち着いてくる。握りと鍔に黄金の細工がほどこされたロング・ソード、それがラフィエルの意志の結晶だった。柄頭には五つの赤石と一つの透明な石が埋め込まれている。大きさから考えて、最初は六つの赤石だったものの一つが透明に変化したのだろう。台座に古代

文字が彫り込まれている。ターナはそれを〝怒龍吼〟と読んだ。ラウンド・フィーニックスを倒した火炎思念弾のことらしい。アムルがブルードラゴンの力に目覚め、レベルが上がっていくたびに一つずつ石が透明になっていくのだろう。残りの五つがどんな力を現しているのかそれはまだ分らないが、いずれにしろ〈アーリアの六つの封印〉を解いた時、六つの赤石を透明にした時こそ、ガルダを、そして暗黒神を闇に還す時だ。
――だが、ロイの悲劇とは……？　亡き母の思念が伝えようとした一言がどうにもひっかかっていた。
　その時、森の奥でかすかに人影が動いた。視界をチラリとかすめたその顔、白い髭をはやしたその顔に、アムルは見覚えがあった。
「今のは確か――」
「誰？」
「シルドアレンで、土霊使いから助けた小男だ。ここまでつけていたのか」
　ターナもその話は知っていた。そのトラブルから彼と兄のラインは知り合った、というよりはあやうく剣を交えるところを大司祭にとめられたと聞く。二人らしい最初の接触だなと思った記憶がある。
「待って、アムル。深追いは危険よ」
　声をかけたが、もう遅かった。森の奥へと消える彼の後を追って、彼女も走りだした。
　森は迷宮だった。
　視界を遮る密生した皇帝シダ、細かく絡み合った下生え、ともすれば足を取られそうになる湿地帯。そして、夜の闇。灰雲の陰から微かに照らす月の光も、生い茂る緑の屋根に閉ざされてここまでは届かない。手にした

松明が唯一の灯りだが、それがかえって森の奥の昏さを際立たせていた。
「アムル、これを」
ターナが、そばの木の幹を指さした。そこには、短刀で刻みつけた印が残っていた。彼女が目印につけたものだった。同じ場所を何度も回っている。気丈な彼女の顔が、不安げに曇っていた。
アムルは迷っていた。ここで変身すれば、森から抜けるのはたやすい。が、ミミュルを捜し出すことはあきらめねばならない。シルドアレンがゴズアル軍に強襲された夜、邪神官の罠にはまったオードンの下に自分たちを導いてくれたのもあの小男だった。何らかの意図があって、ここまで自分たちを誘い込んだのではないか。漠然とだが、そんな気がしていた。
彼は闇に向かって、語りかけた。
「ミミュル、お前だということは分かっている。何の用だ。危害を加えるつもりはないから、おとなしく出てこい」
「無駄よ、アムル。はいそうですかと出てくるんなら、最初から逃げやしないわ」ターナが言う。
不意に、暗闇から笑い声が響いた。
「降参か、アムル・ラル・ラフィエル」
「目に頼るからいけない」
「心を開けば、道は森が教えてくれる」
方向が分からないように、声は四方から響いてきた。残響をうまく使っている。
ターナは苦笑いを浮かべていた。

「やってみるものね。でも、どうするつもり」
「奴は挑発してきてるんだ。のってやろうじゃないか。今のままじゃ、こっちだけが居場所を教えてるようなもんだ」
彼は、松明の火を踏み消した。漆黒の闇が二人をつつんだ。
アムルは聖剣を地面に突き刺すと、呼吸を整えた。どうせ奴もこちらの様子を窺っているはずだ。だったら、その気配を捕まえてやる。
(ラフィエルの意志よ。このまだ若き選ばれし者に力を貸して下さい。その聖なる剣に託された力を、この身に与えて下さい)
ゆっくりと剣に念をこめる。木が根を張るように、じわりじわりと、しかし確実に、突き立てた聖剣から自分の〝気〟を広げていく。彼は、自分の意志を樹木にするつもりだった。一本の木となり森と同調して、奴が潜んでいる場所を探り出す。
突然、世界が広がった。森のリズムが身体に飛び込んで来た。
うっそうと生い茂る皇帝シダの樹液を吸う虫たち、その虫をついばむ極彩色の野鳥、その糞からはえるキノコ、そしてそれらすべての死骸は土に還り皇帝シダの養分となる。
それまでは、行く手を阻む壁のように感じられたこの密林にも、複雑に絡み合った生命のリズムがあった。
そのリズムが一つの流れになって、身体の中にすべり込んでくる。それが、森の〝気〟だった。
新鮮な体験だった。それまで知っていた〝気〟が、人の意志が放つ炎だとすれば、これは風だ。身体の中を吹き抜ける森の風の感触を、彼は楽しんでいた。

その風の向こうに、精霊（ノーム）が立っていた。大きな鼻と白い髭（ひげ）、印象的な顔に満面の笑みを浮かべ、精霊（ノーム）が立っていた。いつの間にそこまで進んでいたのか、アムルの目の前でミミュルが微笑（ほほえ）んでいた。

「お待ちしていました、アムル・ラル・ラフィエル。あなたならきっと阻（はば）みの森を抜けられると思っていました」

「阻みの森？　じゃあ試したのか、俺を」

「邪（よこしま）なるものを決して通すことのない魔法の森。そこを通り抜けられるのは、森が許（ゆる）した者だけ。これで長老を説得することができます」

　アムルの後を懸命（けんめい）に追ってきたターナが、後ろから言った。

「こんなところにいたの。あっという間に見えなくなるんだもの」

「お連れの方も来たようですね。じゃあ案内しましょう。ノーマヘイムへ」

「ノーマヘイム？　なんだそりゃ」

　問いかけるアムルをターナがけげんそうに眺（なが）めた。

「……あなた、いつの間に古代精霊語（こだいせいれいご）なんか喋（しゃべ）れるようになったの？」

「古代精霊語……」

「大昔から伝わる、土の精霊の言葉よ。ノーマヘイムとは、その言葉で隠されたノームの国という意味」

　アムルには、そんな言葉を喋っているという自覚はなかった。どうやら、言葉ではなく心で喋っていたらしい。言葉は分からなくてもその裏に流れる意志を読み取る。これも聖剣の力か、それとも自分の意志を操（あやつ）る力がまた一つレベルアップしたのだろうか。

しげしげとミミュルを眺めていたターナが、ボソリと問いかけた。
「……まさか、あなた、本物のノーム」
彼は少し得意そうにうなずいた。
「本物の？　絶滅したんじゃなかったのか……」
アムルの問いに、彼は答えた。
「もう残っているのは僕たちの一族だけですが、この阻みの森の奥に隠れ住んでいるんです。さあ、行きましょう。あなた方が捜している方は僕たちの村にいます」
「ラインのことか。無事なのか、奴は」
彼は再びうなずいた。ターナが安堵のため息をついた。
アムルがミミュルをにらみつけた。
「気にいらんな。何故、俺を試すような真似をした。シルドアレンの時もそうだ。何故ガルダの企みを知っていた。いったい、何で俺につきまとうんだ」
「……僕たちにはこういう伝説があります。太陽神が暗黒神を倒した後、太陽神は聖龍の首を切り落とした。それから龍は亡霊となり、魔の使いとなった。僕はその伝説の真相が知りたかった」
「龍の首を……太陽神が……？　そんなばかな……」
アムルが言った。ミミュルは言葉を続けた。
「ノームは本来、土の民です。それが何故森に隠れ住まなければならなくなったか。僕たちの先祖は、龍の亡霊に殺されたと伝え聞きます。死の谷に住む白骨の龍に」

ミミュルは足早に森を進みながら、詳しい事情を話し始めた。

今、一族を率いている長老ムースベルの孫、それがミミュルだった。彼は、この森の奥に息を潜めて暮らす祖父のやり方に疑問を抱いていた。

光と闇、神々の闘いに巻き込まれると、己の力を利用されるだけで行く手には不幸な結末が待ちかまえている。ラフィエルの若者がそうだ。龍となって太陽神とともに闘ったにもかかわらず、最後には魔の使いになっている。外界との交流をいっさい断つ。それがノームを滅びから救う唯一の道だ。長老はそう言ってゆずらなかった。

が、それでは、その光と闇の闘いはいつまで続くのか。最近は、森の周縁で奇妙な生物も見かける。牙を持つ花、襲いかかる毒ツル、巨大な火吹き蛙。（それらが邪霊獣であることを、ミミュルは後で知ることになるが）

いつまでも、森は安全ではない。そう思った彼は、こっそりと村を離れ、神殿都市ウルドに行くつもりだった。聖戦の時代から生きると伝え聞く大司祭オードンに会えば、龍の伝説の真相も含めて、これからのノームの行く道を教えてくれるのではないか。

旅の途中で、彼はゴズアルの台頭を、光と闇の闘いが再び始まらんとしていることを知った。邪神官ガルダの噂も耳にした。魔導師たちの策略と非道の数々を、目の当たりに見ることもあった。

その旅の中で、彼の中に漠然とした予感が生まれた。自分たちの伝説には何者かの意志が介在しているのではないか、太陽神をおとしめるために暗黒神の下僕たちが流した流言ではないか。それくらいのことは簡単にやりそうなほど、邪神官の策略は奸智に長けていた。

それが予感から確信に変わったのは、ちょっとした油断から旅芸人の一座に捕らえられ、シルドアレンでアムルたちに助けられた後だ。
一旦は街から逃げだしたのだが、精霊特有の直感から邪悪な気がオードンを狙っていることを知った彼は、アムルたちを邪神官の罠にはまった大司祭のもとに導いた。
「そして、僕は見ました。聖なる龍が虚空に翼を広げる姿を、龍が闇を斬り裂く瞬間を。その時に僕は直観しました。僕たちの伝説は間違っている、僕たちに光を戻してくれるのはこの龍に違いないと。ターナさん、貴方の兄さんを僕たちの仲間が見つけたのは僕にとっても好都合でした。貴方たちを長老にあわせることができます」
ミミュルは、そこで一旦言葉を区切ると、アムルをじっと見つめた。
「お願いします。死の谷に巣食う龍の亡霊の正体を暴き、僕たちの伝説を打ち砕いて下さい。おそらく、奴も暗黒神が放った邪霊獣の一匹でしょう。そして、古えの影におびえる僕たちの一族を救って下さい」
「……分かった。ラインと会えたらすぐに、その死の谷とかに行ってみよう」
アムルもノームの顔を見つめ返した。
「アムル、あれは……」
ターナが、森の切れ目に見える東の空を指さした。
その空が、闇に慣れた目には一際鮮やかに、赤く染まっていた。ミミュルの顔色が蒼白になっている。それは明らかに炎の色だった。
「……あっちは、村の方角だ……」

「火事か」
「いや。見つけられるのをおそれて、ノームは夜は決して火を使いません。ただの火事なら起こるはずがない。まさかゴズアルが……」
ミミュルの言葉に、アムルは聖剣を構えた。
「急ぐんだろう。だったら、この方が速い」
聖龍となった彼は、ターナとミミュルを背に乗せると、炎の空へと飛び出した。

彼らの懸念通り、村は邪霊獣に襲われていた。天蓋のようにすっぽりと村を覆っていた枝々は焼け落ち、上空からでもノーマヘイムの全貌がはっきりと見渡せた。しかし、その光景は彼らが想像していたものとは、全く異なっていた。
村は、花園と化していた。
赤、黄、青、悪趣味と言ってもいいほどの原色の洪水が眼下に広がっていた。今まで見たこともないような花々が、互いに競い合うように咲いていた。
が、それは悪魔の花園だった。逃げ惑うノームたちを、牙を持つ花が、自在に這い回る毒ヅタが襲っていた。襲って、その肉を喰らっていた。その花を焼き払おうとした火が、逆に村を燃やしているらしい。
村の中心に巨大な妖花が咲いていた。家一軒ほどは優にある巨大な花だった。根元には幾つもの根瘤がありそれが不気味に光っている。毒々しい赤と青のグラデーションの花弁は厚ぼったく、その中央には大蛇のよう

な雄しべがのたうっていた。そこから吐き出される黄色の花粉が落ちていくたび、周りにいた村人たちが倒れていく。強烈な毒花粉だ。

ターナが言った。

「邪獣神グリテリアス。魔の植物を司る食肉樹よ」

ミミュルは困惑していた。

「なぜ、ここが分かったんだ……」

――許さん！　というかのように一声高く鳴くと、ブルードラゴンは村めがけて舞い降りた。火炎弾を放とうと、彼の中で闘気が熱く固まった。

「駄目だ、アムル。その姿を急にみせては！」

その背にしがみついて、ミミュルが叫んだ。

闇に響いた異形の鳴き声に、村人たちは空を見上げた。空から龍が襲いかかろうとしていた。伝説の人喰い龍が彼らの目の前にいた。炎に真っ赤に染まった龍の姿は、彼らには悪魔そのものに見えた。

――喰いに来たんだ、俺たちを！　喰われるぞ！　最期だ、ノームの滅びの時だ！

村はパニックに陥った。彼らのすべてに戦慄が疾った。森が恐怖に震えた。

突然、アムルを悪寒が襲った。身体を数千本の氷の針が刺し貫いた。背骨を無数の鉛の舌がなめ上げた。針が走り、舌が這うたび、彼がまとった意志が剥がれていく。

（まずい！）

集中が解けるのが自分でも分かった。が、その時にはすでに人間の姿に戻っていた。

アムルは、宙空に放り出された。
近くにあった木の枝に何とか身体が引っかかった。が、枝はあっけなく折れる。次の枝に手を伸ばす、足を絡める。何重にも重なった枝をクッションがわりにしたおかげで、地面にたたきつけられた時には、それほどの衝撃は受けずにすんだ。とは言っても、数秒間息が止まるほどのものではあったが。
ターナとミミュルはと見ると、これも幸いなことに近くの藁ぶき屋根の上に落ちたらしい。そこから滑り降りると、ようやく立ち上がったアムルの方に駆け寄ってきた。
「大丈夫ですか、アムル」
「いったいどうしたの」
「俺だって聞きたいよ。急に集中が解けたんだ」
と、三人の後ろから声がした。
「また余計な者をつれてきたようじゃな、ミミュル」
しわだらけの顔を怒りに染めて、ノームの長老が立っていた。
「まったく、ぬしはどこまで掟を破れば気がすむ。見よ、ぬしのせいでこの不可侵の村までも、邪獣の生贄じゃ。これでいやがおうでもこの村を捨てざるを得んわ！　ぬしの望み通りじゃ。嬉しかろう、この裏切り者が！」
老人の杖が、ミミュルに振り下ろされた。が、ミミュルはそれをかわさなかった。彼の額から血がしたたり落ちる。したたり落ちながらも、長老を見すえていた。
「僕は間違ったことをしたとは思いません。彼らこそ、僕たちを救ってくれる力です」

「力じゃと。力では何も解決せぬわ」長老は、後ろにいたアムルたちに杖をつきつけた。「出て行け。呪われた龍の眷属がこの地に足を踏み入れることは、儂が許さん。貴様も見たじゃろう、村人たちの恐れを。これ以上この村に恐怖を運び込ませはせん」

ミミュルはその杖を押し下げた。

「いいえ、彼らにはここにいる資格があります。彼らは、阻みの森を抜けてきたのです。貴方が頼りとする聖なる森も、この騎士たちの魂を認めたのですよ」

「ぬう……」

長老は低いうなり声をあげると、初めて黙り込んだ。それほど彼にとっては、森の存在が大きかったのだろう。

「さあ、行きましょう。ラインは奥の小屋に寝ているはずです」

炎と人喰い花から逃げ惑う村人たちの流れと逆に、彼らは村の中央へと走っていった。

その後ろ姿を、長老は黙って眺めているだけだった。

悪魔の花園に彼らは駆け込んだ。炎が起こした風にのり、強烈な蜜の香りが、彼らの頭の芯をしびれさせた。襲いかかるツタやツルを剣で薙払いながら進む。アムルが言った。

「ミミュル、みんなを広場から逃がせ。あの化け物花を倒すには多少荒っぽいやり方が必要だ」

「でも、変身できるの？　あれがグリテリアスの力だったら……」

さっき急に変身が解けたことが、彼女にはショックだったらしい。

「大丈夫だ。さっきは不意をつかれたが、ミミュルの言葉で原因が分かった」

「僕の言葉で？」
「ああ。あんな奴にてこずってたら、掟(おきて)を破ってまで俺たちを導いてくれたお前に申(もう)し訳(わけ)が立たない」
そう言ってアムルは笑った。
「でも……」
心配そうなターナをミミュルが引っ張った。
「分かりました。聖龍(せいりゅう)ブルードラゴンがどういうものか、長老にいや、一族のみんなによく見せてやって下さい」
「気をつけてね」
ターナの声を背に、アムルは、村の広場にそそり立つ妖花(ようか)に向かった。
グリテリアスは、毒花粉をまき散らしながら嗤(わら)っていた。
〈消えろ消えろ。この大陸の森はすべて、ザウエル様よりこのグリテリアスが預かったもの。ノームなどという醜(みにく)い生き物が、私の庭を荒すことは許さない。私が貴様らを喰(く)らい、この美しい姿の糧(かて)となるだけでも栄光と思え〉
「やめておけグリテリアス、あまり食い意地を張ると痛い目を見るぞ」
アムルは、その極彩色(ごくさいしき)の花弁(かべん)を見上げて言った。
グリテリアスが、人の言葉を喋(しゃべ)っているわけではない。ノームの時と同様、今やアムルは、この邪なる生き物とも意志を交感することができた。
〈ほほぉ、誰かと思えば龍の末裔(まつえい)を気取る若造か。そういえば、先程、こうるさい龍の姿を垣間見(かいまみ)たような気

がしたが、どこに隠れていた。ふふ、分かっているぞ。たかだかノームの恐怖心に動揺して、変身が解けるような青二才に、この森の王が倒せるかな〉

「森の王？　たいした思い上がりだな。お前の厚化粧が似合うのは、せいぜい邪神の祭壇の鉢植えだぞ」

怒ったように、花弁が震えた。同時に、地中からツルが飛び出すと、アムルの足にからみついた。身動きとれなくなった彼に向かい、のたうつ雄しべから、膨大な量の毒花粉が噴き出された。

が、その花粉はアムルまで届かなかった。彼の周りだけ風が吹いていた。その風が妖花の武器を吹き飛ばした。

黒い髪をたなびかせて、アムルが笑った。

「そんなものが森の王の力か。違うな、貴様は只の寄生樹だ。森にしがみつかなければ生きていけぬ、哀れな根無し草だ」

村と森の境の辺りで、ターナが松明を振っていた。全員が逃げたという合図だ。

「いいだろう。よく見ておけ、これが本当の森の力だ」

彼は聖剣を振りかざすと、地面に向かって、思いっきり突き立てた。青色の光が聖剣を包んだ。

〈ぬかせ！〉

妖花の根元に醜く膨れ上がった根瘤、それが勢いよく弾け飛んだ。降り注いだ所は、たちまち泡をたてて溶けていく。が、それもアムルには効かなかった。聖剣から放たれた光が壁となり、毒液を弾き返す。彼は言った。

「変身が解けたのは、ノームのせいじゃない。あれは森の悲鳴だったんだ。ブルードラゴンの炎に恐怖する森

の〝気〟だ。それに共感した俺の身体が、無意識に変身を解いたんだ。わかるか、グリテリアス。今のブルードラゴンは俺の意志だけじゃない。ラフィエルの、太陽神の、この森の意志を同調させた存在だ。闇に咲く仇花の貴様に倒されるわけがない」

言いながら、青い光が広がり、龍の形になった。

妖花は花弁を真っ赤に染め大きくうなると、その根を地面から引き剝した。その先は槍のように鋭く尖っている。数百本の根の槍が、ブルードラゴンにむけて疾った。

その時、ブルードラゴンは既にグリテリアスの真上にいた。

天地を裂くような咆哮が、グリテリアスに向かって放たれた。

龍の叫びが大地を揺らした。

その叫びと同時に、広場が二つに割れた。

〈ば、ばかな!〉

うろたえた妖花はその根を四方に張り巡らした。が、その地面そのものが崩れていく。

——闇に帰れ、グリテリアス!

ブルードラゴンは、そこに火炎弾を撃ち込んだ。妖花は紅蓮の炎につつまれると、そのまま地中に消えていった。

〝爆震〟——己の意志を衝撃波に変えて地面にぶつけ、地上の敵を殲滅する。

森の〝気〟を知ったことでまた一つ、アーリアの封印が解けたのだ。

「すごい……」

ターナは信じられない思いで、その光景を眺めていた。圧倒的な聖龍の力だった。ミミュルも、ぼんやりと口を開けて、邪獣神の最期を見つめている。
「悪魔じゃ、やはり悪魔の所業じゃ……」
村人たちをまとめて森から見ていた長老がつぶやいた。
ギアオオオーン。
凱歌のように、空に向かって龍は吠えた。
と、その声に応えるかのように、彼方より別の咆哮が聞こえてきた。
グルグァオォーン。
それは、闇の底から聞こえてくるような不吉な、禍々しい響きの声だった。
灰雲の陰からおぼろに輝く満月、その中に声の主はいた。ゆっくりと、骨だけの龍が天空を舞っていた。
「あれだ。アムル、あれが龍の亡霊、デスガーデアンだ」
ミミュルが叫んだ。
ブルードラゴンは、上空目指してかけ上がった。が、その行為をあざ笑うかのように、髑髏と化した顔を上げ一声吠えると、ふいに、白骨の龍はかき消えた。
ブルードラゴンは、むなしく夜空を舞うだけだった。
広場に降り人間の姿に戻ると、ターナが駆けてきた。
「アムル、すごいわ。また封印が解けたのね」

自分の胸に飛び込んできかねない勢いに気圧されて、アムルは苦笑を浮かべた。
「たいしたことはない。ミミュルが、森にも〝気〟があることを教えてくれてなかったら、どうなったかわからないさ」
ターナの後から走ってきた、ミミュルに笑いかける。ノームはその風采に似合わず、はにかんだ。
「そんなことより、ラインはどうした」
アムルの言葉にターナの顔が曇った。
「……一足違いだったわ。昼過ぎに村を出たそうよ。この手紙を彼女にことづけて」
ターナの後ろから、若いノームの女がおずおずと現れた。ラインを介抱したパチャレという娘だった。
彼女が預かった手紙は、大司祭オードン宛だった。機会があればシルドアレンに届けて欲しいと置いていった物だ。ラフィエルの神殿、ノームに伝わる聖龍の死の謎などが語られている。手紙は、こういう言葉で締めくくられていた。
〈私は真理が知りたい。光と闇の闘いの真実が知りたい。たとえこの命に代えても、それだけは必ず摑んでみせる――〉
アムルは読み終わると、唇を嚙みしめて言った。
「死の谷だ……奴もそこに向かった」
死の谷とは、龍の亡霊が棲む魔境のことだ。怪我をおしてでも一人で伝説の謎を調べに行くくらい、あの男ならやりかねない。
「ターナ、急ごう。奴一人じゃ危険だ」

ミミュルが手を差し出した。
「その手紙は必ずミッドガルドまで届けます。ノームの道を使えば、シルドアレンまで何日もかかりません。必ずオードン様に渡します」
「すまない。頼まれてくれるか」
彼に向けて浮かんだ微笑みはすぐに消え、アムルの顔に厳しい翳が浮かんだ。
——デスガーデアン……。
骨龍の眼窩の中の虚無を思い出すだけで、彼の背筋に、なにか冷たいものが走るのだった。

19

ジリジリと照らす陽の光が、ラインの首筋を灼いていた。
噴き出る汗が、まだ閉じきっていない傷口に流れ込み、ヒリヒリと痛む。それでも、想像以上に身体は回復していた。ノームの泥薬の効き目は驚くほどだ。古代の智恵も侮れない。
砂漠の向こうに、かすかに赤茶けた岩地が揺らめいていた。そこが、死の谷の筈だった。一晩で砂漠を突っ切ったことになる。
アムルたちが、よりにもよって、あの国境守備隊の若造と自分の妹が共に、聖剣探索とアリーシャ救出の見込みのない旅に出たと聞き、矢も楯もたまらずにシルドアレンを飛び出したあの時。あの時に似た衝動が自分を突き動かしていた。
龍だけが、ラフィエル一族だけが選ばれし者なのか。では人間はなんなのだ。太陽神にとって、人とは共に

闘うだけの値打もない存在なのか。
大司祭オードンも、ラオス王もその問いに答えてはくれなかった。
「自分の目で確かめればよかろう」
王はポツリとその一言だけをもらした。その一言で腹が決まった。
シルドアレン再興が急務であることは分かってはいたが、もう止まらなかった。
今度は、ノームの伝説だ。聖龍を殺したのは、太陽神だという言い伝えだ。必ずしも信用しているわけではない。が、だからといって、蛮族の盲信と一笑に付すこともできない。あの時見た夢が、パチャレとかいう娘が唄う子守唄が、なぜか自分をはやらせる。彼の中で自問する声が響き続けている。
(龍すらも太陽神の闘いの道具なのか。用がすめば無惨にも殺されるのか。ならば我々は、人は、光と闇の闘いの中でどういう役割を果たすのか)
不意に無力感に襲われた。
(役割？ これはまた、随分と思い上がったものだ。ラフィエルの神殿で見た幻視を思い出して見ろ。燃える太陽と黒い渦のせめぎ合い、あの時間と空間を超越した闘いに、人がどう絡めると言うのだ。神にとって人とは、ただ自身を崇めていればよい存在なのではないか。いや、崇めたところで、太陽神の祝福を得られるかどうか。力を与えてくれるだけ、暗黒神の方がましかもしれない)
疲れか、暑さのせいか、考えが忌むべき方向に走っていく。
「その通りだ。ライン・フォン・ベルバード」
突然、声がした。声の主は、赤茶けた岩山の上からラインを見おろしていた。白い一枚布の服をまとった老

人が、陽炎に揺れていた。
「なぜ、私の名を」
　心を読まれたようで、ラインは一瞬たじろいだ。日除けのフードに隠れて、その顔はよく分からない。が、フードの中から響く声はは、彼の疲れた心をわしづかみにするようだった。
「お前の召喚に応えて現れたのだ。神は等しくお前たちの前にいる。心の闇に手をのばせば、ザウエルはいつでもお前の前に現れる」
「ザウエル？　ふざけるな、私がいつ暗黒神を呼んだ！」
「ふふ。いま呼んだではないか。暗黒神の力を欲しているのだろう」
「なにぃ」
「光はそれぞれの違いを暴きたてるが、闇はすべてを平等に包み込む。光はすべてを選別し、限られた者だけをその使徒とする。が、闇は違う。光に見捨てられた者、忌み嫌われた者、すべての者に等しく力を与えてくれる。お前にもそれは分かっているはずだ」
　ラインの頭の中に、シルドアレン壊滅の夜の風景が浮かび上がっていた。
　魔剣をふるうロッグウェル、彼が変身した邪霊獣に為す術もなく倒される部下の兵士たち。街を焼く邪霊獣の群れ。それらを救ったのは、ミッドガルド自慢の騎士団ではなく、聖なる光と伝説のブルードラゴンだった。
　なぜ、自分ではないのだ。確かに、あの時はそう思った。あの時の怒りが焦燥が、男の言葉をきっかけに再びラインの中に蘇ってきた。意識の中に、澱のように、黒いものが溜まって行く。

それが、魔道の術だということは分かっている、分かってはいるがどうにもならない。最初に、自分の心を読まれたように思った一瞬の間、その虚を突かれて、心の中にするりと入り込まれた。その時に、彼はすでにこの老人の手中に落ちたのだ。

最後の抵抗か、それでも、ラインは大剣を構えた。切っ先を老人の喉元に向ける。

「無駄なあがきはやめろ。お前に私を倒すことはできん。そんな剣など捨てて、こちらにこい」

老人はラインの前に立ち、ゆっくりと手を差し出した。その姿は深い慈愛と強い意志とに満ちていた。

一振り、腕を一振りしさえすれば、この魔道の老人をなぎ払うことができる。それは分かっていたが、身体が動かなかった。彼の手から大剣がすべり落ち、砂地に深々と突き刺さった。

「それでよい、ラインよ、新しき闇の子よ。さあ、暗黒神の力を受け取るがよい」

笑いながら老人はフードをはね上げた。髑髏が嗤っていた。老人の正体、それは生きた骸骨だった。そのくぼんだ眼窩の闇に、一瞬赤い光が疾ったように見え、そして、ラインは気が遠くなった。

砂漠に一陣、冷たい風が吹き抜けた。

20

ブルードラゴンは、全速力で東に飛んでいた。

砂漠のはずれに、赤い岩山が見えてきた。そこが死の谷だった。人が一晩かけて歩く距離も、龍の翼ならばほんのひとはばたきだ。とっくに追いついている時間なのだが、どこに消えたのか、あの無鉄砲な親衛隊長の姿は見あたらなかった。

彼が死の谷に向かったと聞いた時から、アムルの心の隅にいやな予感が巣食っていた。夜空を舞う骨龍を見た時から生まれた不安だった。そのしこりが時間が経つにつれ、大きくなっていた。
(……多分、俺は怖がっている。あの怪物に、俺は恐怖している)
今までの邪霊獣とは違う何か、その何かに自分はおびえている。認めたくないが、背骨の震えは正直だった。それがまた一層、彼を苛立たせていた。
ターナは何も言わずに、首にしがみついている。勘のいい彼女のことだ、アムルの不安はよく分かっているだろう。が、何も聞かない彼女の思いやりが、今の彼には有難かった。
(とにかく今は、一刻も早くラインを見つけ、あの骨龍の正体を暴くことだ)
はばたく翼に、一段と力がこもった。
その時、何者かがブルードラゴンの後方から駆け抜けた。敵襲か。アムルの背骨の震えが止まった。
風が舞っていた。銀色の風だった。翼龍を駆った銀色の騎士が、彼らの行く手をふさいでいた。
「久しぶりだな、若いの」
銀色の兜と鎧に身を包んだ男、原龍の山の麓、湖で野営している時に現れた騎士だった。
しかし、どうしてここに……。
「わざわざ俺たちの後をつけてきたのか。ご苦労なことだな」
「ほほぉ、龍の姿でも喋れるようになったのか。少しは自分の力の使い道を覚えたようだな」
「鳴き声に自分の意志をのせて、相手に伝える。お前に教えて貰ったやり方だ」
人間の言葉でやりとりしているわけではない。それがターナにも聞き取れるのには、そういう理由があっ

た。ブルードラゴンは翼を大きく広げた。
「何の用かは知らないが、そこをどけ。今はお前のような得体の知れない奴を相手にしている暇はないんだ」
銀騎士は、言った。
「残念だが、ここを通すわけにはいかんな。おとなしく引き返せ」
ブルードラゴンが低く唸った。
「この前現れたときも、確か同じようなことを言ってたな。なぜいちいち、俺の邪魔をする」
「そんなつもりはないが、どうやらそういう巡り合わせらしいな。今、お前をデスガーデアンに会わせるわけにはいかない。死の影におびえているような男にはな」
「たわ言を！」
アムルはカッと頭に血が上った。それが真実を指摘されたからだということに、彼は気づいていない。怒りにまかせて銀騎士に突進する。騎士は原龍を操ると、軽がるとその攻撃をかわした。
「落ち着け、小僧」
銀騎士が腰の剣を抜きはなった。剣身を炎が疾った。飛び去ろうとしたブルードラゴンの周りに、突然、火柱が立った。聖龍の動きが止まった。
「〝火龍魔斬〟、お前が意志の力で龍に変身するなら、俺は意志を炎の刃として、すべての物を焼き尽くす。相手が人の姿をしているからといって甘くみないことだ」
銀騎士が剣を構えていた。細身の片刃剣だ。その剣を疾った炎が、一旦上空にかけ上がると、そこで幾つにも分散して龍に襲いかかったのだ。

思いもかけぬ方向からの攻撃に、アムルは完全に虚を突かれた。相手が本気だったら、今ごろは致命傷を受けていたはずだ。
「わざとはずしたな。脅しのつもりか」
屈辱に、ブルードラゴンの語気はますます荒くなっている。
「その通りだ、お前も騎士なら分かるだろう。闘いの場で脅しの剣を出せる場合、それは自分よりも格段に腕の劣る者が相手の時だ。俺は強い、少なくとも今のお前よりは強い。が、デスガーデアンは、その俺が今まで何度も倒そうとして果たせなかった相手だ。お前では勝負にならん」
「力をつけてから出直せとでも言うのか。あいにく、今の俺にはそんな時間はない。どうしてもと言うなら、ここでその力をつけてやる、貴様を倒してな」
牙を剝くブルードラゴンに、銀騎士は言った。
「そんなに仲間のことが心配か。が、情に流されてむざむざと死地に赴くのを見過ごすわけにはいかん。それこそガルダの思う壺だ。ロイの二の舞いになるぞ」
「ロイ……」
「ラフィエルの神殿で聞いただろう。初代ブルードラゴンがどんな運命をたどったか」
ターナが言った。
「ロイ・ラフィエルの悲劇……」
「そうだ。デスガーデアンこそ、ロイの亡霊。太陽神に殺された龍族の男のなれの果てだ」
「じゃあ、ノームの伝説はやっぱり真実なの……」

ターナの言葉に、ブルードラゴンは首を振った。
「……いや、そうじゃない。だまされんぞ、銀騎士。貴様も魔導師の手下だな。ただの邪霊獣を、そういう噂でカモフラージュする。ガルダのやりそうなことだ」
あくまでかたくなな態度を崩さないブルードラゴンに、騎士はため息をついた。
「やれやれ、こいつはまた、ずいぶん単細胞な奴が選ばれし者となったもんだ」
「なにぃ」
「真実の言葉と、魔の甘言を混同するような男に、聖剣を持つ資格はない。魔の囁きに心を奪われ、闇の走狗となるのがおちだ」
「言わせておけば」
今にも襲いかからんとするブルードラゴンを、ターナが止めた。
「待って、アムル。私には、その騎士が嘘をついているとは思えないわ」
「ターナは黙ってろ」
「でも……」
彼女の巫子としての直感が、目の前の銀騎士を邪なるものではないと告げていた。さっきの〝火龍魔斬〟とかいう技が意志の力だとすれば、並の人間業ではない。彼の精神力は大魔導師クラスということになる。好き好んで敵に回すことはない。
それをアムルに言おうとした時、風に乗って、奇妙な声が聞こえてきた。
ア〜〜〜ム〜〜〜ル〜〜〜〜、アァ〜〜〜ムゥ〜〜〜〜ルゥ〜〜〜〜。

砂漠のまん中に、老人が立っていた。声の主は彼だった。天を舞うブルードラゴンを指し示し、唄うように語りかけた。
「アムルよ。若き龍の眷属よ。お前の来るのを待っていた。さあ、ここに来い、この龍の長の下にひざまずけ」
「龍の長だと」
「行くな、アムル」
老人の所に降りようとしたブルードラゴンの前に、銀騎士が回り込んだ。
「まだ邪魔するのか」
「奴が、奴がデスガーデアンだ」
銀騎士の姿を見て、老人が嗤った。
「ほう、貴様はシグルト。愚かにもまた姿を見せたか、死にぞこないよ。貴様がその剣をいくらふるおうと、しょせんは蟷螂の斧。この私に勝てると思うか。いいだろう。お前たちがここに来ぬのなら、私の方から上がって行くまでのことよ」
老人の姿が、白骨に変わった。その全身を青い光が包んだ。目の前で、骸骨の人間は白骨の龍へと変わっていった。それはアムル自身の変身によく似た過程だった。
ブルードラゴンの前に、死の龍が翼を広げていた。すべては骨でできている。その肋骨の中に、青い光球が強く弱く鼓動をうつように輝いていた。
「若き龍よ、お前の闘いぶりは昨夜見せてもらった。今度は私が相手だ。グリテリアスのように見事に倒して

みるか」
「言われるまでもない、デスガーデアン、聖なる龍の姿を愚弄する邪霊獣よ。貴様を倒し、ノームたちを古えの恐怖から解放する為にここまで来たのだ」
「上等だ。ならば殺せ、この私を殺せ、さあ！」
「いかん、アムル、手を出すな」
銀騎士の叫びもむなしく、ブルードラゴンは、火炎弾を撃ち出した。デスガーデアンの奇妙な叫びに誘われるように、聖龍の口から炎がほとばしった。
骨龍を炎が包む。身体がバラバラに砕け散ったかに見えた。
が、青い光が輝くと、飛び散ったはずの骨が集まり、デスガーデアンはたちまち元の姿に戻った。ブルードラゴンは、たじろいだ。確かに全弾命中したはずだ。手ごたえもあった。なのに何故――。
ブルードラゴンは地面すれすれに滑空すると、ターナを下ろした。
「待って、アムル。私も一緒に闘うわ」
叫ぶ彼女を振り切って、もう一度空に舞い上がる。待ちかまえていたデスガーデアンに向かい、再び火炎弾をぶつけた。ただの火炎ではない、同時に衝撃波も放った。〝怒龍吼〟と〝爆震〟の複合技だ。炎と衝撃波の渦が骨龍を襲った。
だが、その攻撃を真正面からうけても尚、骨龍はゆっくりと羽ばたいていた。胸の青い光が一段と明るく輝きだした。
戸惑う聖龍にデスガーデアンが言った。

「どうした、それで終わりか。それが、お前の意志の力のすべてか。そんなものが聖龍ブルードラゴンの力か。もういい、分かった！」
デスガーデアンの眼窩が赤く輝き始めた。
「私は待っていた。太陽神に首をはねられて以来ずっと、この龍の墓場で待っていた。私に、安らぎの時を与えてくれる力を。が、それはお前ではない。お前も、私に永劫の眠りを与えてくれることはできない。若き龍の眷属よ、お前にその姿は千年早い。私を倒すことができないのなら、死ぬのはお前だ。この醜き骨龍の姿は、お前の未来の姿だ、アムル・ラル・ラフィエル！」
「ま、まさか……」
空を仰ぐターナが、信じられないように声をあげた。
デスガーデアンの身体がもう一度、変身しようとしていた。ブルードラゴンが吐く炎が、骨龍の身体にからみつく。炎は、肉に変わった。ブルードラゴンの思念を、自分の肉体に変えていた。火炎弾の射出を止めようとしたアムルだったが、これが骨龍の力か、自分の意志では止まらなくなっていた。
「もう遅い。貴様の魂は、既に開かれた。儂が吸い尽くすまで、意志の放出は止まらぬわ。このまま魂を喰らい尽くしてやろう。龍の鎧を剥されて、廃人と化すがいい」
デスガーデアンの言葉通り、意志の炎がとめどなく流れ出ていく。ブルードラゴンの身体からどんどん精気が失われていった。その顔が苦痛に歪む。逆に、デスガーデアンが放つ青い光は一段とその輝きを増していた。
「ほほぉ、さすがは龍族、ノームたちの魂とは格段の違いだ。これならば、龍の姿を取り戻すまでさほどの時

間はかかるまい」
そこに、銀騎士の裂帛の気合いが響いた。
「火龍魔斬！」
二匹の龍の間に飛び込んだ銀騎士が、一閃、炎の剣をふるった。意志と意志とのぶつかりあいが、闇の力を断ち切った。ブルードラゴンが吐き出す火炎弾の流れを、炎の刃が遮る。やっと自由になったブルードラゴンは、一旦、高く舞い上がった。
変身を邪魔されたデスガーデアンが、怒りにその身を震わしていた。龍の姿はしているものの、身体のあちこちから骨がのぞいている。白骨だった時よりも、数段不気味さが増していた。
「ええい、あと一息で完全なる龍の姿を手に入れたというに！」
離れようとした銀騎士に、デスガーデアンの尻尾が襲いかかった。そのスピードをかわしきれず、彼は翼龍の背からはねとばされた。真っ逆さまに砂漠に向かって落ちていく。
「あぶないっ」
見ていたターナが、彼の落下地点に向かって気を放った。砂地が弾ける。その衝撃がクッションとなって、落下のショックを弱めた。弾むように一度、彼の身体はふわりと浮かぶと砂地に放り出された。その拍子に兜が脱げて、ターナの足元に飛んできた。
「大丈夫？」
鈍く輝く兜を拾い上げ、銀騎士の側に駆け寄った。ターナの機転が功を奏したのか、人並はずれた体力の持ち主か、銀騎士はすぐに身体を起こして立ち上がった。

「そ、その顔は……」
兜を受け取る銀騎士の素顔を見て、ターナは息を呑んだ。
青色の鱗、耳まで裂けた口、鋭い牙。龍とも人ともつかない異相の男がそこにいた。龍面の騎士。その二つの瞳が、赤く輝いていた。
「来い、フーヴァニール！」
唖然としているターナを後目に、降りてきた翼龍の背に飛び乗ると、ブルードラゴンの前まで一気に駆け上がった。
「銀騎士、まさか、お前も……」
「そういうことになるな。俺の名はシグルト。選ばれそこなった男ってとこだ」
口元を皮肉っぽく歪めると、銀騎士はフェイスカバーを下ろした。
地上の様子を窺っていたブルードラゴンの目にも騎士の異相ははっきりと見えた。その特徴的な、瞳の赤い輪も、だ。
彼の言外の問いかけに、銀騎士はイエスと答えた。この龍面の騎士もまた、ラフィエルの一族だったのだ。ではなぜ、そのような顔になったのか。彼が言う通り、デスガーデアンが初代ブルードラゴンだとしたら、本当に太陽神がロイを殺したのか。聞きたいことは数々あった。
はやるアムルを銀騎士――シグルトと名乗った――が押さえた。
「詮索なら後だ。今はデスガーデアンを、あの龍の死霊を倒すことだけを考えろ。俺たちの思念攻撃はすべて、奴の前では無力だ。〝火龍魔斬〟も、デスガーデアンにまともに向けければお前の二の舞、奴の意識の虜

になっちまう」
確かに彼の言う通りだ。残されているのはブルードラゴンの肉体による直接攻撃しかない。が、龍の肉体も意志の力によりつくられたもの。デスガーデアンに接触したときに、火炎弾同様吸収されないとも限らない。そうなれば今度こそ本当に、龍の姿を乗っ取られてしまう。
「胸の青い光、ロイの意識があそこにある。あそこを直接攻めれば勝てないことはないはずだ」
アムルが自身の肉体に意志の力で龍の姿をまとっているように、核になるロイ・ラフィエルの意識を悪しき意志の鎧が護っている姿、それがデスガーデアンだと、シグルトは言った。
「だったら、どう攻める」
「それが分かれば、こんなところで苦労はしてないさ」
ブルードラゴンの問いに、銀騎士は肩をすくめた。
攻めあぐねているアムルたちをデスガーデアンが嘲弄した。
「何をためらっている。さあこい、できそこないの龍の一族よ。遅かれ早かれ、貴様らは闇の虜となる。ミッドガルドの若き騎士のようにな」
「若き騎士……ラインか!?」ブルードラゴンが牙を剝いた。「貴様、ラインに何をした」
「何もせぬよ。奴は自ら望んで、暗黒神に忠誠を誓った。この私のように闇の力を得ることで、新しい生命を手に入れたのだ」
「ふざけるな。誰がそんなことを信じるか！」
「信じられなければそれでもいい。とりあえず返しておくぞ」

デスガーデアンの中から何かが撃ち出された。ターナの足元に転がる。それは胸当てだった。胸に描かれているのは龍と日輪の模様だ。ミッドガルドの紋章だった。
「これは、兄さんの……」
ターナの顔色が変わった。兄ラインのつけていた胸当てだった。
「わかったかな、アーリアを奉ずる愚か者共よ。その胸当ての持ち主が己への信仰を捨てようという時に、太陽神は何の手だてもこうじなかった。しょせん、太陽神とはその程度のものだ。自分が用のない者の祈りには、決して耳を傾けようとはしない。お前たちも同じ運命だ。もはやアーリアに闇を止める力などない」
「うそだ！」
「うそ？　虚言を吐くのは太陽神の方だ。私はその言葉に騙されて、この力を利用された、利用されてこの首をはねられた。一度は果てたこの身に新たな力を与えてくれたのは暗黒神ザウエル様だ。その時に私は悟った。闇こそ真実だ。太陽の光に惑わされた龍の子よ、まだ遅くはない、お前にも世界の真理を悟る機会はある、この私と一体となることでな」
半骨半龍、まさしく死の化身ともいうべき魔獣は、その身を震わせてあざ笑った。ブルードラゴンの顔が、怒りに歪んでいた。
「許さんッ！」
銀騎士シグルトの止める間もあらばこそ、ブルードラゴンは烈火の如き勢いでデスガーデアンに突っ込んでいった。
「馬鹿が、無駄死にだ！」シグルトが叫んだ。

聖龍が呑み喰らわれると思ったその時、デスガーデアンは悲鳴をあげて身を翻した。ブルードラゴンの体当たりは、紙一重でかわされた。

砂漠のはずれが、銀色に輝いていた。湖だった。いつの間に現れたのか、先刻までは水一滴なかったはずの不毛の大地に、美しい湖が現れていた。その湖面の輝きが、デスガーデアンの目を貫いたのだ。目だけではない、アムルの意識を喰らって創ったはずの龍の身体が、その輝きに照らされた箇所からグズグズと崩れ始めていた。

「なぜだ、なぜこんなことが……」

デスガーデアンは、激痛に身悶えしながらうめいた。

忽然と現れた湖は、灰雲に拡散する太陽の光を増幅するように、まぶしく煌めいていた。その湖の底に沈むものを聖龍の目が捕らえた。

「あれは……！」

再び、アムルの中に怒りがかけめぐった。突然、その方向を変えた。何を思ったか、猛スピードで湖めがけて飛んでいく。

「逃すか！」

憎悪に燃えるデスガーデアンも、その後に続いた。

「アムル、何のつもりだ」

翼龍を駆ってシグルトが追いついてきた。

「一か八かだ、普通のやり方じゃ奴は倒せないんだろう」

ブルードラゴンは湖面の上空で止まると、デスガーデアンに向かって言った。
「来い、哀れなる魂喰らい。土に還れぬ妄執を、今、根こそぎ断ち切ってやろう」
「ほほぉ、大口を叩いたな。が、お前にそんなことができるものか」
「やってみせるさ。たとえ、かつては龍の長だったとしても、今はただの迷える亡霊。お前一匹倒せなくて、暗黒神の手に落ちた仲間を救うことなどできはしない」
ブルードラゴンが思念を放射した。デスガーデアンにではない。湖面に向かってだ。なぜかブルードラゴンの姿が銀色に輝きだした。
「見たか、デスガーデアン。この湖は聖水、この光は太陽神の祝福を受けだ聖なる水の輝きだ」
「なにぃ」
「《嘆きの大剣》をそのままにしておいたのはまずかったな。大剣から溢れた聖水が、この呪われた砂漠にオアシスをつくった。これこそラインが残してくれた聖なる湖だ。太陽神は俺たちを見捨ててはいない」
ブルードラゴンが湖底に見た物、それは《嘆きの大剣》だった。剣身から渾々と湧き出る聖水が、この湖をつくっていた。その水の勢いが、アムルにはなぜかラインの無念に思えてならなかった。いや、無念なのは自分の方だ。あと少し早ければ、彼をこの死の龍の手から救えたかも知れぬ。腹の底に固まる怒りを、ありったけの想いを、湖面に放った。聖水は鏡のようにその意志をはねかえす。聖なる水の輝きを合わせて、アムルの意志が銀色の鎧に変わった。
「行くぞ、デスガーデアン、今度こそ決着をつけてやる」
銀色に輝く聖龍が、デスガーデアンに向かってぶつかっていった。

「太陽神の力を借りて、己の意志を護ろうというのか。面白い、ならば、太陽神ごと貴様のすべてを呑み喰らってやるわ！」
死の龍はその翼を大きく広げた。胸の青い輝きが一段と強まった。デスガーデアンの数倍に光球が膨れ上がった。その中に銀色の聖龍が飛び込んでいった。
荒れ狂う意識の牙が、ブルードラゴンに襲いかかった。聖龍の銀色の輝きが、青い光に喰われ剝げ落ちていく。太陽神の加護もこの狂える龍族の長の前では無力なのか。おそるべき意志の力だった。
「アムル！」ターナが叫んだ。
本体に届く前に、銀色の光は消え去り、聖龍の身体も蝕まれ始めていた。ブルードラゴンの翼が、腹が、首が、そして顔が、青い光の中に消えていった。
「どうした、アムル、愚かなる龍の子よ。そんな小細工でこの龍の長が倒せるとでも思ったか。こざかしいわ」
デスガーデアンが高く笑った。が、——。
「まだだ、まだ終わっちゃいない！」
死龍の間近にアムルがいた。龍の姿をはぎ取られ、人間に戻ったアムルが、聖剣を構えてデスガーデアンの胸元に飛び込もうとしていた。
「あいつ、自分の意志を囮にして、本体を攻めるつもりか！」
シグルトがうなった。
思念を聖水に反射させて、ブルードラゴンの残像を造る。火炎弾を放つように、その残像をデスガーデアン

に向かって撃ち、アムル自身はその影に入る。囮の残像を喰らわせておいて、その隙にデスガーデアンの胸に飛び込む。そこにロイの意識の核があるはずだ。
危険な賭だった。デスガーデアンの意志を喰らう力が、アムルの予想よりも強ければ、本体にたどり着く前に彼の身体も意志の奔流に巻き込まれ消滅してしまう。
その賭に、アムルは勝った。青い光の中心に髑髏が浮かんでいた。それが、デスガーデアンの本体だった。
「今、楽にしてやる。龍の亡霊よ！」
アムルは髑髏の眉間に深々と聖剣を突き立てた。
グルグァオォ――ン。
デスガーデアンが絶叫した。青い光の輝きが急速に衰え、その身体がボロボロと崩れ落ちる。再び骨だけの身体となり、その骨にも無数のひびが入って風化していった。
意志の最後の揺らめきか、わずかに残った青い光に包まれて、髑髏が語りかけてきた。
「……意志の残像か、面白いことを考える。……が、もう遅い。暗黒神は既に目覚めた。お前も私と同じ地獄の道を歩むことになる。それがラフィエルの宿業だ……」
髑髏の眼窩に赤い光が仄めいた。カッと口を開くと、カタカタと二、三度顎を鳴らして嗤い、そして、粉々に砕け散った。宙空からデスガーデアンの姿が霞のように消え去った。
空中に放り出されたアムルは地面に落ちていった。それまでの闘いに気力を使い果たしたのか、グッタリとしたままだ。シグルトが空を駆けてくると、その腕をひっつかんで翼龍の背に引きずりあげた。
「どうやら、お前の力を見くびっていたようだな。荒っぽいやり方だがよくやったよ。伊達に聖剣を手にした

わけじゃなさそうだ」

その声は今までになく温かいものだった。

「〝銀朧(スモール)〟……」アムルがつぶやいた。

シグルトが聞き返すと、アムルは聖剣を差し出した。柄(つか)の赤石の一つが透明になっていた。〝銀朧(スモール)〟という古代文字が透(す)けて読めた。

「今の技のことだろう。俺がデスガーデアンを倒すことも、予定の一つだったらしいな。シグルト、ラフィエルってのは一体何なんだ」

無言の銀騎士にアムルは軽く笑った。

「残った一族はあんただけだ。あとでゆっくり聞かせてもらうぞ。……目が覚めたら、な……」

その言葉が終わる頃には、もうアムルは寝息(ねいき)をたてていた。疲労(ひろう)の限界だったのだろう、深い眠りに落ちている彼に聞こえるわけでもないだろうに、銀騎士は一言つぶやいた。

「いや、俺(おれ)だけじゃない。もう一人残っている。最悪の男がな……」

21

闇は生きていた。その宮殿(きゅうでん)の奥深(おくふか)く閉ざされた大広間で、妖(あや)しく蠢(うごめ)いていた。うねうねと這(は)う身体が地面をこする音が、時折(ときおり)響く奇怪(きかい)な息吹(いぶき)が、アリーシャの耳をつく。

厚い水晶壁(すいしょうへき)で仕切られているというのに、大広間を見おろす高さに設(もう)けられた祭壇(さいだん)にも、闇が放つ兇気(きょうき)はいやおうなく伝わってきた。手を縛(しば)る鎖(くさり)の痛みよりも、身体の芯(しん)まで凍(い)てつかせる寒さよりも、彼女の心を蝕(むしば)

もうとすり寄ってくる魔の波動がミッドガルドの王女を悩ませていた。
その度に彼女は、ラフィエルの若者のことを胸に描いていた。邪神官にさらわれる寸前に祭塔で見た彼の瞳を、その中に浮かび上がった太陽の印を、いつか自分を救いにきてくれる聖なる龍の姿を。それが、闇の兇気をはねかえしてくれた。
「困ったものですね、ザウエル様も」
背後で声がした。ガルダだった。彼女がこの氷の宮殿に連れてこられてから、どのくらいの時が流れたのだろうか。祭壇の間に拉致されてから初めての邪神官の訪問だった。彼は水晶壁から広間を見おろした。
「あの部屋を出たくて仕方がないらしい。今はまだ、あの氷の間の結界の中でしか生きられぬというに」
「やっと姿を見せましたね、仮面の魔導師。私をこんな所に閉じ込めて、いったい何をしようというのですか。無駄ですよ。あなたがどんな邪悪な企みを企てようと、太陽神と聖龍が必ずこの世に光を取り戻します」
アリーシャの言葉が耳に入らなかったように、ガルダは言葉を続けた。
「ザウエル様の相手ばかりで退屈でしょう。今日は、あなたになつかしい人をお連れしました」
ガルダが合図すると、柱の影から男が一人姿を現した。その男の顔を見てアリーシャは絶句した。
「ライン……」
そこに立っているのは、ミッドガルドの若き近衛隊長だった。が、彼女が知っているライン・フォン・ベルバードとは全くの別人だった。
黒い甲冑に黒いマント、全身黒ずくめの姿に金色の髪が映えていた。整った顔立ちに凄惨さが加わり、彼女ですら一瞬息を呑むほど美しかった。しかしそれは、虚無的な美しさだった。この青年が持っていた直情で

はあるが熱い心の輝きは、微塵も感じられなかった。アリーシャは、彼が邪神官の術に落ちていることを悟った。邪神官に気づかれぬようにこっそりと、覚醒の呪文を唱え始めた。が、――。

「つまらぬいたずらはおやめなさい、アリーシャ」

邪神官にはお見通しだったらしい。彼女が放った念を片手で弾き飛ばすと言葉を続けた。

「無駄なことです。私がいる限り、彼が太陽神の誘惑に耳を貸すことはない。次は、あの男の番です。あなたが最も頼りとしている龍族の末裔を連れてきてあげましょう」

アリーシャが眉をひそめた。

「アムルをですか。思い上がるのもいい加減にしなさい。ブルードラゴンが暗黒神を倒したのは、あなたも知っているはず。龍族が魔の力に屈することなど、絶対にありません」

邪神官はその言葉に声をあげて笑いだした。

「何がおかしいのです」

「全く、世間知らずのお嬢さんだ。だから太陽神の巫子などぬけぬけと、やっていられるのでしょうが。分かりました。面白いものを見せてあげましょう」

ガルダはその黄金の仮面に手をやった。

「ご覧なさい、アリーシャ姫。あなたが最も忌み嫌っているゴズアルの大魔導師の正体を」

笑いながら仮面をはずしたこの邪神官の素顔、それは想像以上に美しい顔立ちだった。横のラインと較べてもひけをとらない。真っ白な肌、細く引き締まった紅い唇、切れ長の黒い瞳。それゆえに、左の額から頬にかけて走った傷跡が生々しかった。刀傷だろうか。その傷のせいで左目は堅く閉ざされている。

が、残った右の瞳にある印が浮かび上がっていた。その印を見てアリーシャは息を呑んだ。
「……赤輪の瞳……ま、まさか」
アムルと同じ龍の眷属の印が、聖なる情熱の証が、この男の瞳にもあった。驚くアリーシャにガルダは微笑みかけた。背筋が凍るほど冷たい微笑みだった。
「光が強ければ強いほど、闇もまた深くなる。言ったはずですが、かつては私もオードン司祭の下で太陽神の教えを学んだ身。その末に知ったのですよ、聖戦で起こった出来事の真実を。暗黒神とはいったい何だったのか、太陽神がラフィエル族に何をしたか。今度もあれと同じことをやればいい」
「……同じこと……」
「闇が光を蝕す時、聖なる者の血を引く生贄が、闇に全能の力を約束する……」
アリーシャが、突然目を見開いた。邪神官の中に浮かんだイメージを読み取ったらしい。そこに何を見たのか、彼女の顔から血の気が引き、頬が蠟細工のように透き通っていた。
「そんな、そんな恐ろしいことが。ガルダ、あなたはなんてことを！」
「ほほう、さすがにオードンが目をかけるだけのことはある。私の意識に忍び込みましたね」
ガルダが手をかざすと天井から水晶壁が降りてきて、アリーシャの四方を囲んだ。
「しばらく、そこでおとなしくしていなさい。あなたにはもう少し生きていてもらわなければならない、闇が光を蝕す時までね」
水晶の牢獄の中で叫ぶアリーシャを残し、二人は闇に消えていった。

アムルは一日眠り続けて、ノームの村の小屋で目覚めた。

村には、もう誰も残っていなかった。一度見つかった所に棲むのは危険だという判断か、彼らはさらに森の奥へと立ち去っていた。深い眠りに落ちたアムルを連れたターナには、他にあてがあるわけでもない。とりあえず焼け残った小屋を借りていた。

「奴は、シグルトはどうした」

アムルが意識を取り戻すと同時に吐いた台詞がこれだった。ターナは少し不機嫌な顔をして、首を横に振った。

「逃げたのか」

跳ね起きるようにして、ベッドから降りた。そこに扉が開いた。銀騎士が手に土鍋を下げて、入ってきた。兜を脱ぎ、素顔をさらしている。びっしりと肌をおおった青い鱗、鼻と一体化して高く突き出した上顎、耳まで裂けた口、その下からのぞく鋭い牙。怪物じみた顔つきだったが邪悪な影はない、むしろその異相は力強さになっていた。

「俺ならここにいる。逃げたなんて、人聞きの悪いことを言うな」

キョトンとしているアムルを銀騎士が笑った。

「目が覚めるなり、俺のことを聞くからだよ。その前に一言あるんじゃないか」

と、ターナを目でさして、

「一晩中、お前に生命力の気を送り続けて介抱したんだ。心配なら俺よりも彼女のことが先だろう」

「一晩中?」

アムルはターナの方を振り返った。彼女は黙って顔をそむけた。なんとなく気まずい沈黙が流れる。どうもこういう雰囲気は苦手だ。アムルは頭を掻いた。シグルトは苦笑した。

「まあ、気がついたんなら何よりだ。これを食え。気力と体力を取り戻すには一番だ」

鍋の蓋をとると、香辛料のきつい匂いが部屋に広がった。木ノ実、獣の肉、野菜……シチューというよりは手当たり次第にそこらにあるものをぶちこんだごった煮と言った方がいい。が、その猥雑な香りが眠っていた胃袋を目覚めさせた。アムルは初めて、自分が上半身裸だったことに気づいた。随分、汗をかいたらしい。朝の空気が素肌に冷たい。

ターナが戸棚から木の皿とスプーンを運んできた。彼女は何も言わないが、そのやつれた横顔を見ると、シグルトの言葉も大げさではないらしい。一晩中、気を送るなど並み大抵の気力ではできない。アムルの口から自然に感謝の言葉が滑り出た。

「ありがとうターナ。もうそんな無理をするなよ」

彼が目覚めてから初めて、ターナの口元に微笑みが浮かんだ。

「そうね、気をつけるわ。でも、あなたが無茶をするから、私が無理することになるのよ」

冗談めかしていたが、その目は本気だった。アムルは黙って皿に手を伸ばした。彼女の心配が痛いほど分かって、返す言葉をなくしたのだ。巫子戦士の鎧の下から、不意に生身の彼女が立ち上がってくるような感じがした。ごまかすように、スプーンを口に運んだ。

シグルトの料理は、見た目よりも遙かにうまかった。疲れ果てていた身体に、スパイスの刺激が広がっていく。しかも、どこか懐かしい味だった。同じような物を食べたことがある。それも何度か。これは？　問いか

けるように見るアムルにシグルトは言った。
「ラフィエル特製だ。闘いに疲れたラフィエルの戦士たちは、この食事で鋭気をやしなった」
アムルは思い出した。これは父の、父スコットの味だ。諸国を放浪している頃、時折森の中で野宿することがあった。その時の夕食は決まってこんな煮込みだった。焚火の揺らめく光、森の木々のざわめき、土の冷たい感触、幼い頃の記憶が次々に蘇る。その度に心が揺さぶられ、洗われていく。身体に力がみなぎるだけでなく、精神も浄化されていくようだ。そういう作用のある薬草が入っているのかもしれない。
「聖剣を見せてくれ」
食事が終わった後、シグルトは不意にそんなことを言い出した。
「俺を信用するんならの話だがな」
「今まで前後不覚に眠ってたんだ。いまさら警戒したって格好つかないさ」
アムルは笑って剣を差し出した。シグルトは聖剣を抜き放つと、真正面にかざした。
「こいつは、難しい剣だな。使いこなすにはもう一苦労いりそうだ」今度は、逆手に持って柄の部分をのぞいた。「〝怒龍吼(ファイアー・ブレス)〟、〝爆震(アースクウエイク)〟、〝銀朧(スモール)〟……残るは三つか」
透明になった石の中の文字を読み上げる。
「あとの封印にはどんな力が込められているんだ」
アムルの問いに、シグルトは首をすくめた。
「さあな。護ってはいたがお前が手に入れるまで、俺も聖剣を見たことはなかったんだ」
「護ってた？　あの湖のことか」

アムルは、この銀騎士と初めて出会った湖の夜のことを思い出した。
「ああ。ラフィエルの村が壊滅してからは、あの山に誰も立ち入らせないようにするのが俺の使命だった。村を護れなかった俺にできる唯一のつぐないだ」
シグルトは、ラフィエルの意志が告げなかった真実を語り始めた。
かつて、ラフィエル一族は神官団と騎士団の二つを中心にまとまっていた。中でも、黄金の神官と白銀の騎士と呼ばれる二人は両グループを代表する力の持ち主だった。伝説のロイ・ラフィエルの再来と囁かれた二人だった。
聖龍伝説に興味を持った黄金の神官は、オードンに師事し神殿都市ウルドで太陽神信仰を研究することになった。書物に触れるだけではなく、既に絶滅寸前になっていた神話的種族、ノームや巨人族たちの末裔の村を巡り伝承を集め、最後には神話の地、暗黒神の居城があったと言われる虚無氷河にまで足を運んだ。
神話の果てに何を見たのか、それは誰も知らない。はっきりしているのは、戻ってきた時には彼の胸に暗黒神崇拝の思いがともっていた事だ。黄金の神官は、邪教の魔導師と化していた。
「ガルダ……」
ターナが言った。
「そうだ。それが暗緑の邪神官ガルダの正体だ」シグルトがうなずいた。「そして奴が最初に狙ったのが白銀の騎士、つまりこの俺だった……」
その頃ガルダは、かつて暗黒神の下僕として暴れ回った邪霊獣たちを召喚する法を求めていた。暗黒神の邪なる意志を動物や植物に注ぎ込み邪獣と化す。その最初の生贄に銀騎士を選んだのだ。まだガルダが邪教

の徒となったことを知らなかったシグルトは、不意をつかれ邪獣化の術をかけられてしまった。が、彼の強靭な意志力はかろうじて魔に落ちることを阻んだ。軀は獣となっても、魂は元のままだった。失敗に気づいたガルダは、彼に剣を浴びせた。致命傷だった。生きていたのは奇跡といってもいい。半獣の生命力が彼を死の淵から呼び戻した。

「分からないもんだな。結果的には、奴がかけた邪獣の術が俺の命を救ったことになる」シグルトは笑った。

ガルダは旅の途中に知った蛮国ゴズアルと手を組み、暗黒神復活を旗印に大陸を席捲した。黄金の仮面をつけ暗緑のベールに身を包んで、自ら邪神官と名乗った。過去を葬った彼が次に狙ったのは、己の故郷、ラフィエルの村だった。

生と死の境からシグルトが目覚めた時には、もう一族は滅んでいた。しかし朦朧とした意識の中で、事の顛末だけは知っていた。

聖龍を蘇らせる者に与えられる《聖剣》。それを狙って村を襲うガルダ。神殿を地中に沈める長老たち。騎士たちはその身を犠牲にしてゴズアルと闘った、最後の選ばれし者にすべての希望を託して……。滅びゆく一族の意識が夢の中に入り込んできたのだ。ラフィエルの血だけがなせる業だった。

「その時に俺は誓った。選ばれし者が現れる日まで、聖剣は俺が護る。そいつはラフィエルが残した最後の武器だ。選ばれし者の成長を教える魔法の剣だ。デスガーデアンも、暗黒神を倒すための過程に過ぎない」

「じゃあ、ラフィエルはロイが亡霊となったことを知っていたの」

ターナが言った。

「ああ。その悲劇を繰り返さないために、聖剣がつくられたんだ。ある日長老たちの夢枕に一人の若者がたっ

た。若者はロイ・ラフィエルと名乗り、まもなく太陽神の力が弱まり闇が目覚めようとする。自分もその時には亡霊となり世を荒すだろう。一族の念を込め一振りの剣を打て。その剣で、闇とその下僕である自分を倒して欲しいと告げた。それがこの剣に伝わる伝説だ」

シグルトは聖剣を鞘に収めた。

「残念ながらラフィエルにも、なぜ太陽神が聖龍を殺したのか、その謎は明かされてはいない。が、一人だけ答えを知っている奴がいる」

「ガルダか……」アムルが言った。

「ああ、すべては奴が握っている。奴を倒せば、すべての謎が明かされるはずだ。目的は同じだ、協力させてもらうぞ」

差し出す聖剣を、アムルはしっかりと受け取った。

「難しい剣だが、使いがいはあるよ。こいつで助けなきゃいけない奴が二人になっちまった」

アリーシャとライン、二人の顔がアムルの脳裏を走った。

と、小屋の外で龍の鳴く声がした。鳴き声はシグルトの翼龍だった。何かただならぬ気配を感じたのだろうか。小屋の外でうずくまっていた龍が、しきりに天を仰ぎ吠えている。銀騎士はおもむろに兜を取り上げた。

「とりあえず、実戦あるのみってとこだな」

「二〇……三〇はいるな……」

アムルがうなずいた。さっきから外で、邪悪な気が凝り固まろうとしていた。それも、かなりの数だ。

「……向こうも本気ってわけね」

てきぱきと鎧をつけるターナに、アムルは微笑んだ。
「ターナは無理しなくていい。とりあえずノルマは一匹だ。残りは俺とシグルトで倒す」
「ずいぶん強気だな」
銀騎士が剣を抜いた。扉に手をかける。
「あてにしてますよ、先輩」
アムルの瞳が赤く輝いた。
三人は剣を構えて小屋から飛び出た。
邪霊獣たちの咆哮が、朝の森を震わせた。

第5章 虚無氷河

22

闘いの日々だった。
昼となく夜となく襲い来る邪獣の群れを、二人の龍の末裔は次々に打ち倒して行った。
幾日がたったろうか。邪霊獣たちの必死の抵抗にもかかわらず、彼らはすでに凍土のエリアまで進んでいた。もう一息だ。この氷河地帯を抜ければ、暗黒神の居城ダークキャッスルがある。
が、そこに待っていたのは今までに見たこともない邪霊獣の大群だった。邪神官ガルダはここを絶対防衛線とでも思ったのだろうか、一面に広がる大氷河を覆い尽くさんばかりの邪獣の群れが彼らの前に立ちはだかっていた。
「行くか」
何でもないように、シグルトが言った。
「ターナ、今日は少し多いぞ。ノルマ三匹だ」
もっと戦える、そう文句を言うターナには耳を貸さず、アムルは龍に変わった。
シグルトの剣からのびる炎の刃が、二本の牙をかざして襲いかかるバッカスたちをなぎ払う。巨大なトドの怪物が、炎の中に消えていった。
ブルードラゴンの身体が銀色に輝き、その身を五つに分けた。〝銀朧〟、デスガーデアンを倒すために解き放たれた封印だ。意志の残像を固定化し、分身にする。しかも、アムルはその分身たちを自在に操ることができるようになっていた。

五匹の銀の聖龍が、邪霊獣の群れの中を駆け巡った。氷壁に潜み思念弾をぶつけてくる人面岩ロックフェイス、前脚と後脚の間の皮膜を翼代わりに使って断崖の上から滑降し、頭部の三本の角を突き立てようとする角龍サイクロプス、甲羅の突起から火炎を射出する大亀マウンテール。数限りない邪獣が、あっという間に龍の翼に、牙に、引き裂かれていく。

逃げようとする邪獣を火炎弾が追った。氷壁の陰に隠れたサイクロプスを、背後から回り込んだ火球が貫いた。敵を倒した火炎弾は新たな標的に向かって飛んでいった。

これまでの闘いで、アムルはもう一つ封印を解いていた。〝炎舞嵐〟。火炎弾が自ら意志を持つように敵を襲う。一つの火炎で何匹もの邪霊獣が倒せた。大群を相手にするには有効な武器だった。

これが龍の眷属の力か。ブルードラゴンと銀騎士シグルトの闘いぶりに、ターナは舌を巻いていた。

しかし、そんな彼らにも限界はある。これほどの数の敵を一度に相手にしたことは、さすがになかった。銀騎士の火炎の刃が弱まる。聖龍の翼のはばたきから、心なしか力が抜けていった。大部分を倒したとはいえ、魔王の宮殿まではまだ遠い。疲労が二人を苦しめていた。

男の笑い声が響いたのは、そんな時だった。苦闘する彼らを嘲るように、氷河の谷間に哄笑が響きわたった。

「どうした、アムル。そのくらいのことで力尽きるか。伝説の聖龍とはその程度のものか」

ブルードラゴンの前に一匹の怪鳥が舞っていた。ピーカック。かつて邪神官がアリーシャを連れ去った時に乗った邪霊獣だ。今は背に一人の騎士を乗せている。笑い声はその騎士のものだった。漆黒の鎧に身を包み、真紅の剣身という奇怪な剣を振りかざしている。

「あれは、まさか……」
その声を聞いたターナは天を見上げて苦渋の声をあげた。
「やはり、デスガーデアンの言ったことは本当だったのか……」
騎士の歪んだ笑顔に、ブルードラゴンはうめいた。
「やっとだ、やっと会えたな。この日を楽しみにしていたぞ、ブルードラゴン」
そう言って高らかに笑う騎士の兜から、金色の巻毛がたなびいた。
ラインだった。魔道に落ちた若き騎士が、今、邪霊獣を率い、彼らの前に姿を現したのだ。その剣をブルードラゴンに向けた。真っ赤に輝く剣身が不気味に聖龍を誘った。
「《龍喰らい》、ガルダ様が特別に与えて下さった剣だ。慣れるまでに少し時間がかかってな、出てくるのが遅くなってしまった。今度こそ心おきなく戦えるぞ。どうした。なぜそんな顔で私を見る。旧友の再会だ。大いに楽しもうじゃないか」
地表からターナが叫んだ。
「兄さん、やめて。目を覚まして」
「ほお、ターナか。相変わらず勇ましいな」ラインの目に妖しい光が疾った。
「……が、また一段と美しくなった。そこで見ていろ。肉親の情だ。お前は殺さんよ。この二人を始末した後で、お前には、ゆっくりと魔道のすばらしさを教えてやろう」
「いいかげんにしろ!」
ブルードラゴンは火炎弾を撃ち出した。ラインを狙った訳ではない。ピーカックを撃ち、彼の足を奪うつも

りだった。
　が、その火炎弾は怪鳥には届かなかった。
　ラインがふるった剣が、虚空を裂き闇をつくった。その闇に、火炎弾は呑み込まれた。
「結界だ。奴は負の結界をつくっているぞ」
　シグルトが叫んだ。
　正の結界が、聖なる意志による壁だとすれば、これは空間を斬り裂いてつくった穴だった。その穴をシグルトは負の結界と呼んだ。
「こういうこともできる！」
　ラインがもう一度剣をふるった。突然、空が裂け炎がブルードラゴンを襲った。自分が撃ち出した火炎弾が襲ってきたのだ。ブルードラゴンは口を開くと、その火球を噛み砕いた。ラインが言った。
「どうだい、龍喰らいの味は。どんな思念攻撃もこの剣がある限り私にはきかない。すべて自分たちに戻ってくるだけだ。アムル、この勝負お前に勝ち目はない」
「なにい」
「相手を本気で殺そうと思っている奴と、できれば生かしておきたいと思っている奴が仕合えば、殺そうと思っている方が勝つのは当然だろう」
　彼の言う通りだった。アムルはさっきから、何とか彼を無傷のまま取り押さえたいと思っていた。すべての元凶はガルダだ。奴さえ倒せば、この若き騎士も元の自分を取り戻すはずだ。が、この期に及んでそんな思いでは、血祭りにあげられるのは自分だろう。本気で戦ってもどちらが勝つか分からない。それほど、ラインの

剣には凄味（すごみ）が増していた。
　シグルトも焦（あせ）っていた。
　今のアムルには、あの金髪（きんぱつ）の騎士を倒すことはできないだろう。仮に倒したとしても、心の傷が何処（どこ）かに残るはずだ。その傷は、簡単に消えるものではない。ダークキャッスルを間近（まぢか）に控（ひか）えたこの局面で、ブルードラゴンがそんな傷（きず）を負（お）えばそれだけで致命傷（ちめいしょう）だ。ガルダほどの術師（じゅつし）だ、その傷を狙（ねら）うのはたやすい。
　自分が手を出すこともできない。自分の火龍魔斬（サラマンダー・ブレード）ならば、あの騎士を倒すことはできる。が、みすみす友を見殺しにしたという思いがアムルの中に残るはずだ。そうなれば結果は同じだ。
　邪神官が、わざわざあの金髪の騎士を魔道に誘惑（ゆうわく）し、ここに送り込んできたのには、それだけの狙（ねら）いがあった。
（ガルダめ、ラフィエルの一番弱い所を突いてきたな……）
　我が身を龍に変えるだけの意志力を持つラフィエル族。だが、その力はまた最大の弱点でもあった。ラフィエルの心は熱く、直情である。その感情の爆発がとてつもないエネルギーを引き出す。が、逆に言えばそれだけ感受性も強い。一度傷ついた心を癒（いや）すことはなかなかできない。自分が、友に裏切（うらぎ）られたショックから身体と心を立ち直らせて、火龍魔斬（サラマンダー・ブレード）を会得（えとく）するまでどれだけの時間を要したことか。
　ラインは、そんなシグルトをも挑発（ちょうはつ）した。
「どうした、できそこないの龍騎士、さっきから何をうなっている。自分の一族もろくに護（まも）れなかった男に何ができる。かまわんよ、二人一緒（いっしょ）にかかってこい。ラフィエルとはしょせん、その程度の者だ」
（ガルダめ、卑怯（ひきょう）な真似（まね）を）

この様子をどこかで見ている邪神官に向かって、シグルトは心の中で悪態をついた。
沈黙を破ったのはブルードラゴンだった。
「分かったライン、お前が望むようにしてやる」
何を思ったか急に龍の姿が消え、次の瞬間には氷の上にアムルが立っていた。
「さあ、降りてこい。その龍喰らいと俺の聖剣、騎士は騎士らしく剣で決着をつけよう」
このままではどちらかが死ぬことになる。が、剣を交わすことができれば、その時に念が送り込める。魔に憑かれたラインを目覚めさせることができるかも知れない。アムルはそう判断した。
しかし、ラインは空から冷たい視線を投げかけてきた。
「いやになるほど甘いな。龍の化け物を相手に誰が騎士らしく戦うというんだ。出でよシェルフィッシュ！」
ラインの声と同時に、足元の氷を突き破り無数の弾丸が飛び出してきた。貝のモンスター、シェルフィッシュだ。短剣ほどの大きさだが、その殻は鋼をも貫く。アムルは飛びずさってその奇襲をかわした。が、彼が考えているよりも疲労は深かった。何でもない凍土に足を取られ体勢を崩した。
「顎が上がっているぞ、アムル！」
同時に、ラインの剣が疾っていた。龍喰らいがつくる闇が衝撃波となり、彼に向かって襲いかかった。アムルの策を見抜いているのか、ラインは決して剣を交えようとはしない。ただ衝撃波を叩きつけるだけだ。着地した瞬間の、無防備なアムルの胴を真っ二つに斬り裂くかに見えた。
そこにターナが飛び込んだ。結界の呪文を唱えていた。
ラインの斬撃が、彼女の結界を吹き飛ばした。衝撃波にターナの甲冑が裂け、露になった白い胸に一文字に

傷が走った。氷上に鮮血が散った。
「ターナ！」
　アムルが叫んだ。
「下がって。あれはあなたの相手じゃない。こんな不毛な闘いをあなたがすることはない。あの男は私が倒します」
　傷口を拭おうともせず、血に染まった乳房を隠そうともせず、ターナは兄だった男をにらみつけた。アムルの楯になるように剣を構える彼女に何を見たのか、ラインの唇に酷薄な微笑が浮かんだ。
「ほう……。そういうことか。お前もつまらぬ想いを背負ったものだな」
「……ライン」ターナが言った。
「わかった、ターナ。ならば二人一緒に倒してやろう。この兄のはからい、せいぜい感謝してもらおうか」
「貴様、実の妹まで……そこまで堕ちるか」
　アムルの身体が再び青い光を放ち始めた。
「堕ちた？　何の話だ。私は、本当の自分に気づいただけだ。いくぞ、アムル。選ばれし者などといい気になっているが、しょせん、太陽神の口車に乗りいいように利用された愚かな一族の末裔。その思い上がりもここまでだ」
　ラインが剣をふるった。ブルードラゴンが吠えた。
「やめろアムル、敵の手に乗るな！」
　かけつけようとしたシグルトも、再び襲いかかってきた邪霊獣の群れに足止めをくらっていた。

と――、ラインの衝撃波とブルードラゴンの火炎弾、二つの力がぶつかる所に、もう一つ大きな力が加わった。その力は、光と闇、二つの衝突を呑み喰らうように、白い輝きを放った。闇の穴はふさがれ、火炎弾は無に還った。

「どうやら、間に合ったようじゃな」

そこに、老人が座っていた。いや、そうではない。老人は上半身だけの存在だった。上半身だけで、アムルとライン、二つの力の衝突を食い止めたのだ。

オードンだった。邪神官の魔法陣に下半身を呑み込まれ動けぬ筈の大司祭がそこにいた。封じられた石畳ごと引き剝されたのか、腰から下は石の板になっている。

「まったくお前たちは、ちょっと目を放すとすぐこれじゃ。儂が殺し合いを止めたのはこれで二度目じゃぞ」

生ける胸像のような姿の大司祭は、その太い眉をなでながら、対峙するラインとブルードラゴンを見やった。

「ははは、大司祭自ら生贄となりにきたか。丁度いい。ここで、太陽神の教えは永遠に終わらせてやろう」

ラインが笑った。

「だったら、あそこにいる連中全員を殺さんといかんなあ」

オードンは天を指さした。

南の空に数百の原龍がはばたいていた。その背にはすべて屈強な兵士たちが乗っていた。それぞれが得意の武器で、襲いかかる邪霊獣たちを打ち倒していった。ライン配下の邪霊獣たちは、あっという間に駆逐されていた。戦局の変化に、彼の顔色が変わった。

「ええい、邪霊獣如きにこのライン・フォン・ベルバード、頼りはせぬわ」

妖剣を掲げてブルードラゴンに襲いかかろうとするラインに、突然ガルダの制止の声が響いた。

「やめなさい、ライン。あなたにはまだやらなければならないことがある」

空に巨大な眼球が浮かんでいた。ビッグアイズ、邪神官の目となり口となる邪霊獣だった。それがガルダの声を伝えていた。

「大司祭自らこんな辺境の地においでになるとは、思いもよりませんでした。せっかく来ていただいたからには、暗黒神の素晴らしさ、ぜひとも知っていただきたいですね。それまではここから帰すつもりはありません」

「こちらも帰るつもりはないさ。おぬしの虚妄がついえるまではな」

空に邪神官の含み笑いが響いた。

「何とも楽しみなことです。覚えておくがいい。闇が光を蝕す時、聖なる者の血を引く生贄が、闇に全能の力を約束する……。ライン、今は戻りなさい。この決着はダークキャッスルでつければよい」

ビッグアイズは雲の中にその姿を消した。

「アリーシャ姫は城の中にいる。欲しければ取りに来い。来れるものならな」

ラインはブルードラゴンを見すえると、捨て台詞を残してピーカックの向きを変えた。

「生きているのか、アリーシャが……」

ブルードラゴンは、気力を振り絞り、飛び去るラインを追おうと翼を広げた。銀騎士が止めた。

「待てアムル、お前は疲れている。今、深追いするのは危険だ。邪霊獣の後は俺が追う。必ずダークキャッス

ル攻略の糸口を見つけてくる。それまでここで準備をしておけ」
そう言うと、翼龍を翻して雲の海に消えていった。
「シグルト、俺も一緒にいく」
はやる聖龍を大司祭も諌めた。
「ここはあやつにまかせておけ。もしやとは思うたが、やはりあれはラフィエルの銀騎士か。強い味方を得たもんじゃな」
「しかし……」
「あの男の言う通りじゃ。少しは休め。第一、こちらには怪我人もおろう」
オードンの出現を見て張りつめていたものが解けたのか、ターナは気を失っていた。その周りを巫子たちが囲んで手当てをしている。胸に巻いた包帯ににじむ血が痛々しかった。
「助かりますか」
人の姿に戻ったアムルは、心配そうにのぞき込んだ。
「大丈夫じゃ。今なら何とかなる」
オードンの答えに彼は深く安堵のため息をついた。
その息が顔にかかったのか、ターナの長いまつげが微かに揺れた。そして彼女は目を開けた。
「オードン様……」
起き上がろうとするターナを、アムルが押さえた。
巫子たちに抱えられて運ばれてきたオードンが、彼女の傷口に手を当てた。気を送っているのだ。

「さいわい傷は急所をはずれとる。なあに、すぐによくなる」
出血が止まったのか、ターナの頬に微かに赤味が戻ってきた。
「でも、どうしてここに……」
「お前の兄から手紙をもろうて、駆けつけてきたんじゃが、まさか当の本人が邪神官の手に堕ちていたとはな、皮肉なもんじゃ」
「ミミュルね……」
ターナはアムルの顔を見た。彼も微笑んだ。
「ああ、どうやら約束を果たしてくれたらしいな」
その時、背後から彼を呼ぶ声がした。
「アムル、おい、アムル！」
原龍から降りてきた戦士たちをかきわけて、一際大きな身体の男が駆け寄ってきた。その大男の顔を見てアムルも叫んだ。
「ファド、お前か。身体の方は大丈夫なのか」
邪霊獣にやられ、アムルが都を発つ時には未だ昏睡状態だったファドが、そこにいた。
「ああ、さすがはシルドアレンだ。国境とは食い物が全然違う。あの程度の傷なら三日もあれば治るわ」
「腹わたを食いちぎられた男が言う台詞じゃないぞ」
彼だけではなかった。懐かしい顔が幾つも、大男の後ろから駆けてきた。
「隊長！　アムル隊長！」

「無事でしたか！」
口々に叫びながら彼の方に駆け寄ってきた。国境守備隊の部下たちだった。
「アーネス、フッダ、ダゴン、みんな生きていたのか」
アムルの目頭が熱くなった。ゴズアル軍の奇襲を受け壊滅したと思われた彼らだったが、どれも一癖も二癖もある連中だ、大半は命だけはとりとめ首都シルドアレンに戻っていたのだ。
「アムル、安心しろ。もうお前だけを戦わせはしない。あの金色仮面のキザ野郎に目に物見せてくれる。いよいよ大詰めだな。血が騒ぐぜ」
ファドの言葉に、他の連中も口々にうなずいた。
「油断するなよ、みんな。魔導師は狡猾だ。身体ならば治せるが、心を侵されると始末に悪いぞ」
ふっと曇るアムルの顔を見て、大男も肩をすくめた。
「ああ、俺も見たよ。あの近衛隊長がガルダにつくとはな、この目で見なきゃ信じられんところだ。この飛空龍隊も、奴の報告をもとにラオス王と大司祭がつくったもんだというのにな」
「飛空龍隊……」
アムルは、次々に着陸する原龍の群れを見やった。その上に乗っているのは、皆鍛え上げられた戦士だった。
アムルたちの苦境を知ったラオス王は、ダークキャッスル攻略を最優先と考え、選り抜きの兵士たちをここに送り込んだのだ。その足に原龍を選んだのはオードンだ。白魔術を使ってもともとおとなしい彼らを慣らすのには、それほどの時間はかからなかった。

「しかし、ラインの二の舞いは踏まんよ。そういう時のために、あのじいさんを連れてきたんだ」
ファドは、そう言ってオードンを示した。
「確かに、太陽神殿の大司祭を石畳ごとひっぺがしてかついでくるなんざ、怖いもの知らずのお前にしかできんよな」
自慢そうな大男に、ダゴンと呼ばれた坊主頭の兵士が皮肉を言う。
「お前にかかると天下のオードン様もかたなしだな」
よく言えば豪放磊落、率直に言えばただ荒っぽいだけだ。が、それがこの大男にはよく似合っていた。アムルは声をあげて笑った。仲間たちとの再会が疲れた心を癒してくれていた。
そんな光景を、ターナは複雑な思いで見ていた。この何ヵ月か一緒に旅をした中で、彼があんな屈託のない顔を見せたことが何度あったろう。特に、兄と龍の山ではぐれてからは、どこか昏い翳が表情の片隅にあった。あれが彼の素顔だ。あの青年が本来持っている陽性の資質を、これ以上失わせたくはなかった。彼自身のためにも、親友アリーシャのためにも、そして——。
ターナは、唇を噛みしめた。
彼女の中に強い決意が生まれていた。
——ラインは、魔に堕ちた兄は、私が倒す。これ以上、アムルの剣を無用な血で汚してはいけない。
深い哀しみに満ちた決意だった。が、その哀しみゆえに一層強くなる。
「何を考えとる、ターナよ」
気をそそぎ込んでいた大司祭が、顔をのぞき込んだ。

「オードン様、お願いがあるのですが……」
彼女の願いを聞いた大司祭は、側にいた兵士たちに何事か命じた。うなずいた彼らは、ターナとともに原龍に乗り何処かへと飛んでいった。

その夜、戻ってきたシグルトとアムルを中心に最後の作戦会議が行われた。ターナの姿が見えないのを心配するアムルに、大司祭は「心配するな、明日には戻る」となだめた。
その後、オードンはアムルのテントを訪れた。
「お前に詫びねばならんと思うてな」
デスガーデアンのことだった。
聖戦の後、太陽神が初代ブルードラゴンを、ロイ・ラフィエルを殺したという話はオードンも知っていた。調べたのは黄金の神官ガルダだった。太陽神殿の奥に隠された禁断の封神書をひもとき、オードンにすら読めなかった古代文字を解読した。秘密の影響力の大きさに、大司祭は再びその書を神殿の奥深くしまい込んだ。二度と人の目に触れぬよう封印された。ガルダが神殿を出たのは、それからいくらもたたない日であった。
それらの事実を黙っていたことを老人は詫びた。困難な旅に向かう若者に告げるには、あまりにも過酷な話だという判断だった。
「が、お前が出発する前に知っておけば、少なくともラインを魔道に堕とすことは避けられたかも知れぬ。それが悔やまれてなあ」
ロイが暗黒神の下で亡霊となっていようとは、さすがの大司祭にも想像できなかった。

「気にしないで下さい」
アムルは笑った。
「苦しい闘いになるぞ」
「でしょうね」
残念ながら封神書にも太陽神がロイを殺した理由は書かれていなかった。オードンはアムルが初代の二の舞いになることを心配していた。が、ここまで来て引き返せるわけもない。もちろんアムルもそのつもりだ。
「これで闘いは終わらせます。必ずガルダの野望は阻止します。少なくともこの地上では」
「この地上?」
アムルは、ラフィエルの神殿で見た幻視のことを語った。時間と空間の彼方で行われている光と闇の闘い、垣間見た太陽のイメージを老人に話した。
「ですが、正直言ってそんなことはどうでもいいんです。俺はあいつらが、あの邪神官のやり方が許せないだけです。人の心の弱みに付け込み惑わし、己の傀儡とする。そんなやり方が我慢できないんです。光とか闇とか、龍族とか人とか、そんなのはどうでもいい。もし、太陽神が同じことをするのなら、ガルダと同じように己の目的のためだけに人々を、聖龍を利用するのならば、その時はたとえ相手がアーリアだろうと闘うだけです」
彼の瞳に赤い輪が浮かび上がった。
「そうならぬことを祈っておるよ。司祭にできるのは祈ることくらいしかないからのお」
夜明け前、大司祭の言葉通り、ターナは布に巻いた棒状の物を抱えて戻ってきた。

そしてその朝、すべての準備を終えた一同は一斉に飛び立った。北の空に一段と厚くたなびく灰雲、その向こうに魔王の居城が待ち受けていた。

23

極北の半島にそれはあった。

氷に閉ざされた大地の中にぽっかりとできた虚無、それがダークキャッスルだった。光すらも呑み込んでしまう果てのない大深淵、まさしく闇の城の名にふさわしい代物だった。

「いよいよじゃな、アムル」

ファドの肩に乗ったオードンが言った。

ブルードラゴンは低く唸ってうなずいた。

（随分とたくましくなったものじゃ）

青く輝く聖龍の姿に、大司祭は目を細めた。〈アーリアの六つの封印〉のうち未だ二つは解けていない。が、この男なら何とかするに違いない。そういう気持ちにさせる。

「いくぞ、結界を破る」

大司祭の声を合図に、巫子たちが四方に動いた。中心の彼に念を送る。オードンはその念をより合わせ、深淵の入口にぶつけた。

突然、大深淵の奥から、幾重にも重なった唸り声が響いてきた。邪霊獣の声だった。叫びながらこちらへ向かって突進してくる。

ブルードラゴンが飛び込んだ。
ミッドガルドの飛空龍隊が雄叫びをあげて、後に続いた。
その頃、シグルトは半島の反対側にいた。
流氷が浮かぶ荒れ狂う海が眼下に広がっている。と、水面に巨大な渦巻ができた。渦巻の中心にポッカリと何もない空間が広がった。どうやら海底まで続いているようだ。そして海底には巨大な洞窟が口を広げていた。そこからゆっくりと巨大な眼球が姿を見せた。ビッグアイズだ。
「やはりな……」
シグルトはうなずいた。アムルたちにダークキャッスルの入口を教えた彼は、一人別行動をとっていた。もともと集団による戦闘は向いていない、特に一族が滅んでからはずっと一人で戦ってきたシグルトだ。アムルにミッドガルドの援軍がきた今、二手に分かれて攻撃するのも手だろう。
暗黒神の居城だ。入口が一つということはない。そう考えて様子を探っていた。昨日、ラインとこのビッグアイズが違う方向に消えたことから、この辺りが怪しいとにらんでいたのだ。
彼の勘は当たった。おそらく、このビッグアイズなど非戦闘用邪霊獣の出入口だ。邪神官の眼となり耳となる資質を持った魔獣の数は少ない。ブルードラゴンに正面からぶつけて、みすみす失う愚を避けたのだろう。
巨大な眼球が出ていくのを待って、シグルトは海に潜った。フーヴァニールともども無数の泡が包んでいる。シグルトの意志が周りの空気を一緒に運んでいるのだ。これでしばらくの間、水中でも活動できる。
洞窟に入るとすぐに水はなくなった。上に向かって昇っていた。中は暗く静まり返っている。もうそろそろアムルたち本隊の総攻撃も始まったはずだ。できるだけ早く城内に侵入し内部から攪乱する。それだけではな

い。なんとしても邪神官の居所を突き止め、奴の首を落としたかった。
一族を裏切り太陽神を敵に回して、あの男が何を企んでいるのか、どうももう一つ見えない。いやな予感が銀騎士をはやらせていた。
光が見えた。あれが洞窟の終わりらしい。
(いよいよ暗黒神の本拠地か……)
と、彼の前に突然、巨大な影が躍りでた。洞窟全体をふさがんばかりの巨大な蛇だった。鋭い牙がシグルトに襲いかかった。
炎がその首を斬り落とした。たわいもない敵だ。が、落としたはずの首が再び彼に襲いかかってきた。見ると斬った胴体の方からも新しい首がはえている。
(不死龍ヒュドラー!)
噂は聞いたことがある。暗黒神に仕えるという伝説の魔獣だ。蛇頭龍とも呼ばれる。一〇万本の首を持ちその首をすべて斬り落とさないと滅びることはないと言う。
「嫌な奴を門番にしてやがる。さすがはダークキャッスル、そう簡単には入れてくれないようだな」
前と後ろ、二匹の蛇龍にはさまれて、シグルトは剣を握り直した。
「が、こんなところでいつまでも足止めをくらうわけにはいかんのでな。貴様の増殖が早いか、俺の火龍魔斬が貴様を灼き尽くすのが早いか、勝負だ。かかってこい、ヒュドラー」
銀騎士の声が洞窟にこだました。

ミッドガルド城は森閑としていた。兵士たちはみな所定の位置についていた。まもなく決戦の封が切って落とされる。嵐の前の静寂が城全体を包んでいた。
目の前を行きつ戻りつする国務大臣に、ラオス王は苦笑いした。
「落ち着け、テュルク。宰相のお前が浮き足だってどうする」
「しかし……」
国務大臣は、窓から大陸の北を眺めた。北の山岳地帯、その稜線にびっしりと黒い物が動いている。ゴズアルの残党だった。国主ロッグウェルを失って大陸に四散していた彼らが再び攻め込もうとしていた。今までシルドアレンを護っていた精鋭たちがみな極北の凍土のエリアへ進軍したことを知った彼らは、この機を見逃さなかった。日の出と共に知らせを受けたラオス王は即座に戒厳令を敷いた。残った兵士たちを集め、大半を国境へと進軍させた。
国務大臣は青白い顔で王に詰め寄った。
「なぜ今、軍の主力を北に送ったのですか。みすみすゴズアルに隙をつくるようなことをしたのですか。ようやくここまで復興したというのに、このままでは、再びシルドアレンは、いや今度ばかりはミッドガルド国そのものが滅びてしまいますぞ」
「ザウエルが目覚めれば、否応なしにそうなるわ。今はただ、この都を持ちこたえることだけを考えればよい。聖龍を信じよ。我らがなさねばならぬのは戦士たちの戻って来る場所を護ることよ」
と、突然辺りが薄暗くなった。一同は空を見上げて、口々に驚きの声をあげた。
「太陽が……太陽が欠けてゆく」

ていろ。アムルを倒した後でゆっくり相手をしてやる」
「そうはいかない」
彼を見すえるターナの顔に、悲壮な決意が見えた。
「無茶だターナ、お前に兄が殺せるか！」
ブルードラゴンが叫んだ。
「倒してみせます！　さあ、早く奥へ。貴方がしなければならないのは、アリーシャを救いガルダの野望を阻止すること。こんなところに費やす時間はないはずよ」
「しかし……」
躊躇するアムルをオードンも叱った。
「行けアムル。ターナの心を無駄にするでない。ここはわしらで充分じゃ」
「分かりました。ターナ、ザウエルを倒せばすべての魔は闇に消える。それまで時間を稼いでくれればいい。無理はするな」
ブルードラゴンはターナを見つめた。ターナは、ただ、うなずいた。聖龍は翼を返して奥へと飛び去った。
マントを翻してその後を追おうとしたラインに、オードンが気を放った。覚醒の呪文だ。が、彼を護る黒ずくめの鎧が大陽神の大司祭の気をむなしく弾いた。
「無駄だ。太陽神の雑言に心動かされるほど、私はやわではない」
ラインの言葉に、オードンは悟った。
「ガルダめ、小細工をしおって」

邪神官が、鎧に闇の波動を込めているのだ。オードンの放った呪文の効果は、それにより相殺されてしまう。

「ファド、あのつららを落とせ」

大司祭は抱えている大男に命じた。

ファドの大戦斧がうなった。天井から下がっていた巨大なつららが落とされた。地響きが洞窟を揺らす。落ちてくるつららがラインの行く手を遮る。その隙にターナが追いついた。彼は旋回すると、追ってきた巫子戦士を一瞥した。

「ちょこまかとうるさい奴だ。そこまでしてあの男を護りたいか。お前も哀れだな、かなわぬ想いに命まで賭けるか」

「聖龍を護るのは巫子の本望。悔いはありません」

「無理をするな。口ではごまかしても、私にはその秘めた想いが手に取るように分かる。いくら黄金の鎧で身体を覆おうと、己の心まで隠すことはできない」

ラインの言う通りだった。

いつの頃からか、ターナはあの若き龍の末裔に心ひかれていた。この旅の途中からか、いや、ひょっとしたら初めて彼を見た時、ミッドガルド城の大広場で巨大蜘蛛と戦ったあの時、既に彼女の心の奥で何かが目覚めていたのかもしれない。

が、彼の心がアリーシャにあることも知っていた。そして、アリーシャも。二人の絆が何か神秘的なものに支えられていることは、巫子であるターナにはよく分かっていた。いまさら彼らの間に割り込む気はない。二

人を護れればそれでいい。兄に言った言葉は嘘ではなかった。それでも、それでも——、ダークキャッスルに向かうこの困難な旅がいつまでも続くといい。そんな夢想を心に走らせることも、時としてあった。

彼女の気持ちをどこまで読んだのか、ラインは冷えた眼で、巫子戦士を見おろしていた。《龍喰らい》を口元まで持っていくと、その刃をすうっと舌で湿した。チロリと覗く真紅の舌が、蠟面のような白い顔によく映えた。口元に妖しい微笑が浮かんだ。

「まあいい、すぐに死ぬ身だ。今、楽にしてやる。くだらぬ想いごとザウエルに食われるがいい」

ラインの剣がうなった。虚無がターナに襲いかかる。

彼女は布に包まれた得物でその虚無を受け止めた。布が裂け、中から輝く剣が現れた。その光に虚無は散り散りに消え去った。

「なにぃ」

ラインの顔色が変わった。

自分が捨てた秘剣を、ターナが構えていた。

《嘆きの大剣》だった。

彼女が大司祭に頼んだ願い。それがこれだった。死の谷の湖に沈む大剣を引き上げに飛んだのだ。

「私もウルドの巫子戦士。ただ死ぬつもりはないわ！」

まさかここに……。ラインは完全に虚をつかれた。その剣身が放つ輝きに、ピーカックがおびえて顔を背けた。閃光一閃、邪鳥の首が飛んだ。翼を失い、ラインは地上に振り落とされた。

それでも、地面に落ちる寸前、剣をふるった。これも魔の力か、人間の反射神経を超えた反応だった。地面

にぽっかり暗黒が生まれた。その中にラインは飛び込んだ。妖剣がつくる負の結界の中に逃げ込んだのだ。
ターナも負けてはいなかった。闇が閉じるよりも早く、彼女もその中に身を投じた。
「ターナ！」
オードンが止める間もなかった。ラインとターナ、二人を喰らって虚無はその入口を閉じてしまった。

――すまない、ターナ。
アムルは心の中で叫びながら、魔宮の奥へとその翼を羽ばたかせていた。
森の〝気〟とも交感できる彼だ。ターナの想いに気づかないわけはない。が、今の自分にはその想いに応える術がない。気づかぬことにするしかなかった。
彼女のために、せめて実の兄は救ってやりたい。一刻も早くザウエルを倒す。結局、それが彼のできる唯一のことだった。
そのためにどこに行けばいいのか、それは分かっている。
この暗黒神の居城に入った時から、アムルは何かとてつもなく邪悪なものを感じていた。それは魔宮の奥深く蠢いている巨大な意識だった。
おそらくそれが、暗黒神ザウエル――。
デスガーデアン、ロイ・ラフィエルの亡霊が最後に言った言葉を思い出していた。
「……暗黒神は既に目覚めた。お前も私と同じ道を歩むことになる。それがラフィエルの宿業だ……」
そうはいかない。そんなつまらない宿業に縛られる気はない。暗黒神はここで滅びる、滅ぼしてみせる。

いつの間にか周りは巨大な回廊になっていた。柱、壁、どれをとっても奇怪な装飾が施されている。どこまでが壁でどこまでが天井か、視界が歪みめまいを起こしそうな光景だった。邪悪な気はますます強くなっている。どうやら敵の本拠は近いようだ。

一段と邪霊獣の攻撃が激しくなった。壁や天井から無数の槍が襲いかかる。巨大な人型の怪物バゴスが鉄球を投げてくる。魔宮を護る邪獣兵士ガーデアンが斧をふるって襲いかかる。意志を持つ炎タンブラァーが群れをなして行く手を阻む。

が、それらの怪物は聖龍の身体に触れもしないうちに塵となった。意志の渦がブルードラゴンの周りを回っていた。今や、この身体が一つの弾丸になっていた。回廊を聖龍が飛ぶ、それが最大の攻撃だった。

眼の前に巨大な扉が見えた。

「あれか！」

ブルードラゴンの叫びが一撃で扉を砕いた。中から炎をも凍らさんばかりの冷風が、すさまじい勢いで噴き出してきた。

そこに、闇がいた。

邪悪な意志の塊が、聖龍を待ちかまえていた。

暗黒神ザウエル——血も凍る寒さの氷の間に、伝説の破壊神が聖龍の倍はあろうかという身体をうねらせていた。

（やはり蘇っていたのか！）

その姿を見ただけで、アムルはこの怪物がザウエルであることを直観していた。

何物でもあり何物でもない。顔は龍、上半身は人、下半身は蛇。すべての部分が何かに似ているが、全体でみると何物にも似てはいない。瞳には純粋な邪悪の意志をはらみ、耳元まで裂けた口は狂った笑みを浮かべているようだ。

アムルの背骨に嫌悪と恐怖が走った。

そして、次の瞬間、ザウエルの手に握られているものを見た時、それは絶望と激しい怒りに変わった。

――アリーシャ！

暗黒神の手に血塗れの女性が握られていた。すでに意識はない。叫ぶ聖龍をあざ笑うように、ザウエルはアリーシャを口に放り込んだ。口の中で骨の砕ける音が、奇妙に大きく響きわたった。

――アリーシャ!!

遅かった！　今はただ、後悔と怒りで身が裂けそうだった。

ギアアアアアン！

狂ったようにブルードラゴンが吠えた。血が逆流した。肉が膨れ上がった。

――許さん、許さんぞ、ザウエル！

青い輝きが聖龍を包んだ。怒りが身体を裂くように、肩口から肉が膨らみ伸びて、そしてそれは首になった。龍の首が二本に増えていた。

〝双龍牙〟、五つめの封印が、今、解けた。

二つの龍の牙がザウエルに襲いかかった。

24

虚無の中をターナは走っていた。
光もない、音もない。時折、オレンジや黄色の光が流れていく。それがラインが発した〝気〟だということに、彼女はまもなく気づいた。この負の結界は、いわばライン自身だった。ラインの意志の中に飛び込んだようなものだ。
（だったら……）
ターナは大剣を回転させていた。剣から滴る聖なる水に彼女の意志を反射させて、周りに障壁をつくった。アムルがデスガーデアンを倒したときに使った手を応用した。結界の中に結界をつくる。ラインの殺気が乱反射して、辺りを明るく照らし出した。
頭の上に光が煌いた。叫び声をあげてラインが飛び出してきた。が、聖水がその斬撃を弾き返した。鈍い音がした。ターナの大剣が、妖剣《龍喰らい》をへし折ったのだ。
転がるラインに大剣の切っ先を当てて、ターナは言った。
「終わりね、ライン」
「さて、それはどうかな」
「ここまで来て魔の囁きに耳を貸すつもりはないわ。私には、貴方が殺せる」
「だろうな。そんなことはわかっているよ」
ひるんだのはターナの方だった。喉元に剣を当てられて、それでもラインは笑っていた。

「どうした、早く殺せ。その大剣をこの喉元に深く突き刺してくれ。が、次はお前だ。兄の血で汚れたその手を太陽神が洗ってくれると思うか。魔に生きろターナ、楽になるぞ。お前の想いに素直に生きられる」
ハッとしたように彼女はラインの顔を見た。動揺に付け込むように、彼は続けた。
「もう、悩まなくてもいい。つまらぬ友情や信仰に義理を立てることもない。お前が欲しいのなら、あの男はお前の物だ。それが魔道の生き方だ。さあ、早くこちらにこい。その剣を突き立てろ。我が愛する妹よ」
ターナの剣先が震えた。彼女は泣いていた。が、その眼はキッとラインの瞳の向こうを見すえていた。
「そうやって兄を落としたのね、邪神官」
ラインの言葉が止まった。彼の向こうにいる誰かが、思わぬ抵抗に戸惑っているようだった。
「魔は甘言をもって人の心に滑り込む。大司祭様の教え、今こそよく分かったわ。でも龍の男のことを出したのは失敗だったわね。龍の姿が、龍への想いが、私の意識を覚醒させたわ。もう、これ以上魔の犠牲者は増やさない」
悔しかった。悲しかった。ふがいなかった。かつては、魔道の邪法に父を失い、今また兄をその手で討とうとしている。むざむざと魔道に堕ちた兄が悔しく、その兄と戦っているこの状況が悲しく、殺すしか手がない自分がふがいなかった。何のために、ウルドで修行をつんだというのだ。何のために、太陽神の教えを学んだというのだ。それでも、自分は兄を倒すだろう。あの龍の男と、無二の親友のために。
ふと、聖龍を殺した太陽神の姿が見えたような気がした。
彼女の頬を幾筋も幾筋も大粒の涙が流れていった。その涙は大剣に落ちていく。大剣もその涙に呼応したのか、いつも以上に聖水が溢れ、滴り落ちていった。ラインの顔に、黒の鎧に。鎧に落ちた聖水はまるで強力な

酸のように、白い煙を上げて表面を焦がしていた。ラインの顔に注ぐ水は、山に湧く清水のように涼やかに騎士の乾いた唇を濡らしていた。
ターナは大剣を振り上げた。
「まて、ターナ。ラインは戻った。魔道の術は解けておるぞ！」
後ろから大司祭の声が響いた。いつの間にか、彼女たちを包んでいた虚無が消えていた。景色は元の氷の鍾乳洞に戻っていた。
ラインも泣いていた。
それまでの氷のような表情が消えていた。唇を噛みしめ、じっと彼女を見つめて泣いていた。その涙は屈辱の涙だった。己が闇の傀儡となっていたことを恥じる魂が流す、血の涙だった。
ターナの涙が、聖水の力が、彼を魔道の闇から引きずり戻したのだ。兄弟殺しの大剣が、これ以上肉親が殺し合うのを見るのを拒んだのかもしれない。唇を伝わり口に含んだ聖水が、彼の心を縛り付けていた魔の鎖を解き放っていた。
「いいんだ。そのまま殺せ。魔道に堕ちた身で、これ以上生きていたいとは思わん。……いや、お前の手を借りるまでもない。この身の始末は自分でつけよう」
ラインは大剣の剣身をひっつかむと、自分の喉元に突き立てようとした。しかし、剣は微動だにしなかった。
ファドが摑んでいた。大剣の根元を片手で摑んで、大男はラインをにらみつけていた。
「どうせ死ぬんなら、邪霊獣の一匹でも倒してからにしてくれ。今は、猫の手でも借りたいんだ」

「そうじゃぞ、ライン。道に迷(まよ)ったことがある者のほうが、道を教えるのはうまいもの。その屈辱(くつじょく)は授業料のようなもんじゃ。第一、たとえお前が命果てようとも、わしは全霊(ぜんれい)をあげて蘇(よみがえ)らせる。これ以上、半身(はんしん)をなくした年寄りに力を使わせるでない」
肩の上のオードンもそう言って、のぞき込んでいた。
ラインの手から力が抜けた。
ターナは、憮然(ぶぜん)としている顔の前に大剣を差し出した。
「これは兄さんがラオス王より預かった物。お返しします」
ラインは、少し迷ったが、結局大剣を受け取った。
「すまないターナ、苦労をかけた」
両手で剣を持つと、二、三度手ごたえを確かめるように軽く振った。
「行こう、アリーシャ姫の居場所はこっちだ。こうなれば、わが身の恥(はじ)は武勲(ぶくん)で注ぐしかない。邪霊獣(じゃれいじゅう)じゃたりない、この剣が落とすのはガルダの首だ」
言うなり、側にいた原龍(プロト・ドラゴン)に飛び乗った。ターナたちもその後に続いて飛び立っていった。

ザウエルが大きく吠えた。
ブルードラゴンの二本の首が牙(きば)を剝(む)いた。
光と闇、二つの力を象徴(しょうちょう)する巨獣が激しくぶつかり合っていた。　その闘いを、胸が裂(さ)けるような思いで見ている女性がいた。

「駄目よ、アムル。ザウエルと闘っちゃ駄目」
アリーシャだった。囚われのミッドガルドの王女が水晶壁を叩いて叫んでいた。氷の間の天蓋近くにつくられた祭壇の部屋、そこに彼女はいた。バルコニーのように張り出したその部屋からは、虚無氷河を掘ってつくられた巨大な氷の間が一望に見渡せた。
眼の下にブルードラゴンがいる。待ちこがれていた龍の眷属がいる。が、彼女の叫びは二つの部屋を仕切る水晶壁が阻んでいた。
「やめた方がいい。その壁は不可逆の魔水晶。光も音も意志のうねりすらも、吸い込むだけで決してこちらから通すことはない。貴方の声も祈りも奴に届きはしない」
邪神官が笑った。いつの間にかガルダが入ってきていた。
アリーシャは生きていた。ザウエルが喰らったのは、邪神官がつくった幻影だった。いつものアムルなら気が付いたのかも知れないが、暗黒神の邪気が聖龍の判断を狂わせていた。
「貴方を拉致したかいがあった。どうしてラフィエルというのは、こうも感情に溺れるのでしょうか。たかが女性のために、再び先祖と同じ愚を犯そうとしている。しかしあの男の貴方への想いは、私の想像以上だったようだ。ご覧なさい。貴方を殺された怒りに、ザウエル様も圧倒されている」
ザウエルのねじれた二本の角から破壊の意志が撃ち出され、聖龍を粉々に砕いた。が、それはブルードラゴンがつくった残像だ。暗黒神の後方から火炎弾が襲ってくる。ザウエルはそれを弾き飛ばした。が、その後に襲ってきた聖龍本体の攻撃まではかわせなかった。ブルードラゴンの体当たりが暗黒神を大きく跳ね飛ばした。聖龍のスピードが、ザウエルを翻弄していた。

しかしアリーシャの顔は昏い。
「それも、狙い通りなのでしょう」彼女は言った。「なぜ、こんな手の込んだことを……。いっそ一思いに殺して下さい」
「それはできませんね。こんな氷の魔宮で人知られず死ぬなど、ミッドガルドの姫君にはあるまじき死に方。国民の眼の前で非業の死を遂げるほうが、美しい貴方には似合いです。聖龍ブルードラゴンの牙に裂かれるという劇的な死に方でね」
「ブルードラゴンに……」
「初代の復讐をあのブルードラゴンがする。太陽神の巫子が龍の牙に果てる様を、太陽神徒の皆さんにもぜひ見ていただきたい」
「じゃあ、あなたはロイの、ラフィエルの復讐が目的で……」
邪神官の語気が突然鋭くなった。
「復讐？　そういう風にしか物事をとらえられぬから太陽神徒は駄目だと言うのです。因果律に収める限り、血の衝動の真理は永遠に理解できない」
ガルダは謎めいた台詞を言うと、眼下の聖龍と暗黒神ザウエルの闘いに視線を向けた。何を企むのか、ミッドガルド軍に邪霊獣はやられ暗黒神も聖龍に押されているというのに、なぜかこの邪神官は満足げに二匹の闘いぶりを見ていた。
その背後、闇の奥から、のそりと一匹の邪霊獣が姿を現した。不死龍ヒュドラー、一〇万の首を持つ魔獣だ。

「どうした。お前には東の出口を任せてあるはずだ。こんな所に来ることは……」
そこまで言って邪神官は口を閉ざした。魔獣の異変を感じたのだ。
突然、ヒュドラーの腹から炎の刃が突き出た。邪神官は素早く身をかわした。眼の前に、魔獣の二つに裂かれた巨大な身体が倒れてきた。ヒュドラーの首が転がった。
その陰に、銀騎士が立っていた。
「一〇万本の首ってのはハッタリだったな。一万いかないうちにお陀仏だぜ」
ガルダが錫杖を構えた。
「シグルト、よくここまで来た。が、相変わらず甘いな。今の一撃で私を倒せばよかったものを」
邪神官が飛びかかろうとした時、後方の壁が崩れた。一瞬気を取られたガルダは銀騎士の姿を見失った。
振り向くと、水晶壁が斬り裂かれていた。アリーシャを護るようにシグルトが立っている。
「俺もそう思うんだが、先に斬るもんがあったんでな。大丈夫か、アリーシャ姫」
邪神官を牽制しながら、彼はアリーシャをつないでいた鎖を断ち切った。彼女は真っ青な顔で銀騎士にすがりついた。
「あなたもアムルの仲間ですか。だったら、早く彼に伝えて下さい。暗黒神と闘ってはいけないと」
「心配するな。あいつなら必ずザウエルを倒すよ」
アリーシャは激しく首を振った。
「それが、それがいけないんです。私をさらったのも、すべてはアムルの中の龍を目覚めさせ暗黒神と闘わせるため。この地までブルードラゴンをおびきよせるために、私を幽閉していたのです」

「どういうことだ」
怪訝な顔の銀騎士の前で、ガルダが笑い出した。
「まだ、わからないのか。私が何のためにアムルを、あの若き龍の男を鍛えあげたと思っている。できれば、かつての友を殺せるほどの氷の魂を持ってザウエル様の前に来て欲しかったが、まあ、あそこまで成長すれば充分だ。贅沢は言わないでおこう」
「じゃあ、今までの闘いはすべて捨石だと言うのか」
「あいつを殺すのが目的ならわざわざ邪霊獣を送り込むまでもない。この私が出向けば、龍に変身する前に倒す機会くらい幾らもあった。私にとっても、あの龍は貴重な素材だったのだよ。暗黒神に最強の肉体を与えるためのな」
「まさか……」
シグルトの中にある考えが浮かんだ。ガルダが言った。
「そのまさかさ。ブルードラゴンがザウエルを倒した時こそ、真の暗黒神の目覚めなのだ。見るがいい、そして、その時は来た！」
邪神官が指さした。
ザウエルの喉元に、ブルードラゴンが牙を突き立てていた。引き剥そうとする腕にもう一つの龍の顔が喰らいつく。みしみしと鈍い音がした。悲鳴と共にザウエルの口から鮮血がほとばしった。聖龍の牙が、ザウエルの身体を引き裂いた。暗黒神の動きが止まった。
――喰らえ！

アムルは、苦しむ暗黒神にとどめの火炎弾をたたき込んだ。業火の中にザウエルは消えていった。
最後はあっけないほどだった。
終わった。あとはガルダだけだ。暗黒神の血に染まった身体を震わせて、聖龍は高く吠えた。
ふと、天井近くの壁の向こうに人影が見えた気がした。
——アリーシャ⁉
確かに彼女が自分に向かって叫んでいた。
——生きていたのか⁉
その壁に向かって飛び立とうとした時、彼は背骨に強い衝撃を受けた。突然全身を激痛が襲った。身体中が喰われていく、そんな痛みだった。
(なぜだ、なぜ身体が動かない⁉)
アムルは焦っていた。自分の意志の中に何か異質なものが紛れ込んできた。龍の身体が、思うように動かなくなっていた。
ざくり。
心が喰われた。
ざくっざくっ。
意識に牙が食い込む。全身が喰われていく。
今度はアムルが悲鳴を上げる番だった。
彼は悟った。自分を食っているもの、意識を喰らっているもの、それが本当のザウエルだということに。

暗黒神ザウエル、それは意志を持つ血だった。只の意志ではない。強烈な破壊の意志だ。すべての秩序あるものを壊そうとする意識だった。生きている破壊衝動、それが〝魔〟の正体だった。
たとえ肉体は滅んでも、その血がある限り幾たびでも蘇る。より強い肉体を求めて、次々に宿主を変える寄生生物とでも言った方がいいかも知れない。古い肉体が滅びる時に、その血に触れたものは、たちまち意識を喰われ肉体を乗っ取られてしまう。
アムルは喰われていく中で、喰っているものの記憶を読んだ。それはかつてこの地で繰り広げられた、光と闇の闘いの記憶だった
〝魔〟は、闇の使いとして、大いなる虚空を渡ってこの地に降臨したものだった。光は、己の分身である太陽神アーリアと、聖龍ブルードラゴンを送ってこれに立ち向かわせた。
が、暗黒神を倒したその時、悲劇は起こった。
ザウエルの鮮血を浴びた聖龍が、ロイ・ラフィエルが、〝魔〟に侵されたのだ。肉体を乗っ取られそうになる寸前、ロイはアーリアに自分を殺すように頼んだ。意識エネルギー体である太陽神には〝魔〟の影響は出ていない。このままではブルードラゴンが暗黒神となってしまう。その前に自分を殺してくれ、この肉体を天に滅してくれ。ロイの血涙の願いに、アーリアは聖龍の首を刎ねた。
闇の勢いが強まり光がこの地を照らす力が衰えた今、〝魔〟は再びこの世に現れた。太陽神の力をもってしても完全に〝魔〟を消滅させることはできなかったのだ。虚無氷河の中に封じ込められた〝魔〟を、邪神官が蘇らせた。
その時に、ロイの無念、痛み、苦しみ、意志とは別に生きたいと願う本能、その他諸々の悪想念というべき

ものを実体化させた。それがデスガーデアンだった。

それが、ロイの悲劇の真実だった。

そして、愚かにも自分は再び闇の罠に陥ってしまったのだ。ロイの魂が、自分の過ちを繰り返さないようにつくらせた《聖剣》まで手にいれながら、一時の激情に暴走してしまった。

聖剣――！

アムルの意識が、力を取り戻した。

そうだ、自分には聖剣がある。聖剣の最後の封印を解けば、このままむざむざと意識を喰われはしない。

かすむ意識を奮い起こし、懸命に意志を張り巡らせた。

――あった！

荒れ狂う闇の牙の中に、おぼろに輝く青い光。そこに聖剣があった。彼は最後の力を振り絞って、残った意識をかき集めて自分のイメージを集中した。裸のアムルがそこにいた。襲い来る牙の攻撃に耐え、聖剣に向けて走っていった。

もう一歩、もう一歩で手が届くと思ったその時、後ろから突然、斬撃を受けた。

（お、お前は……）

もう一度、剣が襲ってきた。それをかわすだけの力は、もうアムルには残っていなかった。剣を手にした巨魁が、アムルを切り刻んでいた。

（無駄なあがきだ、小僧。この身体は儂らがいただく）

ロッグウェルだった。暗黒神に身を売ったロッグウェルの執念が聖剣を護っていたのだ。アムルの最後の

意志がぼろぼろと崩れていく。巨魁が高く嗤った。
(ついに手にいれたぞ、地上最強の肉体を。今こそ真の魔王が地上に君臨する時だ!)
アムルは、遠のく意識の中で、吠えるブルードラゴンの声を聞いていた。

25

ブルードラゴンの二つの顔が、みるみる変わっていった。その瞳には凶悪な光が宿り、口元も醜く歪んでいく。
「なにぃ」
シグルトが声を上げた。
「あれじゃあまるで、ザウエル……」
「その通り。どうやら、暗黒神の血がアムルの意識を喰らい終わったらしい。太陽神のいない今回は、もはや誰にもブルードラゴンを止めることはできない」
満足げにうなずく邪神官を、アリーシャがにらみつけた。
「いいえ、そうはさせません。私がいます。アムルは私が助けてみせます」
言うアリーシャの身体が、一瞬、金色に輝いた。彼女の決意がオーラとなって現れたのだ。
「よく言った。ここは俺に任せろ。ガルダの首は、このラフィエルの銀騎士が必ずとってやる」
シグルトが口笛を吹いた。翼龍が飛んできてアリーシャをひっつかんだ。
「行け、フーヴァニール!」

ミッドガルドの姫を乗せて、翼龍は氷の間(ま)目指して飛び去った。
銀騎士の炎の剣がガルダめがけて襲いかかった。
「無駄(むだ)だシグルト。貴様の間合いはすべて見切っている」
邪神官は半身を開いて、その攻撃をかわした。が、炎の刃は動いた邪神官の方へと食い込んできた。かわしきれずにガルダの仮面が飛んだ。
「無駄だガルダ。貴様の動きはすべて見切っている」シグルトが邪神官の声色を真似て、見栄(みえ)を切った。「ったく、いちいち格好つけやがって。そんなにブルードラゴンが欲しいんなら、てめえが変身すりゃいいじゃねえか。アムルは必ず俺たちが取り戻(もど)す！」
仮面を剝(は)がれたガルダが、その整った顔を一瞬(いっしゅん)怒りで歪(ゆが)めた。左の額から頬にかけて走っている傷が、赤く浮かび上がった。
「調子に乗るな、シグルト。死ぬのは貴様だ。この傷の怨(うら)み、忘れたことはない」
「人の顔を龍面(りゅうめん)にしといて、勝手なことを言いやがる。次の太刀(たち)は洒落(しゃれ)じゃない。今日は左目だけじゃすまさんぜ」
邪神官の錫杖(しゃくじょう)が疾(はし)った。白い炎が銀騎士にのびる。銀騎士も火龍魔斬(サラマンダー・ブレード)でこれを受けた。二人の気がぶつかり、弾(はじ)き合った。
「腕をあげたな」ガルダが言った。
「目標ができると努力する質(たち)なんだ。貴様と違ってね」
「努力しなければあがらぬ腕など所詮(しょせん)大したものではない」

邪神官が呪文を唱えた。
ふぐるる、と銀騎士のフェイスカバーの奥からこもった息の音が聞こえた。
気を練る。弓を引き絞るように意志を集中する。二人の闘気が部屋に満ちた。間合いがじりじりと縮んでいく。
先に仕掛けたのは、銀騎士だった。
火龍魔斬(サラマンダー・ブレード)を正面から疾らせ、同時に跳んだ。最初の炎を避けても、上から剣の斬撃で倒す。が、彼の狙いははずれた。
「遅い！」
邪神官は上にいた。いつ跳んだのか、銀騎士よりも高く宙を舞っていた。その無防備の背中めがけて、錫杖を振り下ろした。
背中から心臓を貫くはずだった。その時、風を巻いて何かが襲いかかってきた。思わぬ方向からの攻撃に、錫杖をたたき落とされた。鞭のような打撃だった。
得物をなくした邪神官めがけ、シグルトは剣をふるった。が、胸をかすめただけでかわされた。じゃり。奇妙な手ごたえがした。
これだけのことが、宙を跳んだ一瞬の間に繰り広げられた。
着地したガルダは、シグルトの姿を見て、何が襲ってきたのかを知った。
銀騎士の鎧を突き破って、尻尾がはえていた。鞭のようにしなる尾が、邪神官の錫杖を叩き落としたのだ。
邪神官の肩が小刻みに揺れていた。

くっくっくっく……。彼は笑っていた。
「全く楽しませてくれる。尻尾とはな、予想もしなかったよ」
銀騎士も笑い返した。
「びっくりさせてやろうと思ってな。貴様のおかげで、三本目の腕を手に入れることができた。礼を言うぜ。が、人のことは言えないだろう。今斬った手ごたえは人間の身体じゃない。てめえも何か隠してるな」
ガルダは、その暗緑のローブに手をかけた。
「さっき、なぜ私が聖龍に変身しなかったのかと聞いていたな。答えてやろう。試したさ、一番最初にな」
力まかせにローブをはぎ取った。
びっしりと鱗のはえた四肢、鋭く尖った爪、硬く角質化した腹。龍の軀がそこにあった。
「どうやら、ブルードラゴンに変身するのには、よほどの能力が必要らしい。無理をするとこういう軀になる。美意識に合わないので、あまり見せたくはないのだが、旧友へのはなむけだ。首が落ちる前にその目に刻みつけておけ」
ガルダの唇が奇妙に歪んだ。人間の笑いではなかった。
「貴様に私は斬れん。ザウエルだけが、魔の血を持っているとでも思ったか」
「まさか、貴様……」
ガルダの両腕から長い棘が飛び出した。手首から肘へ向けて緩くカーブを描いたその棘は、ダガーのように鋭く光っていた。
「角質化した皮膚だが、並の剣よりはよく斬れる。お前にできるのは、この手にかかって命果てるか、私を斬

って〝魔〟に意識を喰らわれるかのどちらかだ」
「ちっ！」
銀騎士は、兜を投げ捨てて龍面をさらした。彼の剣に一瞬迷いが見えた。その隙をつかれた。
じゃあっ！　鋭い息を吐いてガルダが飛びかかった。銀騎士は炎をとばしたが、その時にはもう懐まで飛び込まれていた。おそるべき跳躍力だった。ガルダの棘が光った。振り上げたシグルトの右腕が剣ごと切り放されて、宙に舞っていた。
「終わりだ」
ガルダはそう言うと、腕の棘でシグルトの喉を斬り裂いた。ぱっくりと喉が裂け、鮮血が噴き出した。とどめの斬撃だった。
ごぼごぼと血を吐きながらも、しかし銀騎士は笑っていた。
「……もう一つ、相討ちと言う手がある」
「なにぃ！」
離れようとした邪神官に、シグルトの残った片手がからみついた。
「……残念だったなぁ。俺は囮だ」
ガッと、シグルトが血を吐いた。同時に、上から炎の刃が降り注いだ。宙に舞った彼の右腕が放った火龍魔斬だった。
斬られる寸前に、シグルトは全身全霊の意志を右腕に込めた。自らの肉体を囮にして、最後の一撃に勝機を託した。ガルダの中に〝魔〟の血が流れていると聞いた時に、こうするしかないと即断したのだ。

絡み合う二人の龍人を、炎の刃が真っ二つに斬り裂いた。
――アムル、死ぬなよ……。
シグルトの上半身がずるりと床に落ち、続いて腰から下が倒れていった。
ガルダは胸から上だけの姿になっても、まだ生きていた。血を吐きながらも床をはって水晶壁の方へ近づいていた。信じられない生命力だった。
「死なんぞ、こんな所では死なん。まもなく闇が世界を覆うというに、むざむざ死んでたまるものか……」
左手で身体を起こすと右腕の棘で水晶壁を叩き割った。祭壇の間に、氷の風が吹き込んできた。
「暗黒神よ。最強の肉体を手にした絶対の破壊神よ。この邪神官の意志も喰らうがいい！」
叫びながら、いまや破壊の王となったブルードラゴンの元にその身を投げ込んだ。

アリーシャが翼龍の背に乗り氷の間に飛び込んだのは、ブルードラゴンが天蓋近くから落ちてきた何かを呑み喰らう瞬間だった。
一回り、龍の邪気が大きくなったような気がした。
（今のは、何……？）
気を取られたアリーシャは、龍が彼女めがけて炎を吐こうとしているのに気づくのに、一瞬遅れた。翼龍の叫びで我に返った。
「目覚めて、アムル！」
彼女の叫びもむなしく、渦を巻いて火炎弾が襲ってきた。天蓋から巨大な氷の塊が幾つも落ちてこなければ

ば、彼女はその火炎弾の餌食になっただろう。
「大丈夫、アリーシャ」
ターナだった。白い息を吐いて、横に並んできた。
「ターナ。アムルが、アムルが！」
巫子戦士はうなずいた。
「分かってる、兄さんから聞いたわ」
上方にラインがいた。翼龍に乗り大剣で天井を切り崩していた。さっきの氷はラインの仕業だった。ここに向かう途中、魔道に操られている時に知った邪神官の企みをターナに話していた。
「ライン！　よかった、元に戻ったのね」
アリーシャの顔に、微かに明るさが戻った。
「そうよ。闇が支配する心も絶対的なものじゃない。貴方は神殿巫子団の長、必ずアムルの意識を目覚めさせることができるわ」
「ターナ……」
親友の力強い言葉に、アリーシャの中に力が湧いてきた。ターナの顔を見て大きくうなずいたその時、彼女の姿が消えた。
ブン。キナ臭い匂いがして火炎弾が眼の前を通り過ぎた。
「ターナ！」
彼女は床に倒れていた。

横から襲ってきた火炎弾から自分が楯となって、アリーシャをかばったのだ。原龍からはねとばされて、床に落下していた。
「しまった！」
ラインが叫んだ。ちょっとした油断だった。
やっと追いついたオードンたちも、信じられない光景に呆然としていた。あまりにもあっけない巫子戦士の最期だった。
アリーシャは舞い降りてターナを抱き起こしていた。
彼女には信じられなかった。あのターナが、今くじけそうになった自分を励ましてくれた巫子戦士が、よりにもよってブルードラゴンの手により……。
「アリーシャ……」
「しゃべっちゃだめ」
彼女の制止にも関わらず、ターナは先を続けた。
「……アムルを救うのは、あなたしかいない。自分とアーリアを信じなさい」
彼女の指がアリーシャの手にからみついた。強く握り返した時には、もうターナの手から力は抜けていた。
「ターナ……ターナ、しっかりして!!」
が、彼女は動かなかった。アリーシャはブルードラゴンに叫んだ。
「アムル、何をしているの。目覚めてよ、お願い！」
アリーシャの心の奥から大きなうねりが起こってきた。

そのうねりは金色の矢となって、ブルードラゴンの胸を貫いた。
闇に、光が弾けた。弾けて、彼の名を呼んだ。
「アムル、何をしているの」
その声は、懐かしい響きだった。
光が彼に手をのばしていた。
「さあ、起きなさい」
その顔は、美しい女性だった。いつかどこかで見たことのある顔だった。差し出された手を摑もうとするが、自分の手がどこにあるのかさえ分からない。
「さあ、アムル!」
叫ぶ彼女が、不意に眼の前から遠ざかった。光は闇の中に消えていった。
――かあさん!
消えてから、その顔が誰だったのか思い出した。
眼の前を、光が次々に駆け抜けていった。
光は父の顔をしていた。光は友の顔をしていた。ジン、ノザック、この闘いの中で死んでいった部下たち、そして銀騎士シグルトが、口々に彼の名を呼びながら、闇の中に消えていった。
――シグルト、まさかお前も……。
崩れていく意識が震えた。震えは、新たに飛んでくる光を見た時、叫びに変わった。

――ターナ！
最後の光はターナだった。眼の前を巫子戦士が通り過ぎようとしていた。
「アムル、あなたが最後の希望よ！　さあ、目覚めて！」
――うおおおおおおおおっ！
アムルの両の腕が、光を抱きとめていた。走り抜けようとするターナをしっかりと受け止めていた。
（ほう。まだ意識があるのか。しぶとい奴だ）
ロッグウェルの意志が再び凝り固まろうとしていた。
アムルの手の中で、ターナが微笑んだ。
「聖剣よ、受け取って」
ターナの姿が光に変わった。手の中で一条の輝きに変わった。
――俺は……俺は、まだ死ねん！
ロッグウェルが襲いかかってきた。
――死んでたまるかぁあっ！
アムルの手から光の奔流が放たれた。
ロッグウェルの意志は、跡形もなく吹き飛んだ。
光の奔流は闇を裂き、青い牙に変わった。
龍の炎が、ミッドガルドの兵たちを焼いていた。

なんとか氷の間で食い止めようと攻撃する飛空龍隊だが、ブルードラゴンの前には赤子も同様だった。
「氷だ。氷詰めにしろ」
ファドの指示に兵士たちは原龍を駆って氷の天井を切り崩すが、その二つの首を醜く蠢かせて吐く龍の炎に、一瞬のうちに溶かされてしまう。
「ファド下がれ。これ以上は結界ももたんぞ」
オードンと巫子たちは龍を止めるために結界を張っていた。が、彼らの精神力にも限界が来ようとしていた。
ザウエルの顔をしたブルードラゴンが、ターナの亡骸を抱えたアリーシャににじり寄った。
「今度は貴様だぞ、アリーシャ。こうなれば皆殺しだ。光の巫子はすべてこの闇の宮殿で滅ぶのだ」
「あの声はガルダ……」
大司祭がうなった。
龍の声は邪神官ガルダのものだった。彼の最後の望み通り、いまや邪神官の意志もブルードラゴンと一体化していた。おそるべきガルダの執念だった。
「死ねい！」
二つの龍の首が火炎弾を撃ち出そうとしたその時、首の付け根から青い光が噴き出した。
ギルギアアアーン！
光は高く叫ぶと、龍の顔になった。ブルードラゴンの中央にもう一本、新しい首が生まれていた。
「アムル！」アリーシャが叫んだ。

三つめの首だけは、元の精悍な聖龍の顔だった。
「まさか……」
二つの龍は、一瞬信じられないように、三本目の首を見たが、すぐにその邪悪な牙を剝いて笑った。
「それで〝魔〟の力から逃れたつもりか。甘いわ。もう一度喰らってやるまでのこと！」
二本の首が、真ん中の首に喰らいついた。苦痛に聖龍の顔が歪んだ。
「ガルダ、そう、貴様の思うようにはさせんぞ！」
上空からラインが大剣を構えて飛びかかってきた。
「待てライン。へたに斬ると〝魔〟の血の洗礼を受けることになるぞ」
大司祭が叫んだ時には、ラインの剣は真ん中の首を切り落としていた。
「おお」
ミッドガルドの兵たちは声を上げた。
龍の首から血は一滴も噴き出さなかった。大剣から溢れる聖水が凍って、傷口に聖なるガードをしていたのだ。
地上に転がった聖龍の首は、たちまちアムルの姿に戻った。が、必死の脱出だったのだろう。今の彼は一糸まとわぬ姿だった。
「アムル！」アリーシャが駆け寄った。
「無事か！」ラインが叫んだ。
「すまん、ライン！」アムルはうなずいた。

ブルードラゴンが低く吠(ほ)えた。
「まったく、しぶとい男だ。が、それでどうする。命からがらこの龍の身体より逃げ出して何ができる。お前の意志の殆(ほとん)どは私が喰らった。いまさら聖龍に変身することは不可能だ。聖剣も持たぬお前では、私には勝てんぞ」
「さあて、そいつはどうかな」
アムルの身体が青く輝きだした。
「いいことを教えてやろう、暗黒神。たしかに〝魔〟は不可侵(ふかしん)だ。が、かつてその〝魔〟を自分の中に取り入れ、意志でコントロールすることに成功した種族もいた。〝魔〟が持つエネルギーを自分の意志で操(あやつ)る。それがラフィエル族だ。その結果、彼らはとてつもない力を得ることができた。貴様ら〝魔〟を滅(ほろ)ぼす力をな！」
それは聖剣が語った最後の真実だった。
「馬鹿を言え！」
ブルードラゴンが吐く炎が、アムルを包んだ。龍は高く嗤(わら)った。
「見ろ、口先ばかりの若造よ！　この魔王の炎の前に敗れぬ者など誰もおらんわ」
その嗤いが途中で止まった。炎の中に青い光が輝いていた。
「見せてやろう、暗黒神。これが聖剣の力だ。六つの封印(ふういん)を解いた龍の力だ。今、聖剣は俺の心の中にある」
アムルの声が炎の中から響(ひび)いた。青い光の中に、六つの赤い瞳(ひとみ)が輝(かがや)いていた。ちょうど聖剣の柄(つか)に六つ赤い宝玉(ほうぎょく)が並んでいたように、赤い光が一際(ひときわ)明るく輝いていた。
炎が、アムルを包んだ巨大な炎が、龍の形になろうとしていた。六つの光はそれぞれ二つずつに分かれて、

三つの首の瞳になった。
これが〝聖龍転生(ドラゴン・スピリット)〟だった。最後の封印を解いた姿だった。太陽神の魂(たましい)と龍族の血、そしてアムルの意志が一体となり真の聖龍となったのだ。
「滅びよ、暗黒神!」
炎が、邪龍を呑(の)み込(こ)んだ。
魔の血の一滴までも燃やしつくしてしまうかのように……。

エピローグ

「どうしても行くのか」
若者は黙ってうなずいた。
「そうか。お前もおらんようになるとミッドガルドも寂しくなるのお」
老人は大きく息を吐いた。
「そんな顔をしないで下さい、オードン様。まだこの大陸には闇の残滓があちこちに残っています。私はそれを見つけ一つ一つ退治していかねばなりません。一度魔に堕ちた男の、それが今の使命です」
「あやつに代わって、のつもりかな」
若者は答えない。老人の顔に柔らかい笑みが浮かんだ。
「まあ、よいわ。確かにお前の言う通りじゃ。人の力も馬鹿にはできんことを闇に教えてやるのは、お前が一番の適任じゃろう。但し、生きろよ。生きねば意味はないぞ」
若者はうなずくと、翼龍の背に荷物をくくりつけた。
「みんなによろしくと伝えて下さい。特にシルドアレンのたくましい御婦人方には。それじゃ。いくぞ、フーヴァニール！」
翼龍の背を大きく叩くと、若者は飛び立っていった。
こうしてライン・フォン・ベルバードは、ミッドガルド王国から姿を消した。

ターナが眼を覚ましたのは、ミッドガルド城にある寝室の一つだった。
「よかった。気がついたのね」
横で微笑むアリーシャの眼が赤くなっているのを見たターナは、それが寝ずに看病してくれた証であることを悟った。
「私は……」
「助かったのよ。あなただけじゃない。ダークキャッスルで傷ついた兵士のほとんどが、ここに運び込まれて治療を受けているわ」
見回すと、まわりにずらりとベッドが並び兵士たちが横たわっていた。
「でも何故……」
助かるような傷ではなかったことは、自分が一番よく分かっている。ターナは、ぼんやりとアリーシャを見た。一段と美しさが増したようだ。
ターナは、ハッとした。
「アムルは、アムルはどうしたの!?」
アリーシャは起き上がろうとする彼女の胸に手を置いた。
「大声を出さないで。傷に響くわ」
彼女の手から、暖かい生命力の気が注ぎ込まれてきた。もう一度ターナは横になった。
アリーシャがゆっくりと喋り始めた。

「あの人は眠りについたわ。暗黒神を倒し、貴方たちを死の淵から呼び戻すことで力のすべてを使いきってしまった。今は、あの氷の国で眠っているわ。一本の剣に姿を変えて……」
氷河の中に中に眠る聖剣の姿が、ターナの眼の前に浮かんできた。
「そんな、それじゃ、あなたの……」
あなたの想いはどうなるの。言おうとするターナの前に、アリーシャは手の平ほどもある青い宝石を差し出した。
「触ってみて」
そう言って微笑んだ。
「これは……？」
「〝龍の魂〟、彼の意志のかけらよ」
そう言ってターナの手に宝石を乗せた。信じられないことに、その石はゆっくりと鼓動をしていた。規則正しい律動が、手の平を通じてターナの魂に響いてきた。
――アムル。
ターナは一瞬、このままいつまでもこの石を抱いていたいという激しい衝動に駆られた。しかし、すぐにアリーシャの白い手に宝石を戻し、その上に自分の手を重ねた。
「今度は、あなたが彼を護る番よ。必ず、龍が目覚める時は来るわ。その時まで、この〝龍の魂〟はあなたが護るの」
アリーシャは大きくうなずいた。

急に部屋の中が明るくなったように感じられた。
窓際のベッドの方からどよめきが起こった。怪我人たちが、身を起こし空を見上げて、何事か叫んでいる。
「まさか……」
二人は顔を見合わせた。
アリーシャに支えられて、ターナも窓辺に近づいた。
東の空に、朝陽が赤くはっきりと輝いていた。
何年ぶりだろうか。灰雲が消え、太陽がその姿を直接地上に覗かせていた。シルドアレンの人々には、何物にも代えがたい勝利の報酬だった。
「ああっ」
アリーシャが声をもらした。彼女が持つ宝石にも陽の光は乱反射して、青い輝きが彼女を包み込んでいた。
ターナは見た。その青い光の中で、あの龍の男がアリーシャをかき抱くのを。
一時の自然の気まぐれが起こしたいたずらかもしれない。が、ターナにはそれが、最後の龍の男に対しての太陽神のささやかな贈り物に思えてならなかった。
東の空に輝く朝陽を見つめて、彼女は若き龍の男の瞳を思い出していた。
この晴れた空に青い龍が翼を広げたら、どんなにか美しいだろう。ターナには、必ずその日が来るような気がしてならなかった。

《小説ドラゴン・スピリット　—THE END—》

あとがき

人が龍になる。龍になってモンスターを倒していく。そういうゲームを見たのは、いつが最初だったろうか。

R－TYPEはおろかゼビウスさえろくにクリアできないシューティング苦手の僕も、そのゲームのタイトルには強烈にひかれるものがあった。

〈ドラゴン・スピリット〉

――龍の魂。その魂が人間を龍に変えるのか。では龍の魂を宿した男にはどういう運命が待ち受けているのか。

タイトルを聞いただけで、さまざまな思いが頭の中をかけめぐる。

その謎を解くために筐体の前に座った僕だが、次々に襲い来るモンスターの攻撃に自機のブルードラゴンはアッという間に朽ち果て、うず高く積み重ねられていた百円玉も硬貨投入口という虚無氷河に瞬時に消えていってしまった。

どうやら自分は龍の魂とは縁もゆかりもない男らしい。

その時はそう思い、軽くなったジーパンのポケットを叩きながらゲーセンを離れた。

が、龍は僕を見捨てなかったようだ。

こんな形で〈ドラゴン・スピリット〉と関わりあえるようになろうとは夢にも思っていなかったが、僕は僕

なりに龍の伝説に挑んだつもりだ。
楽しんでいただければ幸いである。
この小説の設定は、ゲーセン版、PCエンジン版、ファミコン版の三つがゴチャマゼになっているが、その下敷になっているのはナムコの開発部が作った設定によるものだ。かなり勝手に付け加えたり作り直したりした部分もあるが、それを笑って許してくれたナムコの石川氏、吉岡氏には深く感謝する。
プロローグの第一行を書き始めてからここまで、ゆうに一年以上が過ぎてしまった。その間、進行の遅れにも騒がずに遠くから暖かく見守ってくれた（眼鏡の下の目は笑ってなかったのかもしれないが）双葉社CTR編集部諸角編集長、時間に追われて混乱する作者に的確な批評と励ましと何杯かの珈琲とおまけに何個かのケーキさえ与えてくれたレッカ社の中田氏と小田島嬢にも同様に感謝の念を捧げたい。
そしてなにより、この本を読んでくれた全ての皆さんに。
——龍の魂があなたとともにあらんことを。

一九九〇年十一月四日　　不破悠介

FUTABASHA FANTASY NOVEL SERIES

DRAGON SPIRIT

In Midguld a medium said, "When a bright sun shine shaded away,
a night mere had come from the deep darkness···"
That prophecy made people be fearful, and terribly that became just a real thing.
In Such case, people couldn't but believe "a blue wing"
Then, beyond a distant way, a hero Amuru had arrived.
He had the sign of a dragon's relation in his eyes,
which seemed as "a corona eyes".
Amuru changed his figure into a blue dragon,
and just he got fighting to save the land of Midguld.

［小説］
ドラゴン・スピリット
【蒼き竜と赤輪の勇者】

ISBN4-575-23074-X C0093 P1000E □双葉社 定価1,000円(本体971円)